
IS インフィニット・ストラトス ~白がある黒がある~

焼肉定食

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～白がある黒がある～

【Nコード】

N7256S

【作者名】

焼肉定食

【あらすじ】

本来女性しか起動させることができない最強の兵器を起動できたたった二人の男、織斑一夏と篠ノ乃流。IS学園に入学することになった彼らに待ち受けるものとは？周りが全て女子の学校で繰り広げられる二人の男のお話。

前書き

よく来てくれた。

騙して悪いが、息抜きなんadena、更新は期待しないでくれ。

この小説には以下の要素が含まれる。

- ・タイトルがてきとー、随時募集中
- ・オリ主
- ・若干のアーマードコアとのクロス要素
- ・ちよい強め（成長速度が多少速い）
- ・設定が曖昧なので、矛盾が出る可能性あり
- ・遅筆なのに加えて息抜きなので、更新が期待できない
- ・そもそも作者に文才がないので駄文
- ・序盤はA Cの方の影が薄い、ってかずっとかも
- ・リンクス達は・・・出るか未定
- ・A Cの方は知らなくても読めるようにするつもり。

こんなところか。

この項目は随時、追加される可能性がある、そのことを考慮しておいてくれ。

それでもいいなら先に進んでくれ。

感想を待っている。

プロローグ

暗く、暗く、深い闇に沈んでいく。
体は重い、意識だけがはつきりとしているのにその意識すら沈んでいく。

怖い。

どこまで落ちるのか。

すでに何度も何度も味わった恐怖であり、絶対に慣れることなどないであろう事象。

このまま沈んでいけば俺は　ぬのだろうか。

ただ普通に暮らしたいだけなのに、世界は俺から光も友も家族との触れ合いも奪うのだろうか。

こうなる度に白衣の人が呼ばれ、これ以上は無理だと言われる。

こうなる度に双子の妹も、友人も、姉の友人も、姉自身も、俺を見に来てくれる。

皆が諦めるたびに姉は俺を助けてくれた。

だけど皆浮かぶ表情は暗い表情ばかりだった。

悲しい、こんな俺を見ているのがつらい、何もできない自分が齒がゆいといった感情を表していた。

たった一人の人間を除いて。

怖い、怖い、　ぬのは怖い、皆との繋がりが　えるのが怖い

人並みの幸せを味わいたい、太陽の光を浴びて、友達と遊び、人が経験するであろう一生を。

そのためなら

「やあ、なつくん」

暗い部屋だった。

日光を遮断して俺は起きて人工の光を浴びることもできなかった。姉が尋ねて来ても口を動かすという些細な行動ですらつらい。

いつもの姉さんと様子が違った。

いつもならこんな状態になった俺を見た途端行動を起こしていた。

「うん？無理に話そうとしなくてもいいんだよ、つらいよね？痛いよね？悲しいよね？苦しいよね？」

そして俺は涙を流す。

そのどれもが事実であり、逃れたい現実だからだ。

「ここで東おねーさんは選択肢を三つあげよう」

「一つ、このまま何もせず、ただ同じ毎日を過ごして今と同じ苦痛を味わい、恐怖を味わい続けるか」

見せた表情は、暗い部屋であるにもかかわらず、はっきりとわかるもので。

「二つ、今、ここで何もせず　ぬか」

見せた表情は、悪魔の醜悪な笑顔とも天使の穢れが無い笑顔とも取れる表情で。

「三つ、この天才、篠ノ之東の頭脳によって普通の人間として過ごすために実験の対象となるか」

そして提示された選択肢は俺にとって悪魔の誘惑とも天使からの施しとも言えるようなささやきで。

それは俺のことを心配、いや、興味の対象だからこそ生きていてほしいというような願望でありながら。

非人道的で、別にどの選択肢を選び、どうなってもかまわないといった選択肢で。

そして選んでも、何も選ばなくても、この人は行動を起こすのだから。

「どれがいい？」

それでも、最初から決まっていたんだ。
手を伸ばす、すべての力を振り絞って。

俺はどんな醜く、卑怯で、卑劣な選択だったとしても、その
手を取るだろう・・・。

第一話 何が・・・どうしてこうなった

「全員揃っていますね。それじゃあSHRをはじめますよー」

身長はやや低め、服はサイズが合っていない、黒縁眼鏡も大きいのかずれている。

『子供が無理して大人の服を着ました』見たいな女性、副担任の山田真耶先生である。

こちらの制服を着ていても全く違和感がなかった。むしろ教師なのが不思議なくらいである。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・」

シーン。

布ずれの音すら聞こえない。

というか聞こえる音は俺の心臓の音だけだった。

(どうしてこうなった・・・)

足のつま先から頭のとっぺんまで病的なまでに白い少年が頭を抱え、顔に汗を浮かべている。

彼の名前は篠ノ之しのの流ながれ、髪の毛は真っ白で首筋を隠す程度に伸びている、肌も男とは思えないくらい真っ白、目の色は赤色と、アルビノとも言つような外見で、とても病弱そつな外見のだが、体はそこそこに肉がついている。

元病弱だが。

ふと右隣を見ると俺の親友である織斑おりむら 一夏いちかも俺と同じような状況

だった。

当たり前である、今、この場にいる生徒は俺と一夏以外の人間はすべて女子だからだ。

今日は高校の入学式、それは全く問題がない。

むしろ入学できたことを喜ぶべきだろう。

周りがすべて女子という事を除けば、だが。

(どうしてこうなった・・・)

こうなった経緯を思い出す。

中学三年の二月中旬、高校の受験日だった。

一夏とやたらと遠い試験会場まで行き、着いたのは良いのだが・・・迷った。

一夏曰く「何この常識的に作らない俺カッコイイ！」みたいな会場で、真面目に迷ったのだ。

中学三年にもなって迷子とかマジねえよ、という状況で視界に入っただ扉を開いたのが駄目だったのか・・・。

「あー、君たち、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りられないからやりにくいったらないわ。まったく、何を考えて・・・」

俺たちの顔も見ず、ぱっぱと指示と愚痴だけ言って去っていった女性。

「着替え？何で着替えなんかするんだ？」

と、一夏が聞いてくる。

「ん〜、カンニング対策じゃないか？ほら、何回か問題になったことあっただろ」

と、思ったことを言った。

「・・・ん？何かやたらと見覚えのある服だな・・・？」

そんなことを思いながらも目の前のカーテンをくぐると、これもまたやたらと見覚えのある物体が鎮座していた。

「なあ・・・流、あれ、IS・・・だよな？」

「ああ、ISだな・・・」

正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での使用を想定されたマルチフォーム・スーツ。

が、製作意図など真っ向から無視するように『兵器』として運用されているパワードスーツ。

そして俺はともかく、一夏には全く関係のない代物だった。なぜなら、

「男には使えないんだよな、確か」

そう、女性専用だからだ。

ISは女性にしか使えない。

そう思つて二人揃つて触れる。

キンツつと金属音がした。

「・・・は？」「な、何だ？」

意識に直接流れ込んでくるような情報。

なんか色々なパラメータ、周囲の状況を数値で知覚する。

そう、動いたのだ、動かせたのだ、俺と、一夏が。

そこからはあれよこれよと世界でトップニュースになるわ実験体になつてくれ！だの言い寄つて来るわと。

そして極めつけがこれ、このIS学園への入学だった。

「じ、じゃあ、自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

こうして周りがドキッ！女だらけのIS学園、ポロリもあるよ！生活が幕を開けるのだった……。

（ ） どうしてこうなった……（ ）

男二人は揃って同じ事を考えていたのは完全に余談である。

第二話 馬鹿者が・・・自己紹介

くそう、どうすればいいんだ・・・。
・・・って、ん？

ふと隣を見ると一夏が立っていた。

自己紹介してるんだったなく、ってもう一夏かよ。

とか考えていると俺に視線を向けてきたので即座に顔の向きを変える。

悪いな一夏、俺も俺で精一杯なんだ・・・。

左を見ると我が双子の妹、篠ノ之ささの 篝かほがいた。

やや吊り目で、リボンで結んだポニーテールが特徴の和風美人だった。

電話などはちよくちよくしていたのだが、実際に顔を見るのは六年ぶりだった。

が、愛しの一夏のピンチだというのに腕を組んで窓の外を見ている。

一夏が少し不憫に思えてきた・・・。

そう思いながら一夏に視線を戻すと、何かを決心したように深呼吸していた。

ついに行くか！と思ったら、

「以上です！」

コケた。

比喩表現でもなんでもなく、数人の女子がずっこけた音がする。

「あ、あのー・・・」

山田先生なんか泣き入ってるじゃねえか。

どうするんだよ。

ってかそれは自己紹介じゃねえ。
と、内心馬鹿にしつつも俺のターンになったらどうなるのかと考
えていると

スパアン！

え？なに今の、すごい音しましたよ？

一夏が頭を押さえているので、何かで頭を叩かれたのだろうとい
うことは理解できたのだが……。

「挨拶も碌に出来んのか、馬鹿者が」

聞き覚えのある声だった。

まさかと思いながら目を向けるとそこにいたのは黒のスーツにタイ
トスカート、鮮やかな黒髪、すらりとした長身、狼を思わせる吊り
目の女性がいた。

「げえっ、関羽!？」

「げえっ、呂布!？」

ジャーンジャーン!

何処からともなく銅鑼を鳴らす音が聞こえてきた気がした。

スパアン、スパアン!

出席簿で叩かれた。

超いてえ。

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者どもが」

織斑家に預けられている俺が随分世話になっている人物。

おしむらちひゆ
織斑千冬。

一夏の実の姉である。

「クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな、山田先生」

「い、いえ、副担任の仕事をしただけですつ。会議お疲れ様です」

涙目と涙声は何処に行ったのやら、何やら熱っぽい視線を千冬さんに向けている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち一年生を進級するまでに使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことにははいかYESで答える。逆らつてもいいが、言うことは聞け。」

あなたは暴君ですか？

しかし間違いなく一夏の姉であると証明された。

「キャ ！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずつとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですよ！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「千冬様×山田先生・・・アリね！」

ワーワーキヤーキヤー騒ぐ女子たちをまるで俺の姉を見るような顔で見る。

そして最後に発言した奴、出席簿で殴られる。

「・・・毎年毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させて

いるのか？」

ああ、これはマジで鬱陶しがってるな。

だがしかし、人気はお金じゃ買えないんですよ？

もうちょっと優しくしてあげても良いのでは？

と思っていたのだが。

「きゃああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして！」

「どんだけ人気なんだ、千冬姉……」

「女の子の本気を垣間見た気がする……」

俺の考えは甘かったらしい。

このクラスどころか学校の女子のほとんどは千冬さんに罵られようが馬鹿にされようが笑顔を浮かべる気がする。

千冬さんが担任ということに、俺も一夏も驚いていたのだが、女子たちの黄色い声で、逆に落ち着いた。

「で？挨拶も満足に出来んのか？馬鹿者が」

辛辣、棘のある言葉、極めて手厳しい。

「いや、千冬姉、俺は……」

スパアン！

本日三度目の出席簿アタック。

これで一夏の脳細胞は約一万五千個死んだことになる。

「織斑先生と呼べ。」

「・・・はい、織斑先生」

千冬さんと呼ぶのは駄目か、ならば

「いや、織斑千冬さん、何であなたが」

ドゴツ！

やばい、ものすごく鈍い音がした。

クリティカルヒットしすぎだろ。

「織斑先生だ、馬鹿者が。一々フルネームで呼ぶつもりか？お前は。」

「・・・申し訳ありません、織斑先生」

このやりとりが不味かった。

少なくとも知り合いだということがバレた。

「え……？織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「禁断の恋に、さ、三角関係っ!？」

「それじゃあ、ISを使える男っていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ、代わってほしいなあっ」

三角関係とか言っただ奴、表出る。

そして出席簿の餌食になっ飛ばしてしまえ……。

最後のは放っておくとして、俺こと篠ノ之流と親友、織斑一夏は世界で初めてISが使える男として、ここ、公立IS学園にいる。

「・・・・・・・・」

ふと、室内の興奮がさめやらぬ教室から、低温の視線を感じる。視線を辿ると外を見ていたはずの篤がこちらを見ていた。呆れを含んだ視線を俺と一夏に向けているのがわかる。

「次、篠ノ之兄、自己紹介をしろ」

何ですかその呼び方。

しかしやれと言われた以上、この嫁の貰い手が心配な鬼の前では命令は遵守しなければならない。

スパアン！

「今失礼なことを考えたな」

「・・・申し訳ありません」

心を読まれるとかもつどうしると。

はあ、まあ、適当に自己紹介するか。

適当の本来の使い方が間違っているが。

「えー、名前は篠ノ之流、俺の後に自己紹介するであろう篤とは兄弟だ、呼び方は好きに呼んでくれ。趣味はISの技術研究、髪の毛とかが白いのは生まれつきだ。とりあえず、一年間よろしく」

「お〜」

歓声とともにパチパチと拍手が聞こえる。

一夏とは違うのだよ一夏とは。

とりあえず俺と一夏の自己紹介が終わり、他の女子たちも簿を含めて自己紹介していく。
そしてチャイムが鳴った。
どうでもいいけどどの学校もチャイムの音は同じだね。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後の実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ、良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。答えははいかYESでいい」

なんとという鬼軍曹。

これからの学校生活、正直不安で仕方がない。

「はぁ……」

思わずため息をついてしまう。

スパアン！

叩かれた。

「返事はどうした？」

「……はい、織斑先生」

鬼だ……。

第三話 再開は・・・幼馴染が優先

「あー」「はあ」

隣で一夏がギブアップとでも言うような声を出し、俺はため息をついていた。SHRの自己紹介と一時限目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。

俺と一夏以外が全て女子。世界的なニュースにまでなったので当然、この学園にいる人は皆俺と一夏のことを知っている。

現在、廊下には、他のクラスの女子や二、三年の先輩ですら集まってきている。

本来ならば、男として喜ぶべきなのだろうが、あまりの多さにむしろ食傷気味である。

唯一の救いかどうかはわからないが、女子たちが話しかけてこないことだ。

話しかけてきなよ、という空気と抜け駆けする気じゃないわよね？という空気が入り混じっている。

くそう、誰かヘルプ、下手に身動きできない。

「・・・ちよっといいか」

と、祈りというか願いが通じたのか、突然話しかけられた。 筈に。

「ん？」

「・・・筈？」

「・・・・・・・・二人に用がある、廊下でいいか？」

実に六年ぶりの再会となる双子の妹、篠ノ之箒だった。髪型は昔から変わっていないポニーテール。肩下まである髪を、白いリボンで結んでいる。

「あ、ああ」

「あいよ」

廊下に歩き出した箒について行く。のだが、集まっていた女子たちがモーゼの十戒の如く、道を空けていく。

廊下に出たのはいいんだが半径四メートルほどの包囲網が形成されている。

これじゃあ教室でしゃべろうが廊下でしゃべろうが一緒だろう。

「そういえば」

そんな中一夏が思い出したように話し出す。

妹よ、一夏に会えたのが恥ずかしかったり嬉しすぎてテンパってるのはわかるが、せめて話は自分から振ろうぜ？

どこぞの中東一帯が勢力圏の企業所属のIS操縦者で数学者なあいっならこう言ったに違いない。

新しい、惹かれるな。と

「去年の剣道の全国大会で優勝したんだってな、おめでとう」

「・・・・・・・・」

さすが天然の女たらし、すでにフラグを立てている相手に対してさ
らに立てるか。

「流」

「・・・どうした？ 箒」

口をへの字にして顔を赤らめた箒が俺を呼ぶ。
言いたいことはなんとなくわかるぞ。

「私と別れてからも、こいつはこんな調子だったのか？」

「そうだな、いつもこんな調子だったよ・・・」

そこで何を言ってるのかわからない、という顔をしている一夏を思
わず殴りたくなった俺は悪いだろうか？ いや、悪くない。
箒もこいつの何処に惚れたのか。

いや、こういう臆せず恥ずかしがりながらも褒めたりんだりする
所なんだろうが。

「そ、それに、何でそんなこと知ってるんだ」

「何でって、新聞に載ってたし、一緒に見たよな？ 流」

いや、見たけどさ。

「な、何で新聞なんて読んでいるんだっ」

いや、それくらいは読ませてやれよ・・・。

「あー、あと」

「何だ!？」

ものすごい剣幕だ、嬉しくて興奮してるのはわかるがもちつけ、じやなかった、落ち着け。

「久しぶり、六年ぶりだけど、すぐ籌ってわかったぞ。なあ流」

「え……」

まったくこいつは……。

「本当にな、久しぶり、籌」

六年ぶりの再会、やはり多少の気まずさはあったが、六年前とんなら変わらない。

俺たちは俺たちだ。

「ほら、髪型も一緒だったしな」

一夏が自分の頭を指先でつつきながら言った。
籌はそれが嬉しいらしく、モジモジしている。
……俺、邪魔ですか、そうですか。
教室に戻ろう。

「あー、俺は先に戻ってる。ごゆっくり」

はぁ……。

会えたのは嬉しいんだが一夏の方が優先される……。

お兄ちゃん悲しいです。

「ど、どうしました？篠ノ之君」

「え？ああ、山田先生ですか、いやちょっと世界は理不尽だなと」

兄を差し置いて妹と親友が桃色空間を作ってるんです。
砂糖を吐きそうなくらいの。

「そ、そうですか。な、何かあったら遠慮なく頼ってくださいね？」

「あー、まあ、そのときが来たら」

・・・正直頼りになることはほとんどないと思える。

「ほ、本当ですか！？絶対ですよ！？」

ちょ、怖い、怖い、顔近い。

目が血走ってます・・・！

「は、はい。わかりました、わかりましたから、顔近いです」

「え？あ、はわわ、すみません」

こんなやり取りをしているとチャイムが鳴った。

全国共通、授業の始まりと終わりを示すもの。

今回は始まりを示している。

篝も顔を赤くしながら戻ってきた。

一夏はというと扉の前で何やら考えているようで。

スパアン！

そんな所に立っているものだから千冬さんの出席簿アタックを食らっていた。

「さつさと席に着け、邪魔だ」

「・・・はい、織斑先生」

これで一夏の脳細胞は二万個死んだ。
というか邪魔って・・・、鬼だ・・・。

第四話 代表候補生は・・・高飛車

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したISの運用は、刑法によって罰せられ」

先ほど見たオロオロした山田先生は嘘のようにすらすると教科書を読み進めていく。

一応、教師だということを再確認する。

勉強の必要は正直あまりないのだが、やらなかったら千冬さんが怖いのと、基本から復習するという意味で黒板の内容や、先生の言葉をノートに写していく。

のだが、それよりもなによりも、右隣、一夏が気になって仕方がない。

とてもものすごくひじょうにきになる。

左、箒を見る。

うん、しっかりノートに黒板の内容などを記入している。

右、一夏を見る。

保健室に行く？と勧められるほど顔は真っ青、汗ダラダラ、教科書をめくっては・・・ナニコレワカラナイといった表情をしている一夏あー、こいつまさか・・・。

「お、織斑君、だ、大丈夫？」

そんな様子の一夏を心配に思ったのか、一夏の隣の女子が話しかけた。

期待と緊張、両方が混ぜ合わさった顔をしていた。

「あ、いや。何でもないんだ。ゴメン」

「あ、そ、そう」

話すことができなくてガツカリしたようなホツとしたような表情を浮かべてノートの記入作業へと戻る女子。

「織斑君、何かわからないところはありますか？分からないことがあつたら聞いてくださいね。何せ私は先生ですから」

そんなやり取りに気づいた山田先生がその身長に似合わない大きい胸を張りながら馬鹿のためにわざわざ聞いていた。

何かを考える表情をした後、一夏は名案だ！とでも言うような顔をして返事をした。

「先生！」

「はい、織斑君！」

両方ともやる気に満ちているな、ただし、次の発言に先生の自信は木っ端微塵に砕け散るだろう。
多分。

「ほとんど全部わかりません！」

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

困り顔百パーセントで顔を引きつらせている。

「し、篠ノ之君はわからないところはありますか……？」

恐らく、確認のためであろう、俺にも聞いてきた。

「大丈夫だ、問題ない」

スパアン！

「年上には敬語を使え、馬鹿者」

千冬さんに叩かれた、出席簿で。

「・・・大丈夫です、問題ありません」

そして俺を見て、え？こいつこんなの理解できるの？馬鹿なの？みたいな顔をしている一夏に若干の殺意を覚えた。

俺が何やってるのか知ってるだろうが・・・！

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

そんな顔をしている千冬さんが聞く。
ちなみに俺は読んでない。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

ドゴッ！

一夏の脳細胞がまた五千個死んだ、てかあの音だと一万ぐらい死んでいてもおかしくはない。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者が。篠ノ之兄、こいつに参考書を貸してやれ」

ん？俺に？しかし・・・

「先生、俺読む必要なかったので捨てました」

「・・・仕方ない、再発行してやる。一週間で覚える、いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと・・・」

「やれ」

「・・・はい」

当たり前である。

ISを扱う人間にはその力を持ち、振るうことへの義務と責任が伴う。

知識もなく使えば必ず事故がおきる。

そのための規則だから。

それゆえに千冬さんも厳しいのだろう。

ちよいとフォローを。

「一夏、望む望まざるに関係なく、”力”を手に入れた者には責任と義務が伴うんだ。覚悟を決める、腹を括れ、・・・男だろ」

・・・身内に責任を感じているのか疑問に思うほどの振る舞いをしている人間はいるが。

「・・・そうだな、やるしか、ないか」

そうそう、やるしかないのさ。

そんなことがありながらも、時間は過ぎていった。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」「あ？」

二時限目の休み時間、またしても質問攻めならぬ視線攻めにあうかと思っていたので、ガラの悪い返事になってしまった。

話しかけてきたのは染めたのではなく、地毛が金髪の鮮やかな女子だった。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、俺たちをややつりあがった状態で見ている

若干ロールがかかった髪は、いかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子、というより女性だった。今の世の中、ISという存在が女性を優位に立たせている。

優位、優遇というより最早、女≪偉い≪男は奴隷兼労働力という図式まで完成している。

つまりこの目の前の女は今時の女尊男卑を体現しているようなヤツだということだ。

・・・んん？何かでこいつ見たな。
なんだっけ・・・？

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ、訊いてるけど・・・どついう用件だ？」

「できれば手短かに終わらせてほしいんだが」

俺たちの精神的に。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

いるんだよなあ・・・こういう奴。

ISを使える＝国家の軍事力に＝IS操縦者は偉い。

だからといってその力を振りかざすのは違うだろうに。

意思も目的も理由も持たない力はただの暴力だ。

・・・というか自分たちで作ったわけでもない、他人に与えられた力で何増長してるんだか。

それが自分たちの力だと錯覚するのは傲慢だな。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

何処かで見ただことはあるが、まあ知らないっちゃ知らないな、俺も。そんな一夏を見下した口調で続ける。

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

オルコットにイギリスの代表候補生・・・ああ、なるほど。ちなみに俺は入試は手抜いていました。

「第三世代型IS、『ブルー・ティアーズ』の操縦者か」

「あら、貴方は知ってらっしゃるのね。まあ当然のことですが」

「一々腹立つなあ……。」
「とうかお前は他の代表候補生を把握してるのかと聞きたくなるぜ。
四組の更識……なんだっけ？
まあいいか。」

「あ、質問いいか？」

ん？

「一夏か？」

「ふん、下々の要求にこたえるのも貴族の務めですわ、よろしくて
よ」

「代表候補生って何？」

「がたたつ。」

「聞き耳を立てていた女子数名がずっこけた音がした。
こいつ馬鹿だ……。」

「あ、あ、あ……。」

「アクティブ・イナーシャル・キャンセラー」

「あ、やべ。」

「アク……？何それ」

「貴方っ、本気でそうおっしゃってますのー!？」

ものすんごい剣幕だった。
しかも俺の言ったことはスルー。
何このアウトオブ眼中。

「信じられない。信じられませぬわ。極東の島国というのは、こつまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビが無いのかしら……」

アホか、テレビくらいあるわ。
見ないけど。

「えーと、代表候補生って何？流」

いや、響きと漢字でなんとなくわかるだろうよ……。

「あゝ国家代表IS操縦者の候補生として選抜された人たちの事だ。つてか漢字とか見れば大体の見当はつくだろうが……」

「あゝ、言われてみれば確かに」

「そう！エリートなのですわ！」

復活早いな。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだな」

「・・・馬鹿にしていますの？」

ん？内心馬鹿にしかしていないわけだが。
というかお前が幸運とか言っただろう。

「大体、そちらの白いあなたはともかく、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけれど、期待はずれでしたわね」

いったい何を期待していたんだ。

自分に跪いてくれる男でも期待してたのか？

というか自分の名前覚えてもらえなくて怒ってたのに人の名前を呼ばないとか失礼なやつだな。

「ですが、まあ？わたくしは非常に優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ？」

これが英国式の優しさなのか、初めて知った。
そして残念ながら必要なのは一夏だけという。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれ
たら教えて差し上げててもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教
官を倒したエリート中のエリートですから」

ん？教官？

もしかしてあれか？

「あれ？俺も倒したぞ？教官。確か流も倒したよな？」

頷いて肯定する。

一夏の時はいきなり突っ込んできたので回避したら壁に激突、俺の時は適当に投げたグレネードがアボンしただけだが。

「は………?」

ピシリ!と、ガラスにひびが入るような音がした、ような気がする。

「わ、わたくしだけではない……?」

「いや、知らないけど」

「あなた方!あなた方も倒したって言うの!?!」

「まあまあ、落ち着けよ、オルコットだっけ?」

「こ、これが落ち着いていられ」

キーンコーンカーンコーン

本日三度目の授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。
今の俺たちには福音に聞こえるかもしれない。

「……っ!また後できますわ!逃げないことね!よくって!?!」

後ろに戻っていく。

一体全体何だったんだ結局……。
いや男が珍しいんだろっけ。

「さて、この時間では実践で使用する各種装備の特性について説明しておく」

三時限目の授業は千冬さんの授業だった。
結構大事なことなので、山田先生もノートを持っていた。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したかのように千冬さんが言う。
あ、いやな予感がする。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ふむふむ。

つまり、代表者になる＝面倒くさいことが盛り沢山と、辞退だな。
多分あの女が立候補するんだろうな。
なんて考えは甘かったことを思い知らされる。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私は篠ノ之君を推薦します！」

ふむ、一夏と篤か、妥当だな。

「なっ!?!」

「では候補者は織斑一夏と篠ノ之流……他にいるか? 自薦他薦何でも構わん」

「お、俺!?!」「ちょ、冗談じゃ!」

「自薦他薦問わないと言った。推薦されたものに拒否権は存在しない。さつさと座れ、邪魔だ」

ナンテコツタイ。

「待つてください! 納得いきませんわ!」

ここに来てあの女が動いた。

大方自分が推薦されないことに怒っているのだろうか。

「そのような選出は認められません! 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ! わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?!」

おおすごい、息継ぎしてないであんな大声出せるのか。

「実力からいけばわたくしが代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります!」

流石にここまで馬鹿にされてくると頭に来るものがあるな。

「大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、

わたくしにとっては耐え難い苦痛で

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」「文化と歴史だけが取り得の古臭い国が何言ってるんだか」

おっと、つい言っちゃった。

イギリスの方々ごめんなさい。

「なっ・・・!?!」

「あっ、あっ、あなた方ねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

「へっ、先に侮辱したのはどっちだ。頭おかしいんじゃないの?」

まったく、日本が後進的だと?

むしろアニメとゲームは先進的だ!

話がずれた。

「決闘ですわ!」

バンツ！と机を叩く。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい。なあ、流」

「おう」

問題ない。

「言っておきますけどわざと負けたりしたらわたくしの小間使い

、いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよいい機会ですわ。イギリス代表候補生セシリア・オルコットの實力を示すための！」

つと、一夏め、少しフォローを。

「ハンデはどれくらいつけるとか言っなよ」ボソッ

「は？なんでだよ？」ボソッ

「男が強かったのはISが開発される前の話だ。ISに長時間乗ってるあいつには俺たちは正直劣る」

そう、いくら知識があろうと、見たことがあるうと、経験を積んでいるあいつの方が有利なのだ。

「それもそうか」ボソッ

「まあ、ちょうどいい。織斑と篠ノ之兄には専用機が与えられるしな。それでは一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、篠ノ之、オルコットは用意をしておくように。それでは授業を始める」

二の句を言わせない口調だ。

専用機を与えるのは大方データ収集だろう。

専用機が与えられることに羨ましいとか言ってる女子たちが多数いるが、千冬さんが全て制した。

あの顔はもう面倒くさいからいや、という顔だった。
こうして俺たちは決闘することになった。

第四話 代表候補生は・・・高飛車（後書き）

連続投稿でした。

前書きなどにも書いてあるように更新はあんまり期待しないでください。

第五話 訓練は・・・兄妹の共同作業（前書き）

ヒヤッハー、妄想が爆発する。

第五話 訓練は・・・兄妹の共同作業

「意味がわからん」

一夏が萎びたバラのような状態で机にくったりしている。

そりゃああの電話帳（笑）で予習していないのに加えて専門用語が多いのだ。

分かれたら逆に必死に勉強してきた女子の立つ瀬がない。

俺？俺は無問題、筈は姉さんの事嫌ってるっばいけど俺はそうでもないどころか大好きである。

なのでISについて教えてもらっていた時期が一年程あった。

何が言いたいのかというと、がんばれ一夏。

文に脈絡がないけどがんばれ一夏。

「あつ、織斑くん、篠ノ之くん、まだいたんですね。よかったです」

ふと声をかけられた方を見ると書類を持った山田先生がいた。

やっぱり背が短いな、ここの制服着ても違和感ないんじゃない？胸以外。

「えつとですね、お二人の寮の部屋が決まりました」

そういつて部屋番号の書かれたキーと紙を渡してくる。

当たり前といえば当たり前だが俺と一夏は同じ部屋だった。

「俺たちの部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？一週間ぐらいは自宅だつて聞いたんですが」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処理として、無理

やり空き部屋を作りました。・・・お二人ともそのあたりのこと政府から聞いてます？」

俺たちだけに聞こえるように耳打ちしてきた。

ああ、そういうことか、なんとなくわかった。

要するに監視と保護の対象にしたいわけだ。

扱いをひとつ間違えれば核爆発でもするような爆薬なのだ。

片や世界最強のIS操縦者、『ブリュンヒルデ』の称号を持つ女の弟、片や全世界で467機しかないISのコアを製作した『天災』篠ノ之束の弟。

どちらとも刺激したいものではなく、また、俺たちを利用すれば双方とのつながりを持てる。

事実、生体を調べさせてくれたあの解剖させてくれたのと言ってきた奴は非常に多かった。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れることを優先してみたいです」

「先生、近いです、顔近いです」

耳に息かかるんですけど。

「あつ、いや、これはその、わざとじゃなくてですね」

「いや、まあいいんですが。とりあえず部屋のほうは分かりました。しかし荷物は」

「私が手配をしてやった。ありがたく思え」

ああ、この声、絶対千冬さんだよ・・・。

軽く絶望を覚える。

「私の判断で生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器、後、篠ノ之はPCとメモリ媒体か」

ああ、それだけあれば確かに趣味の技術研究はできますけど、日々の潤いも必要だと思っんです。ゲームとか漫画とか。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・えっと、その、お二人は今のところ使えませんか」

why?何故?

「え、なんでですか?」

一夏が俺の気持ちを代弁するように疑問を言った。

「アホかお前は、まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか?」

ああなるほど、理解した。

いや、むしろ一緒に入れるなら喜んで入りにいくが。

スパアン!

叩かれた。

「何を考えている馬鹿者め」

考えを読まないでください千冬さん。

一夏は一夏で山田先生と何かやってるし。

腐女子談義が向こうで盛り上がってるし。

もうやだこの学校……。

その後、いくつかの注意事項を聞いて、部屋に行って部屋の豪華さに多少呆れながらも飯食って寝た。

「ねえねえ、あの二人がうわさの男子だっつて」

「片方は千冬お姉さまの弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってIS操縦者かあ。やっぱり彼も強いのかな？」

「っていつかあの白いほうの男子、食べすぎじゃない？」

今は入学式翌日、学校生活二日目の朝八時。

一年生寮の食堂だ。

箸を見かけたので一夏が飯に誘ったのだが、正直昨日と全く変わらず、周りは女子でいっぱいなのだが一定の距離が保たれている。

話しかけるなら話しかける、かけないなら囲まないでくれと願うがもちろんそんな願いは成就しない。

「……流」

「ん？どうした筈」

「お前は……そんなに食べることが出来る人間だったか……」

「？」

「いや、いつつ朝飯はこれくらいだな。むしろ少ない」

「千冬さんと一夏と住んでる間に何があったんだ……」

額を押さえる筈。

そんなに食ってるだろうか？

俺の今日の朝食 日替わり定食のご飯大盛り、卵を二つ使った目玉焼きにスパゲッティ大盛りにざるそば大盛りに食パン4枚。うむ、いつもと同じ量だ。

「いや、流、普通とか思ってるんだろうけど、そんなに食うようになったのあの時からじゃないか」

あ？あつ、あー、そういえばそうだった。

すっかりこれがスタンダードになってたの忘れてた。

「？あの時？」

「あー、ほら、俺が嬉しさのあまりお前に電話した時だよ」

ちようど、世界では姉さんが失踪したと報道されてから一年後、つまり一夏達が小学五年生だったころだ。

姉さんが俺の体の病弱さをどうにかしたのが、失踪してから一年後だった。

そういえばあの頃にあいつも転校してきたんだっけか。

「あー、今考えるとこうして三人で会うのも本当に久しぶりだな」

本当に久しぶりだな、箒もすげえ成長してるし、主に胸。

「昨日も会ったではないか」

「そりや会ったが箒、俺としては兄妹の再会より幼馴染を優先されたことが微妙にショックだったよ」

度々電話などで連絡はしていたが、何気にショックだった。

「う・・・、それは、すまない」

「ま、いいけどな。何せお前は一夏のことか」

「わー！それ以上言うな！」

口を必死で押さえられた。

「そ、それはそつと！あの代表候補生との決闘はどうするのだ！？」
話題をすりかえやがった。

「あ、そのことなんだけどさ、箒。ISのこと教えてくれよ」

「む・・・、べ、別に流に教えてもらえばいいではないか」
え〜。

「いや、昨日も頼んだんだけどさ、流が「俺も動かした経験あるわけじゃないし箒に教えてもらえば？（キリッ）」って言って教えてくれないんだよ」

正直、あの参考書を捨てたお前が悪いと思ってるがな、半分は。それと箒、仮にもオニチャンなんだから睨むのはやめてくれ。嬉しさと恨みがましさが半分半分ってところだろうが。とりあえずサムズアップしておく。

「・・・はあ、わかった」

ため息をついた後、結局箒が折れることとなった。

授業はやはり昨日と同じ要領で進められていった。途中、ハプニングがあったものの、さして問題もなく進んでいったのだが。

「ねえねえ織斑ちゃんと篠ノ之くんさあ！」

「今日のお昼ひま？放課後ひま？夜ひま？」

もはや出遅れるわけには行かないみたいないな勢いで話しかけてくる女子たちだった。

朝の箒とのやり取りなどを見ていたからだろう。

箒は一夏のことを不機嫌な目で見ている。

そんなにあれならお前から話しかければいいじゃないか・・・。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!？」

「え？案外だらしな」

スパパアン！

「休み時間は終わりだ、散れ」

鬼がいた。

背中には鬼の顔が浮かんでいるに違いない。

「ところで、織斑、篠ノ之兄、先ほども言った専用機だが用意にしばらく時間がかかる」

「や、やっぱりさっき言った専用機が与えられるって聞き間違いじゃなかったんだ」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機ほしいなあ」

ふむふむ、急なことだったから整備とかに手間取ってるとかそんな感じか。

一夏は頭に????を浮かべていた。

教科書六ページを暗唱させる千冬さん。

うん、至極妥当な行いだ。

と、篠ノ之博士、という単語に反応した女子がいた。

「あの、先生。篠ノ之さんと篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

うん？今更？

「そつだ。二人はあいつの弟妹だ」

おい教師、ばらしていいのか個人情報、俺たちが言うならともかく。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が三人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」「篠ノ之さんと篠ノ之くんも天才だったりする！？今度ISのこととか教えてよ！」

人々はその人を『天才』というが千冬さん曰く、『天災』だそうだ。俺と篝の元にわらわらと人が集まる。しかし、篝ってIS動かしてたことあるのか？

「あの人は関係ない！」

突然の大声。

思考を中断させられる。

一夏の事以外であいつが大声を出すことは稀だった。

「篝、落ち着け」

「落ち着いていられるか！いつもいつも私はあの人と比べられる！私は私だ！あの子の妹でも」

「落ち着けって」

「っ！」

語調を強めて、言葉をさえぎる。

「気持ちはわかるが、他人に当たっていいわけじゃないだろ」

「っく……、大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。」

教えられるようなことは何もない」

そう言つて窓の外に視線を向けた。

盛り上がり過ぎていた女子たちは冷水を浴びせられたような気分で、困惑や不快の感情を示していた。

(・・・ふむ、電話ごしにある程度は伝わってきていたが、ここま
で嫌ってるなんてな)

どうしたものか。

とりあえずフォローだけをしておくとしよう。

「あー、皆すまない、不快に思った人もいると思うけど、姉さんは姉さんで、俺は俺、篤は篤だ、篠ノ之束の縁者としてでなく、できれば一個人として接してくれ、俺から言えるのはそれだけだ」

そう言つて席に座る。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令を」

そして俺が座つたのを見た千冬さんが授業の開始を促す。

「は、はいっ！」

姉さんと篤の溝は思った以上に深そうだな・・・。

俺は嫌いじゃないどころか好きなんだがなあ・・・。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

いや別にラファール・リヴァイヴでも俺はよかったのだが？あれ使いやすいし、試験の時もあれ使ってたし。

「ご存知のとおり、わたくしは専用機を持っていますので、さすがに訓練機ではフェアではありませんものね」

「へー」

「はいはい、すごいすごい」

俺は単純にどうでもよさから、一夏はいまいち理解していないので、返事もお粗末なものだ。

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったけど。どうすげーのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言っているのでしょうか!？」

ババンと机を叩いた表紙にノートが落ちた。

おい、捨うの面倒だろ。

「……こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「そ、そうなのか」

「そうですね」

「人類つて六十億超えてたのか・・・」

「そっち!？」

「あなた!本当に馬鹿にしているんですの?」

「いやそんなことはない」

思いつきり棒読みじゃねーか。
それにしても

「エリート、ねえ・・・」

「・・・何が言いたいんですの?」

「いや別に」

他人が作った力を同じく他人に与えられてエリート、ね。いやいや、笑ったりなんかしていないさ、ああしていないいやはや、エリートっていうのも変わり者だよね?

「ふん?そういえば、あなたとそちらの方、篠ノ之博士の弟と妹なんですってね」

篤は視線を向けてきたこいつに鋭い視線を返す。
俺も姉さんが好きだといっても、わざわざ話を蒸し返されるのはい

い気分ではない。

「妹と弟というだけだ」

「う……」

本気ですごむ箒、正直怖い。

矛先を向けたこいつがたじろいでいる。
どこぞのヤーさんかお前は。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

一タポーズを取る奴だな。

ISで武器を出すときとかも格好つけながらだしてんじゃね？とか思ったりする。

……千冬さんに直せといわれる姿が容易に思い浮かぶのは何故なのだろうか？

「箒、飯食いに行くぞ」

「……私はいい、お前と一夏だけで行ってきてくれ」

「まあ、そう言っなよ。ほら、立て立て」

「お、おいつ。私は行かないと　　う、腕を組むな一夏！」

「だってそうでもしないと動かないだろ？」

その調子が一夏、そして殴らせろ一夏。

「箒、ここは素直に従っておけよ。・・・他の女子と飯食ってる姿見たいのか？ボソリ」

「っ！わ、わかった」

素直で大変よろしい。

「おい、一夏。放課後、剣道場に来い腕がなまってないか見てやる」

「いや、ISについて聞きたいんだけど」

「見てやる」

「・・・わかったよ」

ふむふむ、ま、大丈夫だろ。

「んじゃ、一夏、放課後頑張れよ。俺は俺でやることあるからな」

データの分析とかな。

「え、お前も来いよ」

「はっはっは、俺は運動が嫌いだ！というわけで箒、二人っきりで頑張るといい」

断じて苦手なわけじゃない。

「なっ！？ふ、二人っきり！？」

顔真っ赤。

さてと、えーっと、あの女の戦闘データほしいな、あそこにデータならあるか、連絡取って対策とってとやる事山積みだな。

(すこしきつく言い過ぎただろうか・・・)

剣道場の更衣室で着替えをしながら、箒はずっと同じことを考えていた。

六年前の一夏は、強くて格好よかったが、今より大人びているだけで、ただの腑抜けだった。

(それにしても、よく私だとわかったものだ)

髪に触れる。

非常に長く伸びたその髪は腰に届くほどだ。

箒も十五歳の春を迎えた少女である。

恋に懸想するのは何も不自然はない。

「・・・・・・・・・・はっ!?!」

鏡に映った自分の顔を見て若干引く。

それに、放課後に一夏と二人きりになる口実ができた。

流も自分が一夏のことを好きだと知っているだろうし、いい感じに配慮してくれるだろう。

事実昨日今日だけでフォローをいろいろとしてくれた。

ふと、流のことを思い浮かべると、疑問に思うことがあった。

（そういえば・・・六年前、一夏と離れ離れになるときに流に何があったんだ？）

姉から私がちょっと預かるね

と連絡があったと政府の人間から聞いた。

その一年後に電話で千冬さんの所に住むことになったのを聞いた。

その空白の一年、姉さんはいつたい流に”ナニ”をしたのだろうか。まともに運動することも出来ず、太陽の光を浴びることも出来ない、吐血や発作など普通だった。

そのたびに姉さんがやってきて症状を沈静していたが。

姉さんは・・・。

夕食（カレー大盛り、うどん大盛り、コンソメスープ大盛り、ハンバーグ特大）を食って寮の部屋に入って端末でいろいろと調べ物をしてきた時のことだった。

「流！頼む！ISのこと教えてくれ！」

は？箒に教えてもらってんじゃねえの？

一夏にISの知識教えてくれとせがまれた。

「箒と二人つきりでもよろしくやってたんじゃねえの？」

「何だよその言い方・・・、いや、なんか剣道やってなかったこと指摘されてさ。弛んでるとかいう理由で剣道をずっとやらされたんだけど・・・、何か、このままだとずっと一週間剣道やることになりそうで・・・」

あー、なるほどねえ。

あり得る、そのときの光景が目には浮かぶ。

ゼーゼーいいながら仰向けにねっころがる一夏、強かった一夏が弱くなっていることに怒る筈。

はあ、しかたない。

「まあ、流石にそれは見過ごせないからいいけどさ」

「マジか！？助かる！」

ただし、俺は野郎に、しかもフラグ立てるだけ立てて回収しない一夏の敵には容赦しないぜ・・・？
くっくっく。

「ちょ、怖いんだけど。何か不吉なこと考えていないか？」

「いやいや、そんなことないぞ？あるだろうか？いやない。ただ、俺はスパルタン・・・じゃなかった、スパルタってだけだ」

顔を引きつらせる一夏。

覚悟するがいいさ・・・。

こんな感じで夜も更けていく。

一夏の訓練は謀らずも兄妹の共同作業だった。

第五話 訓練は・・・兄妹の共同作業（後書き）

あとがき

おはようこんにちばんは。

焼肉です。

まさかの俺にしては珍しく早い更新。

他の方々のIS小説読んできたいこと増えまくって大変なんですよね。

外伝でも書くか。

第六話 対決は・・・男と男のガチンコ勝負(前書き)

戦闘シーンとかまじムリっす。

第六話 対決は・・・男と男のガチンコ勝負

決闘をすることになってから一週間後の月曜日。
俺と一夏の対決の日だった。

「なあ、流」

「どうした一夏」

「お前にISのこと教えてもらっておいてよかったよ・・・」
「まっただよ・・・」
「第の奴結局アイエスのアの字も出さずに全部剣道の稽古やってやがった。」

「し、仕方ないだろう。お前のISもなかったのだから」

「いや、もつと基本的な知識を教えるとかあったよな？第」

「うぐ・・・」

しかも、俺と一夏のISはごたついているのか、今もまだ来ていない。
今もまだ来ていない
あ、そういえば俺たちのISどこが開発してるのか聞いてない。

沈黙が痛い。

「おおおお織斑くんっ！しののののくん！」

誰だよしのののくんって。
駆け足でやってくる毎度お馴染み副担任の山田先生。
おお、メロンが揺れる揺れる。

「ふん！」

グリイッ！

「いつてえええええ！」

足を箒に踏み抜かれた。

「何を、考えている？」

「イエナニモ」

目が怖い……。

「山田先生、落ち着いてください。はい、そこで深呼吸」

山田先生を弄ぶ一夏。
響きだけだとエロい。

「は、はい、すーはー、じゃなくって！」

おおう、ノリッッコミ。

「遊んでいる場合か。お前たちのISが到着した」

「え？」「やつとか・・・」

「なので、織斑くんは織斑先生に、篠ノ之くんは私に着いてきてください」

「え？え？」

「早くせんか、馬鹿者」

一夏は千冬さんに引つ張られていく。

篤は俺が一夏どちらに行こうか迷ってるようだった。仕方ない。

「篤、お前は一夏の所に行けよ」

「っ、しかし、」

「その方が一夏も喜ぶだろ、俺は気にしなくていいからさ」

「・・・わかった、行ってくる。お前も頑張れよ、流」

そう言つて一夏たちが消えたほうに走つていく篤。

いやあ、あれで付き合つてないってんだから不思議だよね？

「んじゃ行きますか、山田先生」

急いで山田先生の後ろをついていく。

むしろ前からカメラで撮影したいぐらいだが。胸を。

第三アリーナのピットにつくと搬入口が開く。
重い駆動音を響かせ、その”IS”が姿を現す。

そこに、『黒』が、いた。

「これは・・・」

「はい！篠ノ之くんの専用IS『黒鉄』くろがねです！」

・・・黒鉄？

そんな名前だったか・・・？

「あ、そういえば織斑先生にこれを渡してくれと頼まれていたの忘れてました」

うん？手紙？

えー何々？

『やつほー、なつくん！元気にしてるかい！？東おねーさんだよ！
なつくんが設計してたIS、開発滞ってたのでちょちよいと弄く
っておきました』

それとストレイドって名前だったらしいけど日本人だし黒いから
黒鉄でいいよね』

あー、納得した。

っていうかあの人を手加えたとかもどうなってるのか不安と期待
が入り混じってしようがない。

改めて黒鉄を見る。

その機体は俺をずっと、今このときを待ち望んでいたような雰囲気

を感じる。

「あわわ、時間が。急いで装着してみてください！フォーマットとフィッテングは実戦でやってください」

時間も結構立ってしまったている。

せかされるように黒のI S えと触れる。

「これは・・・」

試験のときとは違う、電撃のような衝撃はなかった。ただ馴染む、理解できる。

いや、俺は・・・こいつを知っている？

何故か、ひどく懐かしく感じてしまう。

「背中を預けるようにして乗ってください。後はシステムが最適化してくれます」

俺が言われたとおりに乗ると、装甲が閉じる。

かしゅっ、かしゅっ、という空気が抜ける音がする。

我が身のような一体感、融和、適応、俺のために造られたかのように、黒鉄が『繋がる』。

俺の”中”にあるものとも積極的に通信を行っているのが何となくだがわかる。

「篠ノ之くん、気分は悪くありませんか？」

「大丈夫です、問題ないです」

むしろ絶好調と行ってもいい。

ピットゲートへと進む。

体を傾けるだけで、浮かび上がって前へと進む。

今こうしている間にも、黒鉄は初期化と最適化を続けている。

これが、これが俺のIS、相棒。^{パートナー}

「行くぞ……。黒鉄」

そして俺はピットを飛び出した。

俺とほぼ同時に正面のピットゲートから『白』が飛び出してくる。
あれが

ISを確認。操縦者『織斑一夏』、IS『白式』。近距離戦闘タイプ。特殊兵装あり

「待たせたみたいだな」

「いやいや、俺も今来たところだ」

一夏が武器を取り出す。

近接ブレードと……。と……?

「え?それだけ?」「え?これだけ?」

「ははは!悪いな一夏!この勝負俺の勝ちはもらった!」

「くう……」

装備一覧を見ると……。特殊兵装『アサルトアーマー』とあった。
……。なんぞ?

しかも未完成なので使用不可!?
そんな未完成なもの送ってくんなよ!
データとか設計とかほとんど完璧だっただろ!
どんだけ開発滞ってたんだよ!
ほ、ほかに装備は・・・あった。
その武器を呼び出し、コールする。

「・・・どないせえと」

出てきたのは・・・ハンドガンとレーザーブレードだった。

アルゼブラ社製ハンドガン『LARE』と、持つのではなく腕にポ
イントするレイナード社製レーザーブレード『DRAGONS L
AYER』だった。

ハンドガン・・・?弾速が遅く、射程が一番短いといっても過言で
はないこの武器でどう攻撃を当てると・・・?

レーザーブレードはいい、近接用の武器で攻撃範囲が狭いのは当た
り前だからな。

だが、展開できるブレードの長さが一番短い武器でどうしろと・・・
?

展開できる長さは大体一夏のブレードの長さですら劣るだろう。

「・・・」

沈黙。

ギヤラリーはとても盛り上がっている。

俺たちのテンションは下がっている。

正直グダグダ。

結果、

「・・・行くぞ!流れ!」「やってやらあああああ!」

ヤケクソである。

LAREを一夏へ向けてトリガーを引く。

連射性能はそこそこののだが、ど素人の俺が撃っても、当然のごとく当たらない。

というか一夏早い・・・！

ブレードを回避しようとするが、避けきれずに当たってしまう。

バリアー貫通、ダメージ51。シールドエネルギー残量、749。外部ジェネレーターエネルギー残量、98%。実体ダメージ無し。

「くそっ・・・！」

早い・・・！

まずは回避に専念だ・・・！

ISを動かす上で一番重要なのはイメージだ、右肩に二つ、左肩に二つ、計四枚展開されているウイングスラスターであり、フィンアーマーでもある非固定浮遊部位アンロックユニットを前方向に噴射するイメージ・・・！俺のISより多少小さいぐらいのスラスターが駆動する。

「逃がすか！」

ちくせう！やっぱりISの知識なんて教えるんじゃないかった！

『LARE』で牽制しながら攻撃を避けるが、確実に俺のシールドエネルギーは減少していった。

もちろん俺も攻撃を当てていないわけではないが、如何せん火力がない。

（俺の唯一の勝機は最適化が終了した時点でアサルトアーマーを直

撃させるか、レーザーブレードで決めるしかない・・・！)

そしてアサルトアーマーの使用ができない今、レーザーブレードによる攻撃しか一夏を倒すことはできなかった。

だが一夏はそんな俺のことなどお構い無しに突っ込んでくる。

ヤケクソ気味にレーザーブレードを展開しても当たらないのは目に見えている。

シールドエネルギー残量、597。外部ジェネレータエネルギー残量、95%。

俺のシールドエネルギーは大分減っていた。

戦闘が開始してからもうすぐ三十分が経とうとしていた。

俺のエネルギー残量は大体300、外部ジェネレータのエネルギーはまだまだ残っているが、あれは基本的に武器や、機動の方にエネルギーが回されるので、シールドエネルギーは回復できない。

「ああ、絶体絶命だなあ。そこんどこどうよ一夏」

「勝負だからな、手加減なんてできないぜ」

「したら俺怒っちゃう」

場違いなほどの声が出る。

そろそろ反撃に移るとするか。

レーザーブレードの使用は苦手だと思わせるようにわざと攻撃が当たらない様したり空振りするようにしてきた・・・！

油断しているはずだ、次突進してきたときに当てる……!

「行くぞ!」

「かかって来い!」

上段にブレードを構えて飛んでくる一夏。俺もそれに合わせて黒鉄を後退させる。

「逃がすかよ!」

お前が来るのはわかってたよ……! ある程度距離が縮まったところで、スラスターを噴射させて前進する。

「っ!?!」

一瞬動きが止まる。

(今だ!)

振り抜き気味に右腕にポイントされている『DORAGONS LAYER』を横に薙ぐ。

油断し、完全に動きが止まった一夏に、レーザーの刀身が触れる。

「がっ!?!」

高エネルギーを短い刀身に収めているそれは、シールドエネルギーを貫通し、白式に損傷を負わせる。装甲に傷跡が残っている。

かなりのダメージのはずだ・・・！
このまま押し切る！
ハンドガンを一夏へ向けようとする。

だが、攻撃が直撃し、気を緩めたのが駄目だったのか。
一夏がそのままブレードを振り下ろしてきた。

「ぐっ！？」

バリア貫通、ダメージ81。シールドエネルギー残量、21
9。外部ジェネレーターエネルギー残量、56%

やばい、もうあいつは油断しないだろう。

もう恐らくレーザーブレードを当てる機会はない。
くそっ、どうすれば。

その時だった。

フォーマットとフィッティングが完了いたしました。確認ボタンを押してください。

ファースト・シフト
一次移行、最適化と初期化が終わった。

これで、この『黒鉄』は俺専用の機体になった。
工業的な角ばった装甲が粒子となって消え、滑らかな曲線と、丸みを帯びながらも尖った部分があるのが特徴的なデザインになっている。

前腕には重りのような曲線を描いた装甲となっており、足の膝部分には角のような形状の装甲が前に飛び出すようにある。

そして本来なら、この機体最大の特徴である装備も稼動するはずなのだが、未完成のため起動していない。

だが、ハンドガン自体の性能は変わらなくとも、最適化により命中

率も上がったはず。

スピードなども先ほどとは段違いだろう。

レーザーブレードのエネルギー変換効率も上がって出力も上がっているはず。

「うそっ！今まで初期設定で戦ってたの！？」

「ってことは織斑くんも？」

「初期設定なのにあんな動きできるって・・・」

一気に決める！

最適化が終わる前に沈めてやる・・・！
が、その時だった。

一夏の機体が光に包まれる。

これは・・・ファースト・シフト一次移行か！

「これで、俺も全力で戦える・・・！」

「はっ、もう少し遅れてくれてもよかったんだがな？」

まったく、ISから光が逆流しそうです。

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」

静寂、観客ですら静かになっている。

どれくらい時間が経っただろうか、一秒にも一分にも感じられた。俺と一夏が同時にスラスタで推力を得て、前に突撃する。

「おおおおお！」「あああああ！」

俺はレーザーブレードを、一夏はブレードを。
互いを仕留めようと俺は左側から振り抜くように、一夏は袈裟切りに。

レーザーブレードも最適化の影響を受けて、エネルギーの密度なども上がっている。

一夏のブレードの刀身ごと焼き切るつもりだった。

レーザーの刀身と光を帯びた刀身がぶつかった瞬間、俺のレーザーブレードが掻き消える。

(なにい!?)

このときは知らなかったが、白式の単一使用能力『零落白夜』はあらゆるエネルギーをゼロにする能力だったのだ。

それはレーザーやシールドエネルギーも例外ではなく。

勝者、織斑一夏。

そんなモノの直撃を食らった俺のISは絶対防御を発動させ、エネルギーが0になって負けた。

観客は拍手喝さいを送っていた。

ガチンコ勝負は親友の勝利で幕を閉じた。

ちくせつ。

第六話 対決は・・・男と男のガチンコ勝負（後書き）

GWに入ったたというのに内定が決まらない。

Q: どうすれば内定取れますか？

A: 就職活動すれば良いと思うよ

Q: 精神的にきついんですけどどうすればいいですか？

A: 貴様には面接練習が似合いだ

どうも、焼肉です。

オリIS、外見はアリーヤのコアをアルゼブラのSOLUHにした
ものと考えてもらえれば・・・。

アーマードコア知らない人は・・・ごめん、みんなのフロム脳で補
つてw

さて、ここでACにおけるアサルトアーマー、通称AAについて解
説しておきます。

コジマ粒子というものを兵器として使っているAC4、およびAC
faでは、プライマルアーマーという防御目的にも使われておりま
す。

これは簡単に言うと、粒子を機体の周りに高密度で展開し、相手の
攻撃を防ぐ、というもののなのですがAAはこのプライマルアーマー
をなんと言いますか、爆発させることで周囲の敵機や攻撃などもろ
もろ吹き飛ばすというモノです。

が、使うと同時にプライマルアーマーが消え去るので、使うのはこ
ごぞというときに限られます。

こんなところか。

間違ってる部分もあるだろうが、まあ、大体あってるだろう。
感想を待っている。

ちなみに作者はアリーヤと063ANが大好きです。

第七話 クラス代表は・・・馬鹿(前書き)

うーん、主人公の影が薄い。

これが作者の文才のなさの表れなのか・・・。

第七話 クラス代表は・・・馬鹿

「初めてにしては上出来な戦いだった、二人ともよくやった」

千冬さんが褒めるとか、血の雨でも降るんだろうか？

「が、織斑、篠ノ之兄があんなにあらさまに近接武器をはずしていたりしたのに油断するな、馬鹿者が。普通は何かあると気付くだろう」

「うぐっ」

前言撤回、上げて落とすのが千冬さんらしい。

「篠ノ之くんも少し近接武器の使い方がお粗末でしたね。ハンドガンのほうも初めてだったとはいえただ闇雲に撃つだけでは当たらないので、今後はちゃんと訓練してください。」

基本的に俺の補佐だった山田先生から訓練しろとお達しだった。わからないところがあつたら教えますので、と付け加えて。この人これでも元代表候補生だつていうんだから驚きだよな。

「了解です」

まあ、正直確かにあの使い方はみっともなかった。暇あれば訓練するかなあ。

個人的には研究を進めたいのだが。

「それと、お二人のISは待機状態になっていますが、お二人が呼

び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるので、ちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

ドサツと渡される電話帳（再）。

ん、このくらいなら流し読みで覚えれるだろ。

ちなみに一夏のISの待機状態はガントレット、俺のISの待機状態は指輪だった。

右手中指にはまっている。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

ん、おっと、聞いておかなくては。

「千ふ・・・織斑先生。一夏とあの女の勝負っていつやるんですか？」

「ふむ、三日後ぐらいだな。白式とお前の黒鉄の整備もあるだろう。手伝ってやれ。」

「りょーかいですつと」

ふむふむ、結構大変だな。

「つて、ちょっと待て！お前はセシリアさんと戦わないのか!？」

「あ？何言ってるんだ。俺敗者、お前勝者。戦うのは必然お前だろ？」

「うう・・・」

「ああ、それと篠ノ之兄。お前の機体の製造元、企業連・・・だつ

たか。そこから武器のカタログが来ている。試験運用もかねて使っ
てほしいそうさ。後、一部未完成の装備もあるらしい。元々お前が
設計した機体だろう、そちらで完成させてほしいとのことだ」

「開発間に合わなかったからってあの機体最大の特徴の武装が完成
してないって……。はあ、わかりました、了解です。というか試
験運用してほしいなら何で武器があんなショボいのしか……」

「整備が間に合わなかったのと、注文が無かったから、というのが
理由らしいな」

いや、それでも武装は未完成に加えてハンドガンにリーチが異常な
までに短い武器だけとかねえよ。

いじめか？いじめなのか？お前らがそんなだけでかくなつたの俺のお
かげだろう……。！

「明日までに届けてほしい武装を紙に書いて提出しろ。早ければ次
の日かその日までに届く」

わかりましたよっと。

今日の夜に書きますか。

「話は終わりだ。今度こそ帰れ」

言い方ひどい。

「一夏、今回は、まあ、よくやった」

「お？おう、サンキューな、お前の稽古のおかげであんまり苦勞し
なかつたぜ」

このイチャラブってる夫婦、消し飛ばしてもいいよな？

「が、織斑先生が言ってたように流のブレードに気付けないとは何事だ」

「い、いや、だってさ」

「しかしもかかしもだっても無い。また訓練のし直しだな」

「うへえ……」

おおう、妹よ、流石だな。

自然な流れで一夏と訓練できる口実を作るとは。

けど俺に何か言うことないの？

がんばった、とかここが駄目だった、とか。

一夏が憎い……！

「だ、だから、あれだな。明日からはISの訓練も入れないとな」

「っと、そうだ、ISの訓練で思い出した。一夏」

「ん？どうした」

「あれだ、帰ったらあの、オルコットだったか、あいつの対策練るぞ」

「え？対策？」

お前……。

「まさか。何にも考えずに戦おうとしてたんじゃないよなああ
あ？」

満面の笑みで一夏を見つめる。

なんか俺の後ろから黒いものが立ち上がってる気がするが、気のせい
だろう。

さっきのやりとりのせいで結構黒い気配が出ている気がするが、気
のせいだろう。

「うっ、ちょ、怖いって、やめろその笑顔」

「まったく、戦闘の映像は手に入らなかったが、ある程度のデータは
手に入った。それを考慮して筈と訓練しろ」

「・・・おう、サンキューな」

さて、お邪魔虫は退散しますかね。

IS学園の寮、部屋に戻った俺は武器のカatalogを見ている。

えーっと、メインの武器はこのライフルとアサルトライフルに・・・
、背中に装備するのはこの二つでいいか。

近接武器は・・・うん？このレーザーブレードでいいか。
試験運用もしてほしいとか書いてあるしな。

とりあえず今はこれでいいとして、後からまた注文すればいいか。
未完成の武装のシステム構成とかも後でいいな、俺がいますぐ戦う

わけでもない。

「ただいま」

「おお、お疲れさん」

そういつて決めた注文する武器を紙に記入していたら一夏が疲れ果てた様子で帰ってきた。

「ああ、食堂にいないと思ったらここに持ち込んだのか・・・」

「ん？ああ、やりたいことあったしな」

さて。

「んじゃ、早速だが、あの女の対策ブリーフフィングをするぞ」

「何でそんなに伸ばすんだよ」

気分だよ、気分。

「まず、お前の白式はあいつのIS、ブルー・ティアーズとはひじよくに相性が悪い。お前は近接特化型、あいつのは遠距離特化だしな」

「近づく前に撃たれまくる、か」

「そゆこと。流石に代表候補生だ、射撃の腕はかなり高いだろうよ。とはいえ、あいつのライフルはそんなに連射できるもんでもない、イグニッションブースト瞬時加速が使えるれば近づくこともできるだろ」

「イグニッションブースト？」

「まあ、簡単に言えばゼロからマックスに、一瞬で最高速で達するための技能だな」

まあ、それは筈に教えてもらえよ、多分あいつできるし。
俺？俺は無理、多分あれデキナイ。

「んでだ、こつから本題。あの機体、ブルーティアーズの名前の由来でもある第三世代兵器、『ブルー・ティアーズ』が厄介なんだよ」

「どんな兵器なんだ？」

「遠隔操作できる兵器ってところか。『ブルー・ティアーズ』の最大の兵器であり、そして『セシリア・オルコット』の最大の弱点と言ってもいいがな」

送られてきたデータが正しいのであれば、だが。
恐らく間違いはないだろう。

「弱点？」

「おう、弱点。まず一つ、あいつはそのブルー・ティアーズを使っているときはその制御に集中して、ほかの攻撃ができない」

ふむふむと一夏が頷くのを見て話を進める。

「二つ、ま、データ通りなら、あいつのブルー・ティアーズを活かしきれていない・・・らしい。なんでも動きが全てマニュアル通り

でワンパターンらしい」

つまりは、

「その動きを見極めれば、勝機がある、ってことか」

「そういうことだ。映像は手に入らなかったから実際に戦うまでどんなのかはわからんが」

「いや、そんだけでも十分だぜ。サンキューな」

いやいや、お前には勝ってもらわないと困るんだよ。

クラス代表になんてなりたくないからな……。

ククク。

そんなことを考えているとは露知らず、一夏は三日後の勝負に向けて意気込んでいるようだった。

まあ、結果から言うと、一夏はセシリア・オルコットに勝った。

パターンを見切ったりするのに時間がかかっていたようだが。

最後には零落白夜を決めて勝った。

つまり、

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一撃がりでもいい感じですね!」

こういうことである。

山田先生は嬉々として喋っており、クラスの子供たちも非常に盛り上がっている。

「忘れてた……。勝ったら駄目じゃん……」

ふははは、勝ったお前が悪いのだよ。

「まあ、頑張れよ。お前が”勝てる”ように、教えてやったんだからなあ？」

「確信犯か！狙ってたのかよ！」

「それでは、副代表は篠ノ之くんということだ」

「は？何？副代表？」

Why?

「ちょっと待て！何で俺がそんなものに!？」

そんな面倒くさいこと出来るか！

「わたくしが推薦したからですわ」

オマエカ！

「わたくしに勝利した”一夏さん”がクラス代表になるのは当然のこと。そして初期設定でもあれだけの戦いをした貴方が相応しいと思いますの。」

なんだよその超理論。

つていうか”一夏さん”？

まさか・・・、いやまさかな。

一夏がフラグをまた立てたということなど、あるだろうか、いやない。ないと思いたい。

「ぐぬぬぬぬ」

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよなー。せつかく世界で唯一の男子が二人もいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「わたしたちは貴重な経験が積める。他のクラスに情報が売れる。

一粒で二度おいしいね！」

「それに薄い本のネタにもなるし・・・ゲフンゲフン」

「おい、クラスメイトの情報を売るなよ・・・」

「おい、最後の発言した奴表でろ」

なんだよ薄い本って。

いやわかるけども。

弾のヤローがちよくちよく持ってきたけども。

「そ、それですわね」

コホン、と咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ」

バン！

おお、びっくりした。
音がした左を見ると箒が机を叩いて立ち上がった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたかならな」

あれ？俺は？

というか、いつの間にセシリアは一夏にフラグを立てられたんだ？まさかあの対決の時じゃあるまいし……。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ラ、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

そっだっけ？

焚きつけたのは確かに俺だが。

ちなみに俺と一夏は仲良くBだった。

とはいえ訓練機で出した最初の格付けだからそこまで関係ないと言っていたが。

「座れ、馬鹿ども」

セシリアと箒の頭をスパンスパンと出席簿の錆びにしながら千冬さんが低い声で告げる。

おお、怖い怖い。

とか思っていたら右からスパーン！という出席簿が火を噴く音が聞こえた。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

「一体なにしたんだ・・・？」

「お前いつたい何したんだよ？」ボソッ

「何にもしてねーよ。こんなこと考えてただけだって」ボソッ

「どんな？」ボソッ

「凄みとすごすご、なんつって」ボソッ

「・・・シネ」ボソッ

聞いて損したぜ全く。

「え？ちよ、何、何で死ねなん」

スパアン！

「黙れ」

ははは、ざまあみろ。

くっだらねーギャグ考えてるからだ。

スパアン！

「その人を馬鹿にしたような顔はなんだ。やめろ」

「・・・すみません」

超いてえ。

そして一夏の顔が腹立つ。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からすればどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

流石に千冬さんに言われては代表候補生とて黙らざるを得ず、言葉を飲み込んだ。

「クラス代表は織斑一夏、副代表は篠ノ之流。異存は無いな」

男子を除いた女子全員がはいと返事をする。

お前らの一致団結振りに涙が出そうだよ。

その後、実機訓練などをし、専用機持ちだけで飛んだり、その練習で一夏がグラウンドに大穴あけたり、前予想したとおりセシリアが武器の出し方を直せと言われたりと、いろいろあった。

俺？俺は学習速度速いほうだと自負してるから無問題。

その後、武器の注文の紙を千冬さんに渡して、いつもどおりの授業に戻っていった。

グラウンドの修理を命じられた一夏に若干の同情を禁じえなかった。

「ふん、ここがIS学園か。あいつら元気にしてるかしら？」

そんな多少のハプニングがあったもののいつもと変わりの無い学園に、一人の転校生がやってきている事など知りもしなかった。

「というわけでっ！織斑くんと篠ノ之くん、代表と副代表決定おめでとー！」

「おめでとー」

ぱん、ぱんぱん。

クラッカーが乱射する。

俺たちにかかる紙テープは、その重さの何十倍にもなって心にかかっていた。

というか何がおめでとーだ。

俺たちにとってはただの面倒ごとでしかない。

いやマジで。

壁にはかなりの存在感を持った『織斑一夏クラス代表篠ノ之流クラス副代表就任パーティー』と書かれていた。

もうパーティーじゃなくてパーティーにしたいです。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

「おい、さっきから相づち打ってるそこの女子二組だろ」

てへっ、じゃねえよ。

「人気者だな？一夏、流」

「・・・本当にそう思うか？」「・・・立場を変わってやってもいいんだぞ？」

苦痛です。精神的に。非常にとてもものすごく。

「・・・ふん」

何でそんなに不機嫌なんだ・・・。
一夏が人気なのが不機嫌なのはわかるが俺もか？

「はいはい、新聞部です。話題の新入生織斑一夏君と篠ノ之流君に特別インタビューをしに来ました〜！」

オーと盛り上がる一年生一同。
オーじゃねえよまったく。

「あ、私は二年の黛薫子。（まゆあかり）よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名詞。」

やたら画数の多い漢字だ。
黛と薫って似てるよね。

「ではではまずは織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「まあ、なんとというか、がんばります」

え〜、自己紹介といいつまんねえ回答だな。

「えー。もっといいコメントちょうだいよ〜。俺に触ると火傷するぜ、とか！」

とても前時代的です。

何故出てきた・・・、もうお前の時代ではない、みたいな。

「自分、不器用ですから」

「お前もえらく前時代的だな!？」

日本の誇る名優ブジヨクとか考えてるんだろぅが侮辱してるのは間違いないお前だ。

「ツチ、じゃあまあ適当に捏造しておくとして。篠ノ之君!副代表になった感想を!」

今舌打ちしなかったか?コイツ。

「あー、感想言えればいいのか?」

「うんうん!カッコイイこと言ってほしいな!」

「あー、一年一組クラス副代表の篠ノ之流だ。対抗戦だろぅと何だろぅと全力を持って(一夏が)あたって行くので、よろしく頼む。ちなみに俺の髪は染めてるわけでも色素を抜いているわけでもなく、ただの地毛だ!」

一夏の所をボソリと呟いて感想を、感想?を言う。

「うんうん、普通の感想だったね、最後以外」

ひどいこと言うな?お前。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

なんか言い方雑じゃねえ?

「わたくしこういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか言いつつお前、結構すぐ近くに控えてたよな？
髪もなんだか若干整っている気がしなくもない。

「コホン。ではまず、わたくしが何故お二方に代表と副代表を譲ったかという点、それはつまり」

「ああ、長そつだからいいや。写真だけちょうだい」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし織斑君に惚れたってことにしておこう」

ああ、多分ガチで惚れてるからな。
別に大丈夫だろ。

「とりあえず専用機持ち三人で並んでみて、写真取るから」

ん？写真か。

「あゝ、一夏とオルコットだけじゃだめ？」

「あら、流さん。あなたも一夏さんと同じようにセシリアと呼んで構いませんわ」

じゃあセシリアで。

「ダメダメ、注目の専用機持ちでしかも男が移らないなんてありえないありえない。はい、さっさと並ぶ」

にべもない。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと・・・」

「72・375」

簡単じゃね？

「正解」

けど普通2じゃないのか？
で、

「何で全員写ってんだよ・・・」

シャッターが閉じる瞬間俺たちの周りに女子たちが集結している。
ちやっかり算は一夏の隣なのだから驚きだ。

「あ、あなたたちねえっ！」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

丸め込まれるセシリア。

一夏の頭の上の？がとても印象的だった。

そんなことがあって寮に戻ったときには疲労感MAXだった。

もうあのテンションを何でこんな時間まで続けられるんだ・・・。

二度と参加するものかと、心に決めた一瞬だった。

夢を見ていた。

懐かしいとは思えど二度と体験したくはない思い出。

まだ歩くことすらままらない頃の夢。

とても深い闇に沈んでいく。

そんな、悲しくて辛くて、苦しい夢だった。

第七話 クラス代表は・・・馬鹿（後書き）

あとがき

なんか、こつちがメイン小説になりそうなヨカーン。

とりあえず早く戦闘シーンとか書きたい。

一巻終わったあたりで一巻終了時点での解説とか設定とか書こうかなと思ってます。

アーマードコア知らない人のためにもアーマードコアの多少の解説も必要だと思つので。

第八話 転校生は・・・セカンド幼馴染（前書き）

四話、六話、七話を少し改訂しました。

内容変わっているところ（一夏と流の対決のときとか）もあるので、よければ確認しておいてください。

第八話 転校生は・・・セカンド幼馴染

息が荒く、服が汗で濡れていた。

息を落ち着かせて一夏のほつを見る。

一夏はまだ寝ているようだった。

時間を確認すると朝の五時。

まだ外は薄暗い時間だった。

最悪の夢だった。

俺にいつも付きまどっていたものであり、二度と味わいたいと思わず、それが日常だったころの夢。

朝から最悪な気分だった。

とりあえずシャワーに入って汗を流そう。

一日の始まりはそんな感じだった。

「織斑くん、篠ノ之くん、おはよー、って、篠ノ之くんすごい不機嫌そうだけど・・・どうしたの?」

朝、席につくなりクラスメイトに話しかけられるのだが、俺の顔を見てちょっと怖がっていた。

「あ?あ、ああ、悪い、不快にさせたか?ちょっと夢見悪くってさ、あんまり気にしないでもらえると助かる」

ううむ、気にされるほどの不機嫌顔だったか、気をつけないとな・・・

。

「そ、そっか。あ、そういえば、二人とも転校生の噂聞いた？」

それでも普通に話そうとするこいつをちよつと尊敬した。

にしても、転校生ね。

この学校に転校してくるってことは少なくとも代表候補生であることとは間違いないな。

転入試験はすごく難しいらしいし、加えて国の推薦もなければならぬ。

「何でも中国の代表候補生らしいよ」

「ふーん」

気の抜けた返事をする一夏。

お前、本当に關心薄いのな？

というかこれで一学年には代表候補生が三人、専用機持ちだけなら五人になるわけか、一つの国と戦争できるな。

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

いや、それよりも俺と一夏がいるのが最大の原因だろう。

言わないが。

いつの間にか俺たちの隣に筭が来ていた。

「どんなやつなんだろうな」

「む……気になるのか？」

確かにどんな奴なのかは気になる。

そして中国といえばあいつを思い出す。

一夏にフラグを立てられてしまった女の一人。

「ん？ああ、少しは」

「ふん・・・」

「まあ、気にしてる場合じゃないと思うけどな、クラス対抗戦あるし。いや、専用機がどんなのかなのは気にしなきゃだめだが」

「その通りだな。気にしている場合ではない、訓練もしなくてはいけないぞ」

「ま、安心しろ。負けた場合これでもかというぐらいいいじめてやるから」

「欠片も安心できる要素が見当たらない！」

ふははは、まあ、いくらなんでも訓練機には負けないだろ。

・・・負けないよな？

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにも！」

「今のところ専用機持つてるクラス代表って一組と四組だけだから楽勝だよ！」

「情報の追加しておくで四組の専用機は未完成」ボソツ

やいのやいのと楽しそうな女子。

いいのか？デザートとか食いまくったら太るぞ？

「その情報、古いよ」

・・・この声は。

聞き覚えのある声だった。

「二組も専用機持ちが代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは

「鈴・・・？もしかして鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、フアゼンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

フツ、つと笑い、トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れる。

のだが、

「一夏に格好いいとこ見せたくて格好つけたらしいが、そんなお子ちゃま体型でやられても背伸びしているようにしか見えなく、軽く引いたのだが、俺は我慢して笑うだけに留めることにする。ぶははははは」

「あなたは相変わらず人のコンプレックスを突いて来るねえ・・・！
！というか言葉に出てるのよ！」

おっと、こりゃ失礼。

「何格好つけてるんだ？ すぎえ似合わないぞ？ 軽く引いたぞ」

一夏が追い討ちをかける。

ひゃひゃひゃ、全くだ、似合わない似合わない。

「んなつ・・・！？ なんて事言うのよアンタ！」

ははは、やっぱいじるのおもしれー！。

と、そんな時だった。

鈴の後ろに見える人影。

あ、やばい。

そういえばもうチャイムは鳴っている！

「お、おい、鈴。そろそろ戻れ、痛い目に会いたくなかったら」

若干焦って言う。

「ふん！ そんな手に引っかけたりしないわよ！ チャイムなったくらいで」

「おい」

「なによ！？」

スパァン！

振り向き様に聞き返した鈴に出席簿が火を噴く。

暴君、織斑千冬の登場である。

「もうSHRの時間だ。教室にもどれ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口に立つな、邪魔だ」
「す、すみません」

やたらとビビってる鈴が笑いを誘う。

「また後で来るからね！逃げるんじゃないわよ！一夏！流！」

俺の名前呼ぶときに怨念こもってなかったか？

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

「とうか、あいつが中国の代表候補生だったのか。たった一年で代表候補生になるとか・・・侮れん」

いやマジで。

どんだけ訓練したんだか。

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったなあ？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で」

その他クラスメイトからの質問という名の集中砲火。
お前ら、授業なのに立ったりしてると・・・。

スパパパパパン！

言わんこつぢゃない。

千冬さんの出席簿の稼働率は120%を超えていただろう。

そして筈とセシリアは授業中にも出席簿の錆びになっていた。
まる。

「お前達のせいだ!」

「あなた達のせいですわ!」

何でだよ。

いや、何でだよ。

「まあ、話なら学食で聞いてやるからとりあえず行くこつぜ、もう腹減ってやばいんですけど……」

朝あまり食わなかったせいか、今現在、ゲツソリしている俺。
俺はエネルギーの消費激しいんだよ……!

「む……。まあ、流がそう言うのならばいいだろう」

「そうですね、一夏さんが一緒なら行ってあげないこともなくつてよ」

愛されていますね、一夏さん。

その他数人のクラスメイトが付いてきて、そろそろと学食に向かっ

た。

今日の飯はつと、ハンバーグにラーメンに餃子にシチューにコンソメスープにパスタに日替わり定食でいいか。

「待ってたわよ！一夏！流！」

ご苦労様です。

どーんと立ちふさがる話題の代表候補生。

「あー、鈴、とりあえず邪魔、食券取れない」

「う、うるさいわね、っていつか何でそんなにゲッソリしてるのよ？」

朝飯が少なかったからです。

「ラーメン、伸びるぞ？」

一夏が指摘する。

「わ、わかってるわよ！大体、アンタ達を待ってたんでしょ！が！なんでもっと早く来ないのよ！」

別に早く来なきゃいけない理由があるわけでもない。

俺以外。

俺達は食券を渡す。

それにしても一年ぶりか。

改めてみると変わってねえなあ……。

そして各々が席に座る。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「そして何で背が変わってないんだ？おっと、成長した分俺達もでかくなつたから変わってないように見えるだけか悪い悪い」

「アンタねえ・・・！ふん、まあいいわ。アンタ達こそなにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

一年振りなのに背が変わっていない鈴に質問を投げかける。弄るためだけだが。

「一夏、流、そろそろどういう関係なのか説明してほしいのだが？」

「そうですね！まさかそちらの方と付き合ってたっしやるの！？一夏さん！」

付いてきたクラスメイトどころか、学食中の女子がこっちに聞き耳を立てていた。

お前ら興味津津なのな？

「べ、べべ、別に私達は付き合ってるわけじゃ」

「そうですね。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「.....」

「そうですね。なんでそんな話になるんだ。ただ発育が残念なだけな小学生の幼馴染だ」

「何処見て言ってるのよ!?!というか私は小学生でもない!」
胸です。

「幼馴染?どついうことだ?流」

「ん?ああ、俺が姉さんと一緒に一年間暮らしてたのは・・・言っ
たよな?んで、千冬さんに預けられて学校通い始めた時に転校して
きたんだ」

「そうそう、で、中二の終わりに帰ったから会うのは大体一年ぶり
だな」

「いいか?このポニテが筈、前言った俺の妹で一夏のファースト幼
馴染、でこつちの金髪がセシリア、一夏にフラグ立てられた女だ」

「へえ・・・、ま、どうでもいいけどね。負けるつもりなんてさら
さらないし」

「ほう・・・」「ふうん・・・」

「そ、そういえば一夏?あんたクラス代表なんだってね?」

「お、おう。成り行きでな」

「だ、だったらさ、ISの操縦、見てあげてもいいけど?」

おお、早速アプローチか、やるな鈴。

「そりゃ助か」

パンツ！テーブルをたたく音×2。

「一夏に教えるのは私と流の役目だ。そして頼まれたのは流と……私だ」

「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ！」

えへ。俺ISSの整備したいんですけど。
まだ完成してないんですけど。

「はいはい、そこまでにしとけよ。箒とセシリアが言うことはもつとも。そして一夏も誰かまわらず教えてもらおうとするなよ」

お前にプライドはないのか？

ああ……、ないな、千冬さん以外のことでこいつが誇りに思っているものを見たことも聞いたこともない。

「うぐ、確かにそうだけだよ」

「な、なによ、流。そいつらの肩もつっていつの？」

「正確には箒の肩を持っているんだがな。兄妹だ、当たり前だろう？」

ニヤアと笑う。

「ふん、まあいいわ。そういえば一夏さあ、や、約束、覚えてる？」

ん？約束？

ま、まさか……あれか！？

「ここで最終兵器を持ち出してくるとは！」

リーサルウェポン

「約束ってあれか？料理の腕が上がったら毎日酢豚を

」

「げえっ！？こいつ何でしたっけ！覚えてんだよ！？」

「そうそう、それよ！」

「おごってくれらるってやつか？」

「・・・は？」

俺、鈴含めて女子全員がポカーンとしている。

「いやあ、俺の記憶力に感心

」

「パァン！」

「・・・へ？」

「最っつ低！女の子との約束を覚えていないなんて、男の風上にも置けない奴！馬に蹴られて死ね！」

「・・・まずい、怒らせちゃった」

「・・・」

「一夏、どうせ男の風上にも置けない奴って言われてカチンと来てるんだろ？」

俺は満面の笑みで一夏に聞く。

「い、いや、そんなことは」

ポンス、と肩を叩き、

「馬に蹴られて死ね」

篤が肩を叩き、

「一夏、馬に蹴られて死ね」

セシリアがもう一方の肩を叩き、

「一夏さん？馬に蹴られて死んだほうがよろしいのでは？」

三者が三者とも同じ事を言い放った。

とりあえず、流石に見過ごせない。

鈴のフォローに行くか。

走って鈴を追いかけた。

多分こんなときはあそこだろ。

「やっぱり屋上にいたか」

「・・・何しにきたのよ。あの篤って奴の肩を持つんでしょ？」

屋上の扉を開くと目を赤く腫らした鈴がいた。

多分俺が鈴の立場だったとしても泣くだろう。

「いやまあ、そうなんだが、流石に見過ごせなくてな」

「・・・アンタ知ってるんだったわね、私が一夏とした約束」

「あれな・・・、まあ、100%一夏が悪いんだが、一夏があんな約束、まともな解釈してるわけないだろ？」

「・・・それでも、それでも、ちゃんと覚えていてほしかった」

「で、諦めるのか？」

「・・・諦めるわけじゃない。私はあいつのことが好きなんだもの」

「ははは、お前らしいな。もう大丈夫か、俺は戻るぜ」

「ええ、わかった」

「ま、あれだ、クラス対抗戦であいつをポコポコにしてやればいいさ」

「そうね、そうするわ」

「ああ、後、鈴」

「何よ？」

「久しぶり、元気そうで何よりだ」

「・・・ふふっ、本当ね、久しぶり」

さて、戻るとしますか、言いたいことも言った。

「流、ありがとう」

「あいよ」

屋上を出てクラスに戻る俺。

クラス対抗戦がいろんな意味でおもしろくなりそうだった。

クラスに戻った後、一夏をボコボコにしろと言ったことを伝えた時、女子全員がボコボコにされて当然というように頷いていたのが印象的だった。

そして転校してきたのは一年ぶりにあつた幼馴染だった。まる。

第八話 転校生は・・・セカンド幼馴染（後書き）

なんかいろいろすっ飛ばした感じがする。

まあいい、所詮文才のない俺に表現できるわけもない。

第九話 馬鹿を倒せと・・・轟き叫ぶ(前書き)

俺・・・、これ投稿しおわったら現時点での設定を書くんだ・・・。

第九話 馬鹿を倒せと・・・轟き叫ぶ

クラス對抗戦の最初の相手が鈴だということが決まってから数週間後、五月。

俺は整備室にいた。

目的はもちろん未完成だった俺のIS『黒鉄』の完成である。

黒鉄に積まれている外部ジェネレータは、エネルギー兵器の使用、AIC（単純に機動にしか使われていない）、そして黒鉄最大の特徴、『プライマルアーマー』へのエネルギー供給に使われている。

プライマルアーマー（以下PA）は俺が設計、システム構築をした兵装で、ジェネレータから供給されるエネルギーを粒子状に転換、非固定浮遊部位を基点に機体の周りに展開することによって、実弾、エネルギー問わず攻撃を防ぐことができる防御機構である。

攻撃を受けたりしなければ、粒子は減ることはないが、攻撃を受けるたびにジェネレータからエネルギーが供給されるので、攻撃を受けるとジェネレータのエネルギーが減っていく仕組みである。

が、威力の高い武装や、貫通力に優れた武装、そして言わずもがな白式の『零落白夜』だと、PAは貫通されてしまうし、特に『零落白夜』には大幅にエネルギーが削られたりするという欠点もある。

とはいえ黒鉄の特徴とも言えるので完成させないという選択はなく、それを完成させるために俺の最新のパーソナルデータを更新させながらプログラムを構成させていく。

（この分なら恐らく對抗戦には間に合うな。大元のシステムは出来ていたしな）

自分が戦うわけではないが、万が一のこともあるので、完成をさせたかった。

姉さんも手を加えたんだつたらついででもこれ完成させてくれよ・
。

というか十全の性能を引き出して試したいというのが本音だが。
さて、今日はこれぐらいでいいか。

発注していた武装も届いたし、訓練もしておかないといけないしな。
今ではオールタイプと言ってもいいノートパソコンを閉じる。

見た目は一昔前のパソコンだが、姉さんから誕生日にもらったもの
で、中身は高性能である。
もちろん現代基準で。

(鈴のISの情報は・・・、ま、秘密にしとこ)

こんなことを考えているとき、一夏が鈴に対して貧乳と言ってさら
に激怒させていることを知る由もなかった。

訓練を終えて、部屋に着いたらベッドが粉々に吹っ飛んでいたので、
一夏のベッドを奪った。

右手であらゆる異能を打ち消せる男みたいにフラグを乱立させるの
が悪いのだ、俺は悪くない。

悪いだろうか？いや、悪くないだろう。
ですよ？

クラス対抗試合当日。

代表候補生と噂の男のIS操縦者の対決というのもあってか、観客
席には人がいっぱいだった。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて俺と鈴は空中で向かい合う。

その距離約五メートル。

俺と鈴は開放回線オープン・チャンネルで言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少しくらいボコボコにするレベルを下げてもいいわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

手加減なんていらぬ。

経緯はどうであれ、真剣勝負で手を抜くのも抜かれるのも冗談じゃない。

互いに全力でやって初めて意味がある。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

それは脅しても何でもなく、事実だった。

ISのことを流に教えてもらうときに、そういうものがあるのを知った。

IS操縦者に直接ダメージを与えるためだけの武装も存在するらしい。

勿論そんなものは協議規定違反だし、開発されても軍用にしか開発されていないらしいが。

そして結局のところ、『殺さない程度にいたぶることはできる』という現実は変わりようがなく、また、代表候補生はそれが可能ということだろう。

『それでは両者、戦闘を試合してください』

流に勝ったのは、機体の能力による差という奇跡、セシリアに勝ったのは流に対策を練ってもらったからという奇跡。

そして奇跡に三度目などない。

だけど、やれるだけやってやるさ！

第二アリーナのピットで、一夏と鈴の対戦を、リアルタイムモニタ
ーで観戦していた。

黒鉄は何かP Aの開発が間に合った。

おっと、動いたな。

鈴の青龍刀による初撃をなんとか防御した一夏がクロスクリッド・ターン二次元躍動旋回を
使い、鈴を正面に捕らえる。

鈴の攻撃をさばいているうちに消耗戦になるとでも判断したのだから、距離をとろうとした一夏。

「馬鹿め、近接武器しか持ってないやつが距離をとってどうすんだ
よ……」

教えてもいないし調べてもないのだから、鈴の甲龍の第三世代型兵装のことも知らないのだろう。

目に見えない拳に殴られたように一夏が吹き飛び、地面にたたきつけられる。

「なんだあれは……？」

「『衝撃砲』だな。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、過剰で生じる衝撃それ自体を撃ち出す第三世代型兵器」

ふむふむ、本当にボツコボコにされそうだな。

自業自得といえはそれまでか。

と、一夏が何とか衝撃砲を回避していると、互いに動きが止まった。どうやら会話しているようだ。

さて、一夏はどうするか。

鈴はバトンのように両刃青龍刀を振り回し、一夏は雪片を握りなおして、加速体制に入っていた。

鈴が衝撃砲を撃つ前に瞬時加速で奇襲するつもりか。

そして瞬時加速を発動させた一夏に驚き、動きが鈍る鈴。

雪片の刃が接触しそうになったとき、それは起こった。

ズドオオオオオオン！

アリーナに轟音が響いた。

「つつ！何があつたんだ！？」

箒が叫んだ。

かくゆう俺もあまりの事態に少々焦っている。

「アリーナの遮断シールドが破られたのか・・・！」

それが何を意味するのか。

アリーナの遮断シールドはISと同じもので出来ている。

つまりは、それを貫通するだけの威力を持った何か、遮断シールドをぶち破ったということ。

そして下手をすればISの操縦者が危険にさらされるといふことだ。アリーナ中央の煙が晴れ、乱入してきた存在が見えた。

「あれは……、IS……か？」

ISと思われる所属不明機が、アリーナ中央にいた。

だけど……、あんなISありえるのか？

まず目を引かれるのはそのISが『全身装甲^{フル・スキン}』であるということ。

通常、ISは部分的にしか装甲を展開せず、防御はシールドエネルギーや俺のISの持つPAや、物理的なシールドを搭載したものが主である。

そして全身装甲だということ差し引いても、異形だった。

その手は異常に長く、つま先ぐらいまであり、肩と頭が一体化し、首がない。

剥き出しのセンサーレンズに全身についているスラスター。

何処からどう見ても、普通のISではなかった。

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？鳳さんも！聞いてますー！？」

そして山田先生がISのプライベートチャンネルを使って通信していた。

声を出す必要はないのだが、焦っているのだろう。

はたから見ると頭がイッてる人である。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

ふむ、一夏のピンチだというのに案外冷静だな？千冬さん。

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

お？

「千冬さん。それ、塩です」

ピタッ、っと千冬さんの手が止まる。

ふむ、表面上は冷静でも内心非常に焦っている、か。不測の事態でもなおそれを表に出さないというのは普通に尊敬に値するな。

「先生！わたくしにISの使用許可を！すぐに出撃できますわ！」
セシリアがISの使用許可を要請する。

「そうしたいところだが、 これを見る」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示されている情報を切り替える。が、何がおきているのか大体のことは把握できているので、箒とセシリアが覗き込んでいるが、俺は一夏、鈴とあのISの戦闘を見る。俺は千冬さんに言い包められているセシリアを横目に歩き出す。行く場所は言うまでもなかった。

「私も行くぞ、流」

箒に気づかれた。

「駄目だ。専用機も持っていないお前になにができるんだよ？」

お前、あのビームで狙われたりしたらどうすんだよ？
最悪死ぬぞ？

「つく、しかし！」

「いいから、俺に任せとけて。親友が危険に晒されてるんだ、それを助けることができる力を持っている俺が行かなくてどうすんだ」

「っ……、わかった、頼む……」

おうおう、悔しそうな顔してんなあ。

「任せとけよ」

俺のIS、整備と武装のインストール間に合ってよかったぜ。
お披露目と行きますか。

「……あら？流さんはどちらへ？」

セシリアが流がいなくなったのに気付き、それを見た千冬がため息を漏らしたのは言うまでもない。

「くっ……！」

一撃必殺の威力を持つ『零落白夜』を発動させて斬りかかるも、するりとかわされる。

計四度目のチャンス逃した。

俺の技術が未熟なだけじゃない、スラスターの出力が異常に高いのか……！

「一夏つ、馬鹿！ぼうつとしてないで動きなさいよ」

「わかつてる！」

零距离からの離脱に一秒とかならない出力、全身についたスラスターのおかげで普通のISならば必殺の間合いですら回避される。

攻撃を回避した後、必ず反撃をしてくるのだが、その方法が腕を振り回しながらビーム砲撃を行って接近するという無茶苦茶なものだった。

「くそ、不味いな、このままじゃジリ貧だ！」

「ほんとね、しかもエネルギーの残量も心許なくなってきたわ。今の火力と状態であいつのシールドを突破して機能停止させる確立は一割あるかないかってとこじゃない？」

くそつ、どうする？

そんな、絶望が見えてきた状況だった。

「……？一夏、あれ、何かしら？」

「……あ？」

鈴が指差した場所、所属不明のISの向こう側、遮断シールドだっ

た。

「あれは・・・線・・・？」

線がシールドに走っていた。

青く、まるで、高エネルギーのブレードで切り裂かれたみたいに・・・。

ドゴオン！

注視していたら轟音と共にシールドが爆発した。

所属不明ISも振り返りそこを見る。

煙から姿を現したのは。

「っは、好き勝手やってくれてるよな？真剣勝負に乱入する馬鹿の末路は撃破されるだけだったのに」

背中から大口径のキャノンを構え、以前戦ったときとは違い、背中に二つの武器、腕に二つの武器を装備した、黒いISの中に白として存在する親友だった。

レーザーブレードを格納し、右手に長く、長方形のような印象を受けるBFF社製重ライフル『051ANNR』を、左手に尖った形状で、持ち手から銃口に行くにしたがって細くなっていくレイレナード社製アサルトライフル『MARVE』を展開する。

背部右側には有澤重工製大口径グレネードキャノン『OGOTO』、

左側にはインテリオル・ユニオンのハイレーザーキャノン『SIR IUS』を展開させ、防御機構、プライマルアーマーを機体の周囲に展開させる。

「おらよ！」

敵ISに向かってもう一発、グレネードを撃つ。

広範囲にわたって爆風が発生し、高出力のスラスタで離脱しようとしていたISがわずかにバランスを崩したが、すぐに体勢を立て直してこちらを向いてきた。

「遅かったな、流」

「悪い悪い、筈が飛び出しそうだったの説得したのと予想以上に人が多くて進めなくてな」

「まったく、あんたも無茶するわねえ。まあいいわ、あれ、さつさと撃墜しましょ」

「ああ、そのことなんだが、あれ、恐らく無人機だ」

「はあ？無人機？」

そう、無人機。

「流もそう思ったのか？俺もそう思っててさ、動きは機械的つつうか人が動かしている感じがしないってか」

「あんたら馬鹿？ISは人が乗らなきゃ動かないでしょ」

本来そういうものなのだが。

「あいつ見て考えてみる、鈴。人体構造上、あんな形をした腕、ねえよ。関節の位置とかおかしいしな。それに、だ。気付いてるか？俺たちが会話してる時にはあいつ、攻撃してきてないんだぜ？」

そう、まるで何かを観察しているような感じだった。

「あーもう、で？何、あれが無人機だったとしたらどうするつてのよ？」

「そんなもん、簡単だろ？」

「人が乗ってないなら容赦なく、完膚なきまでに、全力で攻撃しても大丈夫ってことだしな」

一夏がいうとおり、怪我する危険も死ぬ危険もない、俺たち以外は。

「うし、やることも確認したし、一夏、突っ込め。俺と鈴がお前を、確実に、あいつのを撃破できるようにしてやる」

「勝手に決めないでよ！確かに協力するけどさ！」

だったらいいじゃねえか、一夏にかっこいいところ見せられるぜ？

「俺が一夏の盾になりながら接近してやる。安心しろ、この機体ならあの攻撃の最大出力でも何発かは耐えられる。」

「わかった、頼む」

「そんじゃ、行くか。鈴、援護頼む！」

「わかったわ！」

ライフルとアサルトライフルを敵ISへ射撃して突撃する。
重ライフルの重低音とアサルトライフルの軽快な音が鳴り響くが、それを意に介さぬようにこちらへ向けてビームを砲撃してくる。
PAに貫通し、IS自体のシールドに全て防げているが、外部ジェネレータ、シールドエネルギーともに減っていく。

「っちい！予想以上の火力だな、おい！」

シールドエネルギー残量546、外部ジェネレータエネルギー残量82%。

予想以上に減るのが早いが、許容範囲内だ・・・！

「無視してんじゃないわよ！ほらほら！」

ナイスアシストだ鈴！

鈴が敵ISの気を引くために衝撃砲を撃つ。

「今だ一夏！突っ込め！」

「おおおおおお！」

零落白夜を発動させた一夏が瞬時加速で突撃する。
それを見た敵ISがビーム砲口を一夏に向ける。

「やらせるか！」

背中のグレネードの折り畳まれている砲身を展開、瞬時に敵ISSに向けて撃つ。

大口径のグレネードキャノンの弾頭が、敵ISSのシールドに接触し、広範囲に爆発を起こす。

「これで、終わりだあああ！」

一夏の零落白夜が、煙がはれてようやくこちらを視認した敵ISSの胴体を袈裟懸けに切り裂く。

そうしてようやく、敵ISSが沈黙した。

「つたく、やっと止まったか。流星にひやひやしたぜ」

ものすごい勢いでエネルギーが減っていくものだからなかなか焦る。

「結局なんだったのかしらね、あれ」

何だったか、ねえ。

正直わからんな。

無人機だったとしても誰が、どうやって作ったのか、企業連の情報網にも引つかからずに作り上げるなど技術、資本ともかなりのレベルで高くなくてはいけないだろう。

「まあいいぜ、何にしてもこれで終わりだろ」

一夏の言つとおりか、調べるのは学園側に任せますかね。

「んじゃ、戻る」

敵ISの再起動を確認！警告！白式、ロックオンされています！

(なににい！？)

ハイパーセンサーがあれば、360度見渡しているのと同じだとい
うのに、敵ISの方へ振り向く。
両腕を最大出力形態に変形させた敵ISが一夏を狙っていた。

「くそ！落ちろ！」

ハイレーザーキャノンとグレネードキャノンを展開、即座にロック
オンするが・・・、間に合わない・・・！

「うおおおおお！」

そしてその最中、一夏が発射されたビームに突っ込んでいた。

「一夏！？」「一夏あ！？」

ビームを切り裂きながらも敵ISは一夏に斬られて、沈黙した。
残ったのは、動かない敵ISと、倒れ付す一夏だった。
乱入してきた馬鹿は・・・、一人のけが人を出しながらも機能を停
止した。

第九話 馬鹿を倒せと・・・轟き叫ぶ（後書き）

あとがき

どうも、おはようこんにちはこんばんは。

オリ主の戦闘シーンだというのに短い。

前書きで書いたように、設定と解説を次は投稿しようと思います。

ああ、早くシャルとラウラ出したい・・・。

現時点での設定および解説（前書き）

だまして悪いが解説なんadena。
話は機体しないでくれ。

現時点での設定および解説

よく来てくれた。

今からここで書かれるのは、知らない人のために、アーマード・コア4（AC4）、アーマード・コア フォーアンサー（ACfa）についての適当な解説と、現時点でのオリ主の設定およびオリISの設定と解説だ。

悪いが、考えていることを文章にするのは苦手なんでな、読みづら
いだろうが、我慢してくれ。

まずは、AC4、ACfaからだ。

AC4、ACfaは、フロムソフトウェア社が開発したメカカスタ
マイズアクションというジャンルのゲームだ。

アーマード・コアと呼ばれる機動兵器に乗って、ミッションをこな
して行く、といった内容になっている。

この二つにおいては、ネクスト、と呼ばれる次世代のアーマード・
コアが開発されている。

AC4、ACfaの世界では、国家というものはなく、企業が実質
的に世界を支配しており、AC4では6つの大企業が、ACfaで
は3つの企業グループが、主権を持っている。

そして企業の主戦力となっているのが、ネクストだ。

ネクストは、頭、コア（胴体）、腕部、脚部、ジェネレータ、各部
ブラスター、腕部武器、背中武器、肩武器から構成され、ミッシヨ
ンに応じて装備、機体を変更することで、自分だけの機体を作れる
のが特徴である。

そしてネクストのパーツや武器などを製造、販売しているのが企業

である。

ネクストを運用するには企業の支援がなければほぼ不可能と
いいだろう。

また、企業には、AC4ではレイレナード社、GA社、GAE社、
オーメル社、インテリオル・ユニオン、アクアビット、イクバー
ル社、ローゼンタール社がある。

ACfaでは、GA、BFF、有澤重工、他中小企業からなるGA
グループ。二つの企業が合併してできたインテリオル・ユニオン、
アルドラ、アクアビットとGAEが合併してできたトーラスで構成
されるインテリオルグループ、オーメル・サイエンス・テクノロジ
ー、ローゼンタール、旧イクバールのアルゼブラの三社からなるオ
ーメルグループがある。

こんなところか、正直、かなり大雑把だ、詳しく知りたいやつは、
ぐぐってくれ。

この小説では、企業のことが後々、主人公の口から語られるだろう。
詳しい解説はそのときか、その後になる。

次に、この小説のオリジナル主人公、篠ノ之流について語るとしよ
う。

何度か触れられたように、篠ノ之箒とは双子で、一応兄にあたる。
生まれつき病弱だったが、どうやら発作などを起こすたびに篠ノ之
束に助けられていたようだ。

束博士が失踪したときに、一緒につれていかれたらしいが、何があ
ったのかは詳細は確認できていない。

が、一年後には織斑千冬の所に預けられたらしい。

ほとんど外界と接触せずに過ごしてきたのと、姉と仲がよかったの
も相まって、常識というものが壊滅的だったといってもいい。

小説中であそこまでの常識を持っているのは、織斑姉弟や、中学の友人たちの教育の賜物だろう。

ちなみに自称、シスコンらしい。

また、篠ノ之束にナニをされたのかは不明だが、その影響で、カロリーなどの消費が著しいらしく、毎日大量に食わないとやっていけないそう。

外見はアルビノ、白髪白肌に色素の抜けた赤い目だ。

見かけたらすぐにわかるだろう。

最後に、オリジナルIS、篠ノ之流の専用機、『黒鉄』についてだ。このISはもともと、篠ノ之流が設計、おおまかなシステムなどを開発し、企業連に開発を提案した機体だ。

企業連は、上にも出てきた企業の中から、国を超えて提携した企業の集まりだ。

なぜ篠ノ之流の提案で開発したのかは、どうやら、斜陽企業だった企業に、篠ノ之束にISの技術を教えてもらった篠ノ之流が「こんな技術作らね？」と技術提供されたのがきっかけらしい。

まあいい、この機体は、ある問題が発生し、開発が延期になっていたところを、篠ノ之束が手を加えた機体だ。

どんなことをされたのかは不明だが、完成させたわけではなく、何かを追加したらしい。

企業連の機体全般にも言えることではあるが、この機体は、ACのことについて語ったように、ネクストを模して作られている。

プライマルアーマーなども、もともとはネクストの技術だ。

この小説ではネクストなど存在しないから、純粹にISの技術らしいがな。

ちなみに、コンセプトはハイレーザーキャノンを装備したシュープリス、だそう。

わからない人はシュープリスでぐるといい。

黒鉄にインストールされていた武器を解説しよう。

まずはクラス代表決定戦で使われたアルゼブラ社製のハンドガンの『LARE』とレイレナード社製のレーザーブレード『DRAGONSLAYER』だな。

『LARE』は、小説本編でも流がもらしていたように、弾速、射程距離ともに最低クラスであり、良くも悪くも副兵装だな。これはゲームのほうでも変わらない。

『DRAGONSLAYER』は、攻撃力などは非常に高い近接兵装なのだが、いかんせんブレードレンジが非常に短い。ゲームで使うには愛が必要だろう。

この小説では、レーザーの刀身を作る際に必要なエネルギーは、外部ジェネレーターから供給されているらしい。

次に前話、所属不明IS撃破で使われた武器だな。

腕部兵装のBFF社製重ライフル『051ANNR』、レイレナード社製アサルトライフル『MARVE』、背部兵装の有澤重工製グレネードキャノン『OGOTO』、実際の温泉の名前が由来らしい、インテリオル・ユニオン製のハイレーザーキャノン『SIRIUS』だ。

『051ANNR』は長射程、高威力、高精度のライフルで、トータルバランスに優れた兵器だ。

作者はゲームにおいてもこの武器を使用することが多い。

『MARVE』は連射力、単発での威力などに優れており、非常に

評価が高い。

ISでは、弾が格納されている量が多いのであまり問題にはならないが、ゲームではその装弾数の少なさが欠点といえる。それ以外は総じて優秀な傑作ライフル。

『OGOTO』は、大艦巨砲主義の有澤重工が開発した非常に威力の高いグレネードキャノンだ。

ゲームにおいては爆発範囲などが広く、高威力、装弾数も多い。欠点は非常に重いつたところか。

小説では競技用に威力が下げられたものが使用されるが、軍事用のそれは競技用のものとは比較にならないだろう。

『SIRIUS』は、レーザー兵器を主に開発しているインテリオル・ユニオンが開発したハイレーザーキャノンだ。

高い威力をもっているが、消費されるエネルギーなどは非常に高く、撃ちまくっているとすぐにエネルギー切れになり、運用は難しい。

これはゲームでも言えることだろう。

また、この小説では、OGOTOと同じくりミッターがかけられている。

こんなところか。

まあ、わかりづらいかもしれんが、我慢してくれ。

これが作者の限界だ。

ああ、後、ACを知っている人たち向けの諸注意だが、この小説ではライフルはアサルトライフル並みの、アサルトライフルはもう少し早く、つまりはリロード時間が短くなっているということを頭の片隅に入れておいてくれ。

知らない人はあまり関係ないだろう。

なお、パーツの基準はA C f aのレギュ1・4をベースとしている。

以上だ。

よければ、これからもこの小説を読んでいってくれ。

第？話 悪いが・・・まだ死ねんのだ（前書き）

まさかの番外編である。

第?話 悪いが・・・まだ死ねんのだ

銃声があちらこちらで鳴り響く。

この砂漠のような場所で行われている戦闘は、ISが登場する前から存在した人と人同士の、戦車やヘリがやってくる程度の戦い、紛争だ。

「ツクソ！応援まだか！？もう持たない！」

「撃て！撃ちまくれ！」

人間の命が一瞬で消えるのが普通な場所。

この中東地域ではISが登場した今でも紛争が絶えず勃発している。そんな銃声と爆音が鳴り響く中、一人の女性がいた。

褐色の肌に砂漠の砂のような色をした髪の毛、すらりとした体はあまり起伏があるわけではないが、鍛えられた体をしている。

そしてその首についているものに触れて、

「バルバロイ、起動」

そのISを起動させた。

そのISは、赤い砂を含んだ砂漠の砂の色をしており、全体的に丸みを帯びており、装甲が少ない、高機動のISだった。

右手にアサルトライフルを、左手にはショットガンを装備し、背部左側には散布型のミサイルを装備していた。

戦いの真つ最中に出現したIS、敵も、味方も関係なかった。

「ISだと！？なんでこんなところに！？」

「退避、退避しろ！」

「弾幕をはれ！いくらISでも消耗すれば落とせる！」

いろいろな叫び声が響き渡った。

バルバロイと搭乗者に呼ばれたISは、異常な速度でもって戦場をかけた。

軽量のISだったとしても異常な速度で、である。

そしてそのアサルトライフルとショットガンを、敵に標準を^{人間}あわせ、トリガーを引いた。

ISに使われている弾頭などの大きさは人間が使うものよりはるかに大きい。

つまり、人間など当たればバラバラになる、ということだった。

まして競技用のリミッターもかけていないのではなおさらである。

銃口から弾が、散弾が発射されるたびに人間がバラバラになって吹っ飛んでいく。

戦車なども同じだ。

背部の散布ミサイルを戦車や人間が固まっているところにロックし、発射する。

IS同士の戦いでなら、けん制の意味合いが強いものだが、人間や通常兵器などにとっては多大な脅威である。

事実、ミサイルポッドから発射された十六発のミサイルは、爆炎を撒き散らしながらも人間もろとも戦車を破壊する。

そうしてそんな戦闘が繰り返された中、生存者など、ISの搭乗者しかいなかった。

『アマジグ？任務は終えたかしら？』

アマジグと呼ばれた女性に通信が入る。

ISのプライベートチャンネルだった。

「スコールか、終了した。今から帰還する」

『ふふっ、了解。気をつけて帰ってらっしゃい』

「了解、通信を切る」

彼女は空を見上げる。

太陽が昇っている。

風は砂を巻き上げていく。

ISが去った後には、凄惨な光景しか残っていなかった。

第十話 波乱は・・・ここから始まる(前書き)

そういえば・・・感想が2件というさびしい状況なのですが、ぶつちやけ質問でもなんでも待ってますんで書いてくれると作者のテンションが有頂天になります。

あ、作者はガラスハートなので優しく罵ってあげてください。

第十話 波乱は・・・ここから始まる

「馬鹿者が。いくら防御を念頭に置いた兵装を積んでいたとしてもあんなことをする奴があるか。それも試験運用はあれが初めてなどと」

「あゝ、まあ結果オーライってことで一つ」

「ふん、まあいいだろう」

俺は今、IS学園の保健室にいた。

あのISから受けた砲撃は予想以上の出力だったらしく、PAとシールドで減衰したものの、多少の怪我を負っていた。だからといって、

「何もベッドで横になる必要はないと思っんですが？」

「馬鹿者、お前の怪我の直りが早いと言っても、無視できるものではない。生活に問題はないだろうが、今は休め」

「はあ、言うとおりにしておきますよ。んじゃちよつと寝ます」

仕事中とプライベートでのギャップの差が激しいな。ファンにギャップ萌えする人が増えるんじゃないの？俺も一夏も泣きたくなるくらいだしなかったのに。

「私は後始末が残っている。何かあったら、私のところに来い。で

はな

「へ〜い」

んじゃ、寝ますか。

すぐに睡魔が襲ってくる。

思っていた以上に疲労は蓄積していたらしく、意識が沈むのは早かった。

人の気配を感じて目を覚ます。

一夏と、俺以外の誰かがいまこの部屋にいる。

一夏の方を見てみると……、

「何しようとしてんだ？お前」

「うひゃあ！？」

一夏に顔を近づけている鈴がいた。

「な、な、流！？お、起きてたの！？あ、いや！こ、これは違うのよー！」

何が違うってんだよ。

目を瞑って顔を真っ赤にして、明らかにキスしようとしてたろ、お前。

そして流石に間近で大きい声を出したからか、一夏が起きそうだった。

た。

「……ん、鈴……か？何でそんなに顔赤いんだ？」

「べべべ別に何もしてないわよ！？そう、夕日、夕日のせいよ！」

いや、無理ないか？それ。

「あー、クラス対抗戦、無効になったんだ……」

「そりゃそうだろうよ。あんなことになったらな」

「無理もないわね」

空気が重いんですけども、鈴、その俺邪魔だから消えてくんない？
見たいな視線ヤメテ。

「あー、鈴、その……悪かったな。色々」

全くだよ、俺のベッド消し飛んでたのなんて完全にお前のせいじゃないか。

「う、ま、まあその、あたしもムキになってたし……いいわよ、もう」

「あ、思い出した。あの子の約束、正確には『料理が上達したら毎日あたしの酢豚食べてくれる？』だっけ。で、どうなんだ？上達したのか？」

「え、あ、う……」

俺、邪魔者ですよ？

ってか筭といい鈴といい、俺こんなばっかじゃね？

俺にも春が来てほしいです……。

「ふと思ったんだけどさ、その約束って違う意味なのか？俺はてっきりタダメシを食わせてくれるんだとばかり思ってたんだが」

ひゃひゃひゃ、おもしれー。

「ち、違わない！違わないわよ！？だ、誰かに食べてもらったほうが料理って上達するじゃない！？だから、そう、だから！」

鈴も鈴で必死だな。

そのまま本当の意味教えればいいのに。

「確かにそうだな。いや、もしかしたら『毎日味噌汁を』とかの話かと思ってさ。違うんならいいけど。深読みしすぎだな、俺」

いや、お前にしては珍しく正解だよ。

というよりその発言が深読みだよ。

「そ、そうね！深読みしすぎじゃない！？あは、あははははは！」

……ごめん鈴、流石に同情する。

「そういえば、こっちに帰ってきたって事は店再開するのか？親父さんの料理うまいからな、また食べたいぜ」

それには大いに同意しておく。

正直あの人の中国料理は半端じゃなく美味かった。

「あ……。その、お店は……。しないんだ」

……うん？

「あたしの両親、離婚しちゃったから」

……は？あんな仲の良かった二人が？

一体全体何があったら離婚なんてするんだ。

聞くと転校したのも離婚が原因で、親権は母親が持っているらしい。女性優位な社会だからな、当然か。

父親は一年近くあつていないらしく、別れたときは元気だったので、今も元気なのでは？ということらしい。

「家族って、難しいよね」

俺は……。親の顔を覚えていない。

幼いころ覚えてるのは俺の様子を見に来てくれていた一夏、篤、千冬さん、姉さんの顔ぐらいだ。

いや、何言ったって無駄か、他人の心の想いを完全に理解することなどできない。

「なあ、鈴。今度どっか遊びに行くか」

おお？まさかの一夏からのデートのお誘い！？

「え！？それって、デー」

「流とか、五反田とか、野々宮とか、中学のころの友達呼んでさ」

おうーい、俺を入れるなよ、二人で行けよこのバカ！

「あ、あんたと二人つきりなら行ってあげても」

バーン！

保健室のドアが勢い良く開いた。

正直びびった。

あ、っていうか面倒ごとの予感。

逃げるに限るな。

「んじゃ、俺先に部屋に戻ってるわ。ごゆっくり」

まあ、ゆっくりしていった結果がこれなわけだが、後ろから聞こえてくる喧騒を尻目に、歩いていく。

筈が保健室に突撃したような気がしたが、気のせいだろう。気のせいだと信じたい。

夕食を平らげ、寮の部屋でパソコンをいじくっている。

PAの調整のためだった。

PAは第三世代型兵器なので、IS操縦者のイメージコントロールにより、エネルギー粒子を前面のみに集中させるといった事もできる。

それが出来ていればあのISの攻撃はIS自体のシールドに完全に阻まれていただろう。

そのイメージトレーニングと調整である。

「うう、ただいま・・・」

と、一夏が帰ってきたか。

「ほんじつはおたのしみでしたね」

「どこも楽しくないからな！？しかもいきなり保健室から出て行きやがったし！」

「飯もシャワーも済ませてISの調整してたんだ。偉くね？」

「どこが!？」

馬鹿な、IS学園の生徒たるものISの整備だの勉強だのをしないでどうする。

と、そんなやりとりをし、もう寝よう、というときだった。

コンコン。

ん？誰だ？

「一夏任せた」

「いや、流出てくれないのかよ・・・。体が痛いのに」

大丈夫、自業自得。

一夏が扉に向かい、開けると箒がいた。
んお？こんな時間になんだったってんだ？

「箒か、どうしたんだ？」

「い、一夏」

「なんだ？」

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが・・・」

六月末にやるらしいあれか。

完全に自主参加のトーナメントで、成績によっては国や企業からお呼びがかかるものである。

「わ、私が優勝したら」

・・・お？

「っ、付き合ってもらおう！」

「・・・はい？」 「・・・は？」

思わず反応する。

いや、え？まじで？俺は口を開けてポカンとしている。

恐らく一夏も同じ状態だろう。

そして、これが、これからこの学園と俺たちに起きる波乱の幕開けだったことを、今はまだ、誰も知らない。

第十話 波乱は・・・ここから始まる(後書き)

あとがき

うーん、解説で書くことと思ってたこと、何気に結構書き忘れてたりする。

が、めんどくさいからいいや)殴

前書きのとおり、感想とか待ってます。

第十一話 休日は・・・なんだ？（前書き）

ん、いつも以上にグダグダな文章に。

次だ、次、次で挽回。

シャルとラウラも出てくるしな・・・！

第十一話 休日は・・・なんだ？

六月上旬、日曜日、晴れ、五反田家。

久々のIS学園の外に出ていた。

いや、マジ入学から二ヶ月近く家にも帰ってないとかねーよ。

俺の住んでる場所は他人の家だがな！

ちなみに箒はいない。

「で？」

「で？つて、何がだよ？」

ゲームをやっている最中に話しかけるんじゃないよ。

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

あゝ、そんないい思いしてるか？

気分は動物園の客寄せパンダなんだが。

せいぜい朝早くに部屋をでると寝巻き姿でうろついている寝ぼけ目の女子だな。

なので朝早くから外に出ることもできないという。

目の前にいる赤髪でバンダナをしている男の名前は五反田弾。

中学校からの付き合いで、三年間一緒のクラスだった。

絶対なんか謀られてたよな？

「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけで天国じゃねえか。なにそのヘヴン、いやむしろHELL、美少女地獄。招待券ねえの？」

・・・何か殺意沸いたんだけど、なんでだ？割と本気で。

「つつか、アレだよ。流がいてくれて本当に助かった。男一人である場所だと話す相手もないし息苦しかったし。後鈴もかな、やっぱり話せるやつは多いほうが良いよな」

「うん、まあ、いいか。」

転校生というものを、恐らくそこまで理解していないのだろう。聡い人間なら気づくだろうけどな、千冬さんは多分気づいてるし。

「ああ、鈴か。鈴ねえ・・・」

「弾、そのニヤ面キモイぞ。というか生理的に無理」

俺は今恐らくとてもイイ！笑顔で弾を見ているだろう。

「ひどいな！？それが親友に言う言葉か！？つて、ああ！ちょ、アサルトアーマーとか、待て、アサルトアーマーAA後のグレネードは、AMSから光が！」

今、俺たちがやっているゲームは、『アーマード・コア フォーアンサー』である。

製作会社は企業連となぜか？仲のいい日本企業である。

『IS/VIS』インフィニット・ストラトスノヴァースト・スカイ』などに売り上げなどは負けているが、それでも非常に人気の高いゲームである。

頭や体などのパーツ、豊富な種類の武器などを組み合わせることができる、自分だけの機体を作ることができるのが特徴の一つだ。

「くうう、ガチタンにAAやってグレネードとか、鬼か！」

「っふ、ガチタンなど遅くて旋回性能悪くてドミナントでもなければまともな運用できないネクストの形をした的だ」

ちなみにネクストとはこのゲームにおいての人型機動兵器、どこぞの逆のアニメでいうナイト アフレームとか自由の暴君が登場するアニメのモビ スーツである、簡単に言えばだが。

「うーん、やっぱり流に勝てないな。弾には勝てるんだけど」

ちなみに弾は脚部パーツをタンク型のパーツに俗に言う『社長砲』を積んだ機体。

俺はBFF063フレームの中量二脚、一夏はその性格の表れか軽量二脚のレーザーブレードのみの機体を使っている。

追加ブースターに装備しているのが月光という恐ろしい機体である。正直とても怖かったので一夏が弾を攻撃してる間にちまちまAP削って沈めた。

「というかチーム戦でも天井その他が狭いMAPでもないのにタンクで社長砲とかどんだけロマンにこだわってんだよ・・・」

「お前には社長砲の良さがわからないのか！？展開ギミックから射撃時のギミックまで素敵性能満載なんだぞ！？」

まあ、グレネードがロマン武器だというのはわかる。

グレネード積むために積載チューンするとかあるあるだよね？

ちなみに俺は四脚か063AN、アリーヤベースの機体しか使わない。

「あゝ、けど流石に腹減ってきたな。」

と、一夏が腹をさすりながら言う、暗に飯食いたいと言っているわけだが、確かに腹は減っている。

「んじゃ下いって飯食う」

「お兄！さつきからお昼出来たって言ってるんじゃん！さつきと食べに」

どかん！とドアを蹴って入ってきたのは弾の妹、五反田蘭だった。

「あ、久しぶり。邪魔してる。」

「久しぶり〜。でも女の子がドアを蹴飛ばすのはちょっと・・・」

「な、な、流さんに・・・、いいいい一夏さん!？」

しかし蘭も結構ラフな格好だな。

IS学園の女子とそう変わらないレベルだぜ。

千冬さんと、あの寮での生活で大分慣れはしたが。

「え、あ、あの、き、来てたんですか？全寮制の学園に通ってるって聞いたんですけど」

そして見ればわかるとおり、一夏に惚れてる女の一人だ、ってか今までで無意識に何人落としたっけ？

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見と一緒に流とね。ついでにここに寄ったんだ」

「俺はついでにいくつか物取りに来ただけだな」

「蘭、お前なあ。ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思われ」

ギンツ！蘭の視線一閃。

エコレーザーみたいな視線ですね。

「・・・なんで、言わないのよ・・・」

「い、いや、言ってなかったか？そうか、そりゃ悪かった。ははは・・・」

「・・・」

おお、すごいジト目。

その道の人がいるならば悶え苦しむだろうに。

「お、お二人とも食べていきますよね・・・？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「もち。あ、量はかなり多めになって言っておいて」

「は、はい、わかりました」

ぱたん、とドアが閉まる。

「爆熱兄妹とか考えてんだろ？一夏」

「どうしてわかるんだよ!？」

お前思考だだもれだもの。
いや口に出してるわけじゃないんだけども。
そして下へと降りて、食堂へ入る。

「うげ」

「ん？」

「お？」

「……………」

上から露骨にいやそうな顔をする弾、何で服変わってるんだ程度にしか思っていない一夏、俺、蘭である。

「何？何か文句でもあるの？あるならお兄一人で外で食べてきてくれない？」

「聞かまして一夏の奥様に流の奥様。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきてしまいますわ」

あー、うん、ごめん、キモイ。

「というか、何で着替えたんだ？」

流石一夏、期待を裏切らないぜ！

「え？えつと、それは」

「あ、わかった。デートか！」

「違います！」

テーブルを両手で叩いて即時否定した。
いやぁ、気持ちわかるぜ蘭。

「違うっつーか、むしろ兄としては違って欲しくもないんだがな。
何せお前がそんなに気合の入れたおしゃれをするのは数ヶ月に一度

」

ガシッ!

・・・ばかな、俺が反応できない速度のアイアンクローだと・・・?

「・・・・・・・・!!・・・・・・・・!!?・・・・・・・・!!」

「(コクコクコク!)」

そして小声で何かの脅しをしていた。

恐らく、『余計な事言ってるじゃねえよ馬鹿兄!潰されたいのか!
?死にたくないなら黙ってる!』みたいな。

怖い妹を持つと苦労するよね。

俺の場合可愛さあまって可愛さ百倍なわけだが。
え?ただ百倍になっただけ?キニスンナ。

「お前ら仲良いよな」

「「はあ!?!」」

ふむ、ハモったな。

「そしてモニるとかハニるとか考えてんだろ?」

「・・・俺、そんなに考えてることわかりやすい？」

「お前の考えるギャグはとても冷たい目で見られること間違いないだろ。そしておっちゃん、三杯目おかわり」

「いつの間にそんなに食ってたんだ!？」

お前らが漫才やってる最中に決まってるんだろ。

この『業火野菜炒め』ここ、五反田食堂の鉄板メニューである。これ一つでご飯三杯はいける。

「でよう一夏に流。鈴と、えーと、誰だっけ？ファースト幼馴染？と再会したって？」

「ああ、筈な」

「ついでにセシリアというライバルも存在する」

追加補足。

「いや、あいつはあの学園に入ってから知り合いになっただけだろ。」

それだけならどれほど良かったらうね・・・？

「ホウキ・・・とセシリア・・・？誰ですか？」

「ん？俺のファースト幼馴染とIS学園に入ってから知り合った代表候補生だな」

「なるほど……」

目を閉じて何かを考え出す蘭。
おう？

「………決めました」

「私、来年IS学園を受験します」

……。

がたたつ！

「お、お前、何言って」

ビュ　　ガン！

敵さんのおたまが弾の顔面に直撃する。
椅子に倒れこむように、じゃなく倒れこむ弾。

「え？受験するって……なんで？蘭の大学ってエスカレーター式で大学まで出れて、しかも超ネームバリューのあるところだろ？」

「大丈夫です。私の成績なら余裕です。簡易適正検査ではありませんがランクはAでした」

「それって希望者が受けれるやつだけ？たしか政府がIS操縦者を募集する一環でやってるっていう」

「はい。タダです」

まあ、タダなのはいいんだがな……。

「で、ですのて」

こほん、と咳払いを一つ。

「い、一夏さんにはぜひ先輩としてのご指導を……」

「ああ、いいぜ。受かったらな」

「や、約束しましたよ！？絶対、絶対ですからね！？」

「お、おう」

コクコクとうなずく一夏。

「お、おい蘭！お前何勝手に学校変えることを決めてんだよ！流もなんか言っちゃってくれ」

俺に振るのか、弾。

「というか、さっきから黙ってたけど、どうしたんだ？流」

視線が俺に集中する。

「いや別に。ただ、IS学園に行くのは賛成しかねる、っただけだ」

そう、今現在そこそこ不機嫌なのはそれが理由。

「……どうしてですか？」

どうして？

そんなもの決まってる。

「蘭？お前さ、ISをファクションとかと思ってないか？ともすれば人間なんざ一瞬で殺せる”兵器”を」

そう、何が言いたいかというと言ったことに尽きるのである。

「一緒にになりたい人がいるからそこに行く。まあ悪いことじゃあないだろ、むしろ確実に行ける場所を蹴ってそこに行くこと思ったことについては尊敬するよ」

弾と一夏ですら俺を真剣な表情で見ている。

「けど、その程度の考えで、あそこに行こうと考えてるのなら、俺は賛成しないってだけだ。IS操縦者は、良くも、悪くも、軍事力なんだからな」

ようは、その時が来たら、という覚悟をしなければならぬ。人を殺す可能性もあるということ。

「でも……、それでも……」

迷ってる時点で俺としてはアウトなんだがな！。

弾も心配だろうよ、二重の意味で。

一夏は多分蘭に振り向かないだろうし、ISなんつー兵器を扱うことで危険にさらしたくないからだろうし。おにいちゃんって大変だよな？

「まあまあ、いいじゃない別に。一夏くん、蘭のことお願いね」

「え？あ、はい」

五反田蓮さん。

あいつも変わらずニコニコである。

「はいじゃねえよ！？ああもう、親父はいねえし！いいのが、じーちゃん！」

「何だお前、蘭が自分で決めたことに文句あるのか？」

「……ないです」

ああ、弱いなあ……。

というか俺のシリアスどこ行った！

「そして一夏？とりあえず千冬さんに勝てると思ってんのか？」

「……ごめんなさい」

よろしい。

「まあ、ごちゃごちゃ言ったが、結局来たいなら来れば良いさ。誰も拒みはしないだろ」

ただし、覚悟をもってな、と心の中で付け加えて。

「んじゃ、ゲーセンとかでも行くか。弾、エアホッケーで勝負しね？」

「あゝ、ん、そうだな。十連敗の汚名を挽回してやるぜ！」

「汚名を挽回してどうすんだよ・・・」

ダメダメじゃねえか。

この後、エアホッケーで弾が連敗記録を更新したのは、当然の帰結といえた。

第十一話 休日は・・・なんだ？（後書き）

あとがき

おはようこんにちはこんばんは。

ところでこの小説でも出てくるA C f a、難易度は人によっては結構高いゲームではありますが、非常におもしろいと私は思っています。やったことがない人はやってみては？

A C Vの発売も決定されていますし。

嘘予告(前書き)

やっちゃったぜ。

何がどうしてこうなったのか？

俺もわからない。

嘘予告

国家解体戦争。

後にそう呼ばれる事となる、一ヶ月に渡る世界と国家を巻き込んだ戦争は、国家同士で起きたのではなく、国と企業の戦争だった。

最初の異変は、親友が失踪したことから始まった。

「流が部屋にいなかったんだ。みんなは何か知らないか？」

皆が一様に姿を見ていないと答える。

このときは何故、いなくなったのか。

その程度にしか考えてはいなかった。

それが世界を巻き込んだものへと発展していくことなど、思いもしなかった。

怪しいと思ったのは、たった一人の家族の親友がいなくなってからだった。

「企業が動いている？」

「はい、間違いありません。大規模な物資および資材の調達、他企業や国家に情報が洩れないように徹底的にしかれた防衛網。企業連は何かをしようとしています」

気をつけてはいた。

だが、所詮は企業の集まりに過ぎないと侮っていたのかもしれない。それを気に留めることしかなかった我々は、文字通り、戦争に身を投じることとなったのだから。

何故、姉と連絡が取れないのか。

「流がいなくなった事と、姉さんと連絡が取れなくなった事は何か関係があるのか・・・？」

そのとき私は、家族と連絡が取れない程度にしか思っていなかったのだ。

その家族に何が起きていたのかも知らずに、何故、と考えること。私がしていたのはそれだけだった。

In The Myth

神話において

God I S F o r c e

神とは力である

「企業連が全国家に対して宣戦布告だと!？」

「は、はい!今も映像が・・・!」

始まるのは企業による、”国家の解体”。

その宣言は企業連が所有するISと、そのIS搭乗者によって国家が攻撃されることによって冗談なのでは無いということがわかったことであつた。

「戦況はこちらの思惑通りか、ならば、国家がとる行動はおのずと限られてくるだろう」

企業連の思惑が世界を巻き込む。

そうしてできたのは、国家によるISを戦力の中心とした、国家連合軍の発足だつた。

「ここIS学園は、国家連合軍、通称国連軍の本拠地、作戦司令部となることが決定した。・・・専用機持ちは言わずもがな、この戦争に参加することとなる」

そのときの世界最強と呼ばれたIS操縦者の顔はさまざまな感情が入り混じつた顔だつた。

「あたしたち、どうなるのかしらね。企業連のIS操縦者たちは国家代表とすら互角以上に戦える人たちばかりだし」

「でも、やるしかないよね？」

少年と少女たちは、一人の仲間を欠きながらも平穩を取り戻すために戦いへと身を投じていく。

「国連軍のISによって企業連のIS操縦者の数人を撃破、数で勝る国連軍が勝るのは当然だが・・・」

企業連がこのままでいるとは思えない、何故なら、想像が正しいのであれば、彼らに技術を提供したのは、自分の親友たる大天才の弟なのだから。

「世界各地で超大型の兵器を確認・・・！これは・・・、企業連はこんなものを・・・！」

そして彼らの前に現れる、企業連が作り出した兵器。

代替可能の多数の凡人によって制御され、安定した戦力を提供することを目的とした、超巨大兵器、AIMスフオートAF。

「こんなの・・・、大きすぎますわ・・・！」

「どんだけでかいんだ!？」

「計測結果が正しければ全高600m、全長2400m、主砲の連装キヤノンの射程は200km。100km圏内は絶対防領域だそう。文字通りの化け物だな。すでに数機のISが落とされたと聞く」

企業が誇る巨大兵器の前に、最強の兵器となったISですら落とされていく。
単一で最強だった兵器は、複数の凡人によって制御された兵器に敗れていく。

「お前たちにミッションが下った。単独行動をしている企業連のISを撃破しよとのことだ」

自分の手元にISがあれば、そんな考えが頭を支配する。

AFの登場によって再び劣勢へと立たされた国連軍は、決断を下す。全国家のISによる総攻撃。

IS学園へと下されたミッションは企業連のIS撃破。

全てにおいて未熟な生徒たちを戦場へと駆り立てる自分にひどく腹を立てる、それしかできなかった。

「企業連の単独行動中のIS、オルレア、プリミティブライト、プロメシユース、クリティーク、ラムダ、アートマンだ。一人に対し複数のISで攻撃を仕掛ければ、警戒され、同じ手は通用しなくなる。よってこいつらの相手はお前たちが一人で倒すとなる」

「あのブリュンヒルデの弟か、できると聞いている。行くぞ！」

「俺にも守らなきゃいけないものがある！その全てを守り抜いてみせる！」

白騎士は黒騎士の異名を持つ戦闘狂との命を賭けた戦いへと。

「IS学園のISね、お願い、退いて」

「私にも譲れないものがある。退けと言われて退くわけにはいかない！」

紅を冠する椿は心優しき聖女との信念を賭けた戦いへと。

「へえ、調子に乗って殺されてきたのね。いい的よ、あなた」

「わたくしとブルー・ティアーズをなめてもらっては困りますわ！」

蒼い雫は女帝の異名を持つ狙撃者との自らの技術の全てを賭けた戦いへと。

「IS学園の操縦者か。無様な動きだな、何故出てきた」

「あたしだって、戦わなくちゃならない理由がある！」

龍は元傭兵との力を賭けた戦いへと。

「貴様がデュノア社のIS操縦者か、第二世代風情が、いい気なものだ」

「時代遅れかどうかは、勝ってからにしてほしいんだけどね！」

疾風は傲慢なる騎士との誇りを賭けた戦いへと。

「ドイツの遺伝子強化試験体が、面白い素材と聞いている。期待する」

「ふん、魔術師め。誰が相手だろうと教官と嫁のためにも、生き抜いてみせる！」

黒い雨は魔術師の異名を持つ数学者との己が存在を賭けた戦いへと、多数のISを撃破し、AFを破壊した国連軍に待ち受けていたのは、企業連の最精鋭IS部隊によるIS学園の強襲だった。互いの軍の全ての戦力をもって激突する。だが、

「何で・・・、何でお前がそこにいるんだ！答える流れえ！」

その中にいたのは黒いISに搭乗した親友の姿だった。

「何を言われても俺は戦いをやめない。一夏、言葉で飾る意味がない、今この瞬間は力だけが全てだ！」

「どうしても止めないって言うなら、俺がお前を止めてみせる！」

白と黒は相対する、今まで互いに背負う全てを賭けて。

彼らの戦いの果てに何があるのか、企業連の武装蜂起の真相、全ての鍵を握る者はその親友へとすべてを託す。

彼が味わったのは、絶望そのものだった。

それでもなお、最後の戦いへと彼らは進んでいく。

「これが最後の戦いだ。皆、行くぞ！」

その結末は、どこにあるのか、誰も知らない。

嘘予告（後書き）

うーん、書きたいことは書けているけど書けていない、矛盾してる
ようで矛盾してないんですよね。

第十二話 転校生は・・・十人十色（前書き）

シャルとラウラ来た！これで勝つる！

そつえばISの小説読んで思ったんですけど・・・シャルの瞳がエメラルドって描写があつたけど、エメラルドって紫あるの？基本緑じゃなかつたっけ？

紫ならアメジストあたりだと思ふのだが。

本当は戦闘シーンまで書くつもりだったんだけど区切りいいからここで。

ところでヒロイン候補がほぼ出尽くしましたが・・・、誰がいいです？

いや、もう決まってはいるんですが。

第十二話 転校生は・・・十人十色

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

篝の付き合ってもらおう宣言から少しの日にちがたったIS学園食堂。女子たちはある話題でとても盛り上がった。

とても盛り上がった。

大事（ry）。

「実はね」

「あー、夕食・・・。くそう、このまま腹が減った状態だとノケだって・・・いやなんでもない」

「最後ナ二言いかけたんだ？流」

「そりゃあノン」

「いや、いい、やっぱり言わなくていい」

人に聞いておいて言わなくていいとはこれ如何に。まさかの放置プレイが好みなのだろうか？

まあ、それはともかく、俺と一夏は一緒に夕食を食べにきていた。いつもの事ながら、思春期真っ盛りの女子で埋め尽くされている食堂は、とてもうるさい。

「ん？なんだあそのテーブル。えらい人ばかりだな？」

「あ？何やってんだろうな」

そう思いつつ、少し耳を”澄ます”。

その内容が聞こえたとき、ああ、箒、ドンマイとしか思えず、一夏に殺意が沸くのも当然といえた。

「な、なんだよ流。何か禍々しいぞ」

「いや別に・・・」

そんな中歓声が上がる。

もう向こうに集中していなかった俺はまったく気づかなかった。

どうせ一夏と付き合えるとかそんなんだしな。

俺も含まれていたことなど全く、これっぽっちも気付かなかった。

「とりあえず食おうぜ。もう腹へって腹へって・・・」

「はいはいっつと」

俺の今回のメニューは牛丼、カツ丼、きつねうどん、カルボナーラ、ピザである。

もちろん全部大盛り。

一夏は日本人らしい食事だった。

そして味噌汁を見つめている一夏に対して思ったことを口にした。

「爺くさいこと考えてるだろ」

うどんを啜りながら一夏に言葉の刃を向ける。

「失礼な」

「どうせカツオ節が最高にいい味出しててうまいとか煮物がどうとか考えてんだろ？」

「う、うるさいな・・・」

ピザを口に運びながらお前顔見てたら考えてることわかりやすいよね、と指摘する。

「ん、飲み物ほしいな。お茶入れてくるわ。番茶でOK？」

「ん、ああ、悪いな」

まだ残っている食事があるが、お茶をとりに席を立つ。

一夏に女子が突撃していったが気にしない。

噂がどうのと聞こうとしていた女子がいたが、気にしない。

俺の名前が含まれている気がしたが、気のせいだと思うことにする。

・・・気のせいだよな？

その後、飯を全て平らげて、寮に戻った。

ヒソヒソと話す女子たちを尻目に。

デュノア社の社長の血縁なら、情報を隠すことぐらいは、一応可能だろうしな。

「お、男・・・？」

そんな静まり返った教室で、一夏がつぶやく。

皆デュノアを・・・いや、もう一人の転校生。

俺と一夏に対して非常に冷たい視線を送っていた。

十人十色な転校生を見ていると、デュノアが口を開いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々がいると聞いて転入を

人懐っこそうな顔。

中性的な顔立ち。

体も結構華奢で、男と言われても女といわれても納得できる。

「きゃ・・・」

「はい？」

「きゃあああああーっ！」

教室に爆音が響いた。

それを出したのが人間だというのだから驚きだ。

「男子！三人目の男子！」

男に飢えてますね？

「しかもうちのクラス！」

別のクラスだったとしてもそのクラスに突撃してたる？

「美形！守ってあげたくなる系の！」

守るとか言っておいて襲うんだろ？

「地球に生まれたよかった~~~~！」
スケールでかいな、ってかIS学園入れてよかったじゃないか？普通。

あ、千冬さんが目頭を押さえてる。

お疲れ様です、いや割と本気で。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうだ。

そうなんじゃなくて面倒なんだろうなあ……。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからあ〜！」

先生の言葉により、クラス全体がもう一人の転校生へと、視線を向けたのがわかった。

人のことを言えた容姿ではないが、傍から見てもそいつは『異端』だった。

腰まで届く輝くような銀髪に、左目に眼帯をしている。

身長は短いが放つ雰囲気は冷たい。

「……………」

注目されている当の本人は、口を開かず教室たちの女子を見下した目で見ながら、すぐに千冬さんへと視線を向けた。

「……挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

ポカンとする。

クラス一同が。

対する俺は納得する。

ああ、千冬さんがドイツにいた頃の奴だ、とあたりをつける。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

再びクラスが沈黙する。

ラウラと名乗った転校生も沈黙する。

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

山田先生すごい涙目ですね。

正直同情します。

ある種のデジャヴウを感じるが、可愛そうなので何も言わない。

そして、そんなことを考えているとき、俺とボーデヴィツヒの目が合った。

殺気すら含まれているように錯覚する冷たい視線が俺を見つめる。

「・・・貴様が織斑一夏か？」

あらいやだ、人違いです。

が、気に食わないな、ああ気に食わない。

「人に物を聞くときはそれ相応の態度があるんじゃないかねえの？」

空気の温度が一気に下がったように感じる。

いつの間にかクラスも静まり返っている。

「お、おい。流、後、ラウラだっけ？やめとけよ。俺が織斑一夏だ」
その空気に耐えられなかったのか一夏が俺を止める。

「！ 貴様が」

目標を見つけた、と言わんばかりに一夏を睨み付ける。
その後の行動を理解した俺は行動を起こす。

パシッ！

「・・・え？」

何がおきたのか理解が追いついてない一夏が呆然としている。
俺の腕は一夏の目の前に、ボーデヴィツヒの手も一夏の目の前に、
つまりは一夏に手を上げようとしたのを阻止しただけ。

「貴様・・・、邪魔をする気が」

「おうよ、親友が意味もなく攻撃されてるんだ、止めるのが普通だ
る？」

意味や理由があつたとしても正直くだらねー理由だろうが。

「ならば、貴様も私の敵だ」

上等だ。

売られたケンカは買ってやるよ。

そして一夏を向いて一言。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

それを聞いた一夏も、言い放った。

「認められなかったっていいさ。俺は、正真正銘、千冬姉の弟なんだ。認めないって言うなら、認めさせるだけだ」

「ふん・・・」

来たとき同様すたすたと空いている席に歩き、座る。腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。

「あー、ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二ラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。以上、解散！」

「おい織斑、篠ノ之兄、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

ふむ、やっぱりそうなるか。

まずは自己紹介・・・と行きたいところだが急ぐか。

「おい、一夏、デュノア、自己紹介と行きたいところだが急ぐぞ。女子も着替え始めるし、また女子に囲まれたら敵わん」

女子の情報網はとても、とてもおそろしいもので、男子が来た、という情報はすでに出回っているだろう。

「お、おう」

走りながら男子の着替えの説明でもするか。

「俺たち男子は空いてるアリーナの更衣室で着替えることになる。実習の度にこの移動だ、今のうちに慣れとけ。んで名前は篠ノ之流だ。姉はあの大天才だが、あんまり気にしないでくれ」

「俺は織斑一夏だ、よろしくな。えーつと・・・」

と、そんな無駄話しているのが仇となったのか。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君も篠ノ之君もいるわ！」

目の前どころか後ろからも女子が来た。

つまりは、囲まれた。

HRが終わったので、各学年各クラスの尖兵が情報収集のために駆け出してきたのだ。

この包囲網を突破しない限り、俺たちは遅刻決定だ・・・！

「二人の黒髪と白髪もいいけど、金髪もアリね！」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！見て見て！織斑君と転校生、手繋いでる！」

「・・・一夏、お前そっちの趣味だったのか・・・？」

「ちげえよ！」

俺もしかして背後狙われてる？一夏に。

後デユノアも。

何で顔赤らめてんだよ。

なんかすごい女っばいよな、こいつ。

「っと、時間もそろそろやばいな、マジで急ぐぞ」

着替える時間を入れると急がないと。

その後、なんとか女子による転校生包囲網を突破し、更衣室にたどり着いた。

「ふう、何とか間に合ったな。走らなかつたりあの包囲網を突破できなかつたらと思うとゾツとするぜ」

いやほんとに。

グラウンド十週とかになったら俺死ぬる。

「んじゃ、改めて自己紹介と行きますか。さっきも言ったが、篠ノ之流だ、流でいい。よろしく。」

「織斑一夏だ、一夏でいいぜ。改めてよろしくな」

「うん、よろしくね、流、一夏。僕のことはシャルルでいいよ」

「よし、さっさと着替えちまおうぜ」

そう言うや否や、一夏が上着を脱ぎ捨てる。

「わあ!?!」

何ぞ？

一夏の着替え見てたらいきなり声を上げたりして。

「どうしたんだ？シャルル。時間に余裕あるって言っても早く着替えないと遅れるぞ？うちの担任はそれはもう時間につるさい人で

「う、うんっ！き、着替えるけど、その、あっち向いててね？流もだよ！？」

ん、着替え見られるのが恥ずかしい、とかそんなところか。男子でも別段珍しくもないしな。

「おーけ、了解したからあっち向いとけよ」

ホント、いろんな意味で女みたい・・・女？

いや待て、何でそんな部分に違和感が・・・？

まあ、気のせいかな。

時間も少し危なくなってきたし着替えるか。

ちなみにシャルルの着替える速度は半端じゃなく早かった。

アレとかコレとか引つかからないのかな？

結局、グラウンドに無事についたのはいいが、時間ぎりぎりになってしまった。

「時間ぎりぎりか。遅刻はしなかったからいいが、もう少し早く行動しろ。わかっただらさっさと並べ」

周りを見ると、ESスーツに身を包んだ女子たちが並んでいた。

oh、男には目の毒だぜ。
弾いたら狂喜するだろうな。

「随分ゆっくりでしたわね」

列に並んだとき、一夏の隣にいたのはセシリアだった。

「ああ、ちょっと自己紹介やってたのと一夏のくだらないギャグに付き合ってたからな」

一夏からくだらないとは何だと抗議が来るが無視する。
お前のギャグは正直微妙なんてレベルじゃないんだが……？

「なるほど、一夏さんが原因でしたか」

「何で俺のせいなんだ……」

「何？またあんた達バカやったの？」

「何で問題児みたいな扱いなんだよ」

「問題児じゃないつもりなの？」

「ん？何だ今の声、どっから聞こえたんだ？」

わざと、何処から聞こえてきたのかわからないような素振りを見せる。

「後ろにいるわよ！バカ！」

へいへい、背が小さいからわからなかったぜ。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生に叩かれそうになりましたの」

「はあ？一夏、アンタなんでそうバカなの？」

一夏に原因が無いわけじゃないが理不尽なことで叩かれかけたのにこの理不尽な言い様。
少し同情してやるぜ。

ああ、鈴、それと、そんな大声出していると・・・。

「安心しろ。馬鹿は私の目の前にも二人ほどいる」

ギギギギッ、っとセシリアと鈴が声が聞こえたほうを見ると、エクスカリバー出席簿を構えた千冬さんがいた。

ゴスッ！

その縦に構えられた出席簿はセシリアと鈴の頭に直撃した。
角が当たっていたので非常に痛そうだった。

「では、本日より格闘および射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

いい返事だね。

いつもの倍以上にやる気に満ち溢れている気がする。

「くっつ……。何かというとすぐに人の頭をぼんぼんと……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

ああ、まだ痛いのか。

まあ、あんな物を縦に振られたらそりゃあ痛い。
というか鈴？

今のお前とても怖いんだけど……？

目に光がない……！

……中に、誰もいませんよ？とか言いそうなフィンキ（何故か変換ry）だよ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。元気が有り余ってる奴やエネルギーを思考に使ってる馬鹿もいることだ。 鳳！オルコット！篠ノ之兄！」

「ちょ、何故！？俺別にうるさくなかったよな！？しかも思考してるだけで駄目って鬼ですか！？」

「な、なぜわたくしまで!？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

セシリアと鈴はともかく、俺は完全にとぼっちりですよね？

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんであたしが……」

「お、おまたせしましたあゝ」

「・・・え？」

「あの・・・織斑先生？」

「・・・山田先生だ」

目を瞑ってそうだと信じたくなかった事実を言い放つ。

鈴とセシリア、すげえ驚いてるな。

俺は元代表候補生なの知ってるからそこまで驚きはしないが・・・。
でも戸惑うよね？

だって山田先生だよ。

「・・・さて、それでは始めるぞ」

「え？あの、三対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

「・・・ふむ、むしろこちらが惨敗する可能性高いな。

まずは様子見ていくか。

そして自分たちの実力が下に見られていると思ったのか、セシリア
と鈴の目に闘志が灯る。

「では、始め！」

やねるだけやねる・・・！

第十二話 転校生は・・・十人十色（後書き）

ところで会社の一次選考に受かって次最終選考なんだ、どう思う？
（社長面接）

第十三話 三人目は・・・友人（前書き）

アーマード・コア5の情報が胸熱だった。

予約するのとか当たり前ですよね？

これを機に今までやったことのない人も買ってみてはどうでしょう
か？

発売は十月ぐらいらしいです。

第十三話 三人目は・・・友人

千冬さんの掛け声とともに動き出す。

恐らく鈴とセシリアの性格上、ISの操縦技術に絶対の自信を持っている（ほとんどの専用機持ちはそうだが）ので、自分が倒そうとするだろう。

そしてその考えの通りに鈴は『双天牙月』をもって突撃し、セシリアは『スターライト』を構えてビットを展開していた。

そこまでなら近距離と遠距離、住み分けられているように感じるのだが、連携などまるで取れていないのが問題だった。

俺は左手にBFF社製スナイパーライフル『050ANSR』を展開する。

山田先生が別人みたいにあサルトライフル撃ちまくってる。

ごめん、ちよつと見直した。

そしてそれを見てやはり油断ならない敵だと再確認し、鈴とセシリアに指示を出そうとする・・・のだが。

『ちよこまかちよこまか！当たり前なさいよ！』

『つく！鈴さん！射線に入らないでくださいませし！』

プライベート・チャネル
個人間秘匿通信で喧嘩していた。

お前らそれでも代表候補生？と疑問を持つほどである。
しゃあない、援護しますか。

そう考えて山田先生の動きを注視する。

スナイパーライフルでFCSによるロックをする。

「つつ！」

瞬時にこちらに意識を割き、回避行動を取ろうとする。
が、気を散らしたのがいけなかったのか、鈴とセシリアが攻撃する隙を作った。

（流石、としか言いようがないか。あの二人と戦いながら常に俺を警戒、ロックされた瞬間反応か・・・）

元代表候補生というだけのことはある。

実際撃とうとしたのだが、撃てなかったし、撃つても回避されていただろう。

そして鈴とセシリアの攻撃も、直撃はしていないあたり、技量の高さが伺える。

さて、どうなることやら・・・。

「全く、篠ノ之兄はともかくあの二人だけでは話にならん」

すごかった。

何がすごいかって山田先生の動きが。

いつもの先生からは想像できないような機動を描いている。
が、

「・・・けど千ふ・・・、織斑先生、鈴とセシリアの攻撃結構当たってませんか？」

「・・・ふむ、ま、篠ノ之兄が原因だろうな」

？流が？

何もしてないのに？

「篠ノ之、聞こえるか？その威嚇をやめろ、まずはあの二人だけで戦わせろ」

『え？あー、りょうかい』

「・・・？流、いったい何してたんだ？シャルルはわかるか？」

「うん？ああ、多分だけど、流はね、山田先生が攻撃しようとした瞬間や二人が攻撃しようとしたときにスナイパーライフルで攻撃しようとしてたんだと思うよ？だからそれに反応しちゃって動きが鈍ったんだと思う」

すごいな、シャルル。

よくそんなことわかるよな。

よく見ると流が左手の武器をいつも使っているアサルトライフルに変えてるのがわかる。

「その通りだ。ついでにデュノア、山田先生が使っているISについて解説しろ」

「あ、はい。あのIS、『ラファール・リヴァイヴ』は第二世代型IS最後発の機体です。そのスペックは初期の第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付装備が特徴の機体です」

「ああ、そこまでいい。そろそろあの二人が落ちる」

そう言われて戦闘が行われているであろう上を見た。

山田先生が俺の威嚇がなくなったのを確認し、二人を全力で落とすにかかった。

巧みに鈴とセシリアの動きを誘導し、セシリアと鈴がぶつかる。

そこでアルドラ製のグレネード『GRA-TRAVERS』を発射する。

面白いぐらいに二人に当たり、爆炎を撒き散らす。

そしてその瞬間行動を開始する。

急加速による降下の最中に、煙の中から地面に向かっていく二人が見えた。

左手にアサルトライフル『MARVE』を、右手にはオーメル社の試作兵器、レーザーバズーカ『ER-0705』を展開する。
レーザーバズーカのトリガーを引く。

「はあ！」

が、発射されたオレンジのレーザーは普通に回避された。

弾速は遅いわけじゃないんだがな……。

お返しとばかりにアサルトライフルを撃ちまくってくる。

そのほとんどがPAに阻まれるが、エネルギーが削れるのはやはり得策じゃあない。

同じくアサルトライフルを撃って牽制する。

しかし嫌に射撃が正確だな、今度教えてもらうか。

割と本気でそう思える射撃精度だった。

そんな中山田先生が急上昇する。

「やあぁ！」

あれは、グレネードか！
まずい、回避できない！

黒鉄の最高速度はかなり速く、白式に多少劣る程度だが、瞬間速度、加速性は非常に悪い。

つまり、緊急回避が苦手なのだ。

PAにグレネードがあたり、爆発する。

ダメージ自体はPAに阻まれて少ないものの、衝撃などで動きが止まる。

それを見た山田先生はここで決めると言わんばかりに畳み掛ける。
マシンガンとアサルトライフルを撃つてくる。

背部右武装のグレネードキャノン『OGOTO』のバレルを展開する。

俺の狙いに気づかず接近してくる山田先生。

(・・・今だ！)

ある程度距離が縮まったところで俺も山田先生に向かって加速する。

「つつ！？」

そしてグレネードキャノンを発射した。

突然の行動で動きが止まった山田先生にグレネードが直撃し、爆炎が上がる。

「くうっ！」

そして煙から出てきた瞬間、レーザーバズーカと背部左兵装のハイ

レーザーキャノン『SIRIUS』を発射。
高いシールド貫通能力を持つその二つは山田先生にあたり、絶対防
御を発動させた。

「そこまで！」

そこで千冬さんから戦闘停止の合図だった。
展開していた武器を全て格納する。

「あゝ、ありえねえ。何だあの射撃精度。ギリギリだったぜ」

二人が多少エネルギーとか削ってくれてなかったらどうなってたかわからんぜよ。

「さて、篠ノ之には負けてはいるが、今ので山田先生の實力がどれほど高いのかは理解したはずだ。以後敬意をもって接するように」

いやあゝ、俺は結構敬意もって接している、つもりです。

「くっ、うっ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……。それに途中から攻撃まったく当たってなかったじゃない！」

ああ、俺がロックするのやめたときか。
いやあ、撃つ隙がなかったぜ。

「り、鈴さんこそ！無駄にはかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「それを言っならアンタのビットだってそうよ！何回か当たったのよ！？」

おーおー、正直見苦しいぜ。

「なんか、二人ともどっちもどっちって感じがするよな・・・」

「あはは・・・」

「両方ともただの馬鹿なんだろ・・・」

連携何それおいしいの？

と言わんばかりの行動だったので、負けるのは当たり前とも言える。そして千冬さんが手を叩く。

「それでは各専用機持ちのグループに分かれて訓練を行う。織斑、篠ノ之兄、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィツヒは前に出る。リーダーは専用機持ちがやれ」

千冬さんが言うや否や俺、一夏、シャルルの所に女子が集まる。

何これ・・・（分かれるつもりが無い的な意味で）ふざけてるの・・・。

それを見かねた千冬さんは額に手を当てる。

自分の浅慮さを嘆いているのか、面倒くさそうに声を上げる。

「この馬鹿者どもが・・・。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言ったとおりだ！」

それを聞いた瞬間ゾンビのように群がっていた女子たちがそれぞれの専用機持ちのところに並んだ。

「・・・やったあ。織斑君と同じ班かあ。名字のおかげねっ・・・」
「・・・篠ノ之君と同じ班だあ。一組でよかつたっ・・・」

「・・・セシリアか。そんな、何かの間違いよ・・・」

「・・・鳳さん、よろしくね。後で二人の中学生時代のこととか聞かせてよ・・・」

「・・・デュノア君！この学校のことではわからないことがあったら聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！・・・」

「・・・（何これ、ふざけてるの？沈黙的な意味で）」

元気だな・・・。

ちなみに誰もしゃべっていないのは言わずもがな、ボーデヴィツヒの班である。

いろんな意味で不安な実習だったが、実習は行わなければならない。俺の班は『リヴァイヴ』を使うことになった。

「あー、んじゃ、やるか。出席番号順にIS装着と起動な。とりあえず歩くことから。最初誰？」

「はい。出席番号二番、青山美里だよ、よろしくね」

「あー、よろしく。んじゃ、ちゃっちやと装着してくれ。居残りはごめんだ」

「うん！」

向こうでは一夏とシャルルの班の女子がスパパパン！と出席簿の餌食になっていた。

そして一夏のグループではISをしゃがませてから降りるのを忘れていたせいで、お姫様抱っこをしてISに乗せることになっていた。

ん？いやまでよ？

チラッ

「・・・てへっ？」

こ、こいつ、侮れない・・・！

女子たちも目をキラキラさせている。

結局全員お姫様抱っこすることになり、非常に疲れた実習だった。

実習が終わった後、一夏はISを運んだりしていた。

もちろん俺も運んだので、カロリーおよびエネルギーの消費がパネエっす。

「まさかあんなに重いとは・・・」

「まったくだよ・・・。飯の前にこんなにエネルギー消費することになるとは・・・」

「二人ともお疲れ様」

訓練機は専用カートで運ぶのだが、動力は俺たち人であるため、非常に疲れる。

何が言いたいかというと俺は、今、空腹です。

ちなみにシャルルは「デュノア君にそんなことさせられない！」といい、体育会系の女子が運んでいった。

「まあ、いいや。流、シャルル。着替えに行こうぜ。俺たちまたアリーナの更衣室まで行かなきゃいけないし」

「そうだな。すげえ腹減ったから早く飯食いたい」

「え、ええっと・・・、僕はちょっと機体の微調整をしてから行くから、先に行つて着替えててよ。時間かかるかもだし」

「お？なんなら手伝つか？整備は得意だぞ？」

「い、いやいいよ。微調整程度だし、待つてる必要もないよ！」

「お、おう。わかった」

「夏も俺も妙な気迫に押される。」

「夏なんて頷いていた。」

「んじゃ、行くか。夏」

「そうするか。でもあいつ、ちょっと付き合い悪くないか？」

「同じ男同士だから仲良くしたいのにさ、と言う。」

「まあ、何かあるんじゃないか？何かが何なのかはわからんが、別に気にする必要もないだろ」

「それもそうか」

「そうして俺たちは更衣室に歩いていく。」

正直なところ、シャルルには疑いの目を向けざるを得ないのだが、まあ、あいつは悪いやつじゃないというのは、今日一日で大体理解できた。

あいつは、友人だ、それだけで十分である。ま、常識が壊滅的な俺が言うのもアレだが。

第十三話 三人目は・・・友人（後書き）

あとがき

最近、フロム脳が活性化されてA C f aのオリ主ものが思い浮かぶんだ・・・。

このままじゃコジマ汚染しちゃう・・・！

第十四話 友人は・・・信じるもの（前書き）

一度消しました。

ここで書かないと後で書けないことを書くのを忘れていたのに気づき、急遽削除しました。

今回、少し不快に思われる部分もあるかもしれないので、ご注意ください。

ちなみに、ヒロインの話とか持ち出したこともあったから気になっていた方もいると思います。

作者はシャルが好きでたまらないので、メインヒロインももちろんシャル一択です。

第十四話 友人は・・・信じるもの

「・・・どういうことだ」

いや、俺に言われましても。

悪いのは一夏です。

箒がそんな約束してたとは知らなかったもの。
今、俺たちは屋上にいる。

一夏に屋上で飯を食べないか？と誘われたので来たらこの通りである。

箒は二人つきりで食べたかったのだろうが、二人に加えて俺、シャル、セシリアに鈴までいる。

学食の飯とパンなどを大量に持ち込んで、俺は食っている。

「ね、ねえ。僕いてもよかったのかな？」

シャルルが控えめに聞いてくる。
んー。

「まあ、いいんじゃないか？今更だしな。それに、まだ学園の構造把握してないだろ？」

「それもそうなんだよね。うん、じゃあここで食べるよ」

お前もこの一夏ハーレム見てるといいよ。

見るとぐぬぬ・・・と言った感じで拳を握り締めている箒。
大方一夏のために弁当でも作ってきたんだろうなあ・・・。

「はい、一夏。アンタの分」

タツパを一夏に向かって投げつける鈴。
なんて行儀の悪い。

「おお、酢豚だ！」

「そ、今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ？」

一夏のためだけに作るとか律儀だな。

しかも自分の飯は学食のか。

が、俺の分無いの？

俺はただの幼馴染その2ですか、そうですか。

「コホンコホン。一夏さん？わたくしも今朝たまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたのよろしければお一つどうぞ」

そういつてバスケットを開き、サンドイッチを一夏に進める。

のだが、何だ？この違和感。

あのサンドイッチから感じる強烈な違和感は。

だって鈴も、うわぁって顔してるんだもの。

「ねえ、流」

と、シャルルが小声で話しかけてきた。

「ん？どうした？」

俺も小声で答える。

「あの三人つてもしかして、一夏のこと・・・」

ああ、なるほど。

流石に気づくよな。

「ああ、多分思ってることで正解だ。全員が全員、あいつに惚れた奴」

あの致命的に鈍感な部分除けばすげえいい男だからな、顔とか性格含めて。

「ま、遠慮することないだろ。さっきも言ったが今更だ」

そう言っつて俺も食べ始める。

持ち込む、ということから必然パンなどが多い。

「うーん、そうするよ」

そういつてシャルルも食べ始める。

「けど、俺たちのクラスにまた転校生か。しかも二人でそのうち一人は俺たちと同じ男だし」

おう？転校生の話か。

あのボーデヴィツヒとかいう奴には少し驚いたけどな。

「まあ、男が増えたから精神的に少し楽になったよ」

「一夏のやつ、”転校生”という存在がいったいどういうことなのかをいまいち理解してないみようだ。」

「俺はまた俺が一夏を狙ってんのかと思ったけどな」

美人局とかハニートラップとか。

「俺とお前を？なんでだ？」

・・・一夏は馬鹿だなあ。

ここはIS学園だよ。

「お前は俺たちの立場を理解してないみたいだな。この際だから懇切丁寧に教えてやる」

クツクツクと笑う。

鈴が黒い、黒すぎるとか言ってるけど気にしない。
実際結構真面目な話なのだが。

「いいか？一夏。国にとって、国家や企業にとって、俺とお前、後シャルルは、人じゃないんだ」

「・・・は？」

何を言っているのか、理解が追いつかない一夏。

「極端な話、国にとって見ればIS操縦者、女はいわば非常に丁寧に扱わなければならない部品だ。ISという機械を動かすための歯車。が、俺たちは本来ISを動かすことの出来ない部品でありながらISを動かすことが出来る粗悪品、ゴミなんだよ」

イレギュラー。

その言葉が俺たちにはぴつたりだろう。

「だから国とか企業はこぞって俺たちの生体情報のデータとかISのデータを欲しがってるし、シャルルは別として、俺とお前はどの国にも企業にも所属していない微妙な立場。下手な干渉は出来ないが、たった一つのきっかけで自国へと引き込むことも出来る」

ちなみに俺も一応、どの企業にも国家にも所属していない。

俺のISの稼働データとかは逐一企業連に送っているが、あいつらが姉さんを相手にでもない限り情報を漏洩することなどほぼありえない。

特にトーラスの変態技術者どもは姉さんに匹敵するんじゃないかと思えるぐらいに頭がぶっ飛んでいる。

「引き込むって・・・どうやってだよ？」

「ふむ、鈴？」

「何よ？」

「お前さ、こっち来るときこんなこと言われなかった？出来るだけ俺と一夏に近づけとか出来ることなら付き合えみたいなこと」

あんなことやこんなことしろみたいな。

「う・・・、い、言われたわ」

「つまりはそういうことだ一夏。例えばの話、お前と鈴がまあ、恋人同士の関係になったとする。そしたらわが国の代表候補生に手を出したとか難癖つけられてあつという間にお前は中国の代表候補

生になるだろうよ」

何かの間違いで子供とかでも出来てみる。
もはや言い逃れも逃げることも出来ん。

「じゃ、じゃあ・・・、俺たちってそんな青春も過ごすことできないのか・・・？」

「ん、覚悟があるんなら別にいいんじゃないか。微妙な立場つつても俺もお前も姉が姉だ。何とかしようと思えば何とかできる。

一応、IS学園にいる間は名目上どの国も干渉できないしな」

その場合二人には多大な迷惑がかかることになるが。

おら、そのこの女子ども、別に自分の所属してる国に引き込めるんなら願ったりじゃないか、しょげるなよ。

「?どうしたんだ?皆」

沈んでいる筈たちを見て、沈ませた原因であるこの馬鹿はまたその鈍感さを発揮した。

いつせいに浴びせられる非難の視線。

「そ、そういえば、転校生といえば、シャルルの部屋はどうするんだ?」

とても居心地が悪そうな一夏だったが、一夏が筈たちからの非難から逃れるため話題を逸らした。

仮にも美がつく女どもに囲まれておきながら逃げるとか、もう死ぬよ。むしろモゲロ。

しかし、結構重要だな。

「ん〜、まだ学園のこと把握できてないだろうし、一人とかにさせるわけにはいかないだろうから、必然俺たちのどっちかが一緒になるな」

と、なるよ、

「ふむ、んじゃ俺が相部屋でいいか」

「いいのか？お前やることとかあるんじゃねえの？」

「それをお前が言うか？俺にISのこと習っておいて。それにお前のせいでまたベッドとか吹き飛ばされたりしたら適わん」

「うぐっ・・・」

あのとときの恨みを忘れたとは言わせない。

「んじゃ、シャルル？俺が一緒の部屋になるとおもっけど、いいか？」

「流が？うん、大丈夫だよ」

ニッコリ微笑むシャルル。

ふむ、問題なさそうだな。

んじゃこの話はここで終わり。
飯だ飯。

「そついえば、シャルルはなんてISを使ってるんだ？」

おお？一夏がまともな事を聞いた気がする。

「うん？ああ、僕のISは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』
っていうISだよ。デュノア社製の第二世代機なんだけど」

「デュノア社って、あの量産期のシェア第三位の会社だよな？あそ
この社長とかと血縁なのか？」

「・・・え、あ、うん。あそこの社長が父親なんだ」

うん？今一瞬言いよんだな。

しかしあそこ経営危機に陥ってるって聞いたけどな。
ま、どうでもいいや。

「けど、最近はずっと押され気味、って言えばいいのかな？第三
世代機の開発も遅れてるからね」

ん、こいつが来た理由って・・・。

ふむ、行動起こしてきたときに対処すればいいや。
今は放置。

というかこいつ、根は優しいタイプだろうし。

「そうなのか？」

「そうなんだよ。次のイグニッション・プランにも参加できるかど
うか、ってところだし」

「現在、欧州連合では第三次イグニッション・プランの次期主力機
の選定中なのですわ。今のところトリアルに参加しているのはイ
ギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペス

タ？型。今のところイギリスがリードしているのですが、難しい状況なのです。わたくしやあのラウラ・ボーデヴィツヒが転入してきたのもそれが関係していますわ」

「それに、最近は何国籍の垣根なしに技術提携を結んでる、通称『企業連』が第三世代機の開発が一番進んでいるのもあるんだ」

・・・あ、この話題、俺にとって鬼門じゃね？

「企業連？」

「夏が聞きなれない単語を疑問に思ったのか口に出す。」

「イグニッション・プランをはじめ、国家のプロジェクトに参加したりしない企業も多数提携している、独自にISを開発し続けている企業連合体ですわね。アメリカ最大の資本を持つGA社、カナダの振興エネルギー企業レイレナード社、イスラエルのオーメル社、アフリカ中東国家連合の国々に絶大なシェアを誇る量産期を生産しているアルゼブラ社、ドイツの財閥資本系企業のローゼンタール社、二つの企業が合併して出来たフランスのインテリオル・ユニオン、GAヨーロッパとスウェーデンのアクアビットが合併して出来たトラス、わたくしの故郷、イギリスのBFF社などが参加している、超一流企業が数多く在籍していますわ」

他にも優良な企業に位置づけられる子会社がいくつかあるということとを付け加えて。

「一番最初に第三世代機を開発したのも企業連らしいわね。量産化の目処も立ってるって噂だし」

「しかも企業のトップIS操縦者はその全員が国家代表なんだ。アメリカの国家代表のローディーさん、カナダ国家代表のベルリオズさん、イスラエル国家代表のオツツダルヴァさん、アフリカ中東国家連合代表のサーダナさん、ドイツ国家代表のレオハルトさん、フランスのウイン・Dさん、スウェーデンのネオニダスさん、イギリスのリリウム・ウォルコットさんが全員、企業連のIS操縦者なんだ」

「ま・・・マジか？」

どいつもこいつも見知った名前です。
正直俺今脂汗ダラダラなんですけど。

「政治力の強い企業も参加してるから国も文句を言えないのですわ。アラスカ条約の締結前から技術提携しておりますし、そもそも条約締結を主導していたのは企業連ですから」

言外に国家代表すら所属しており、政治力も高いので企業に対してあまり強くも出れない。
加えて条約締結の主導を握っていたことから、条約の抜け穴を熟知、その気になれば条約内容すら変えることが出来るということ。
オームルとかインテリオルとかBFFだろうなあ・・・。
あいつらの腹黒さは半端じゃない。
何かとIS技術の公表を遅らせている。
それでいて採算とか取れているあたりすごいなあ。

「各国も技術を知ろうとエージェントとかを送るんだけど、その全
てが失敗に終わってるしね」

「す、すごいんだな・・・。あれ？」

どれくらいすごいのか今いちわかってないだろう、一夏。が、正直何も言う気になれない。というか厄介なことに気づかれた気がする。

「そういえば、流のISって、その、企業連つてのが作ったんじゃないかってっけ？」

「……え？」「」「」

一夏この野郎、何でお前はそんな無駄なところで記憶力がいいんだ。千冬さんが疑問系で言ってた程度なんだぞ。

バツ！つと篤、セシリア、鈴、シャルルの視線が俺を貫く。

おおう、四人とも目、見開いてびっくりしてる。

「あ？あー。うん、まあ、そうだが？」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。いくら篠ノ之博士の弟って言ってもなんで日本以外の企業があんたにIS作ってんのよ？」

いやまあ、確かに一応日本人の俺に日本の企業が作ってないってのはおかしいんだけどさ。

「あー、ああー。言わなきゃ駄目？」

俺以外の全員がいかにも気になるから教えて！みたいな顔してる。付け加えると黙秘は許さないみたいだ。

「流。今まで聞きづらかったのだが、何故お前がISの技術をそこまで詳しく知っているのだ？その……、ISのことを知っている

のも、あんなに病弱だったお前がたった一年で普通の生活を送れるようになったのは何故なんだ？」

姉さんに何をされたのだ？と、つまりはそう言いたいのだろう。うん。

いずれ言わなきゃいけないことではあつたし、大丈夫だろ。

「ん、んじゃちょっと俺のくらいい過去話から始まるんだが。いいか？」

皆が一様に頷くのを見て、俺は喋りだす。

「一夏たちは知ってるが、俺は生まれたときから病弱でな。アルビノだったりするのもそのせいなんだよ」

髪を弄りながら言う。

まともに歩いたりするのもきつかったし、日光に当たれば火傷するレベルだった。

「ま、死に掛けたりするのもしょっちゅうあつたな。医者も匙を投げてたし。発作とか起こすたびに姉さんが症状を沈静させてたらしいしな」

らしいというのは当時の発作とか起こしてるときの記憶なんて覚えてちやいないからである。

生まれたときなんて大変だったらしい。

姉さんが俺をひつたくってナニかしたらしいし。

「筈は知らないだろうが、両親なんて姉さんが俺にかまっていたっていうのもあって、真っ先に見捨てたよ。俺のところに来たことな

んで数えるほどしかない」

覚えている限りでは、だが。

篤が驚愕、といったような顔をしている。

今となつては、あの両親のことはどうでもいいと思つている。

今の俺からすれば、あの二人は血肉を分けてもらった他人である。

「ま、それが変わったのは世界じゃ姉さんが失踪した、って報道された前日か、そのときに、あー、ちよつとしたやり取りがあつてだな？俺を連れて失踪したわけだ」

そのやり取りについては割愛する。

喋つても意味がない。

「で、こつからがお前たちの知りたいことかな」

ここからが本題、ということだ。

「俺が健康な人間として過ごすために、俺の望んだ普通を手に入れるために行ったのは簡単なことだ、人体改造だよ」

人間を人として見ない非道徳的な行い。

それが俺が今、こうして太陽の下で生きていられる理由だった。

「人体改造・・・！？姉さんはなんでそんなことを・・・！」

それを今から説明するんだが。

「落ち着けよ、それをこれから説明するんだ。改造といつても、そんな脳みそ弄繰り回したとかしたわけじゃない。多種、多量のナノ

マシンの注入と体の各所に機械が埋め込まれてるだけだ。」

ちなみに一応脳にも埋め込まれている。

ナノマシンにより俺のDNA欠陥を補うために細胞が正常な成長をするよう調整し、細胞の活動を活性化させ、免疫能力を高める。

埋め込まれた機械はナノマシンの制御、製造、体の成長に合わせて大きさを変えるためにナノマシンが一定期間ごとに調整。

アルビノだったりするのは直らないが、少なくとも生活に支障をきたすことなど最早なかった。

「ま、副次的効果で身体能力、情報伝達速度、反応速度、再生速度の上昇、元々頭は良かったらしいのも含めて、記憶力及び演算速度も上昇した」

言うのがめんどくさいので言っていないが、やろうと思えば擬似ハイパーセンサーである、『ヴォータン・オージェ越界の瞳』も発動できる。

だが、それだけの機能、メリットがありながら、デメリット、副作用が無いなどありえない。

何事にもリスクは存在する。

最初のころなんて力加減がわからないのでコップを握りつぶすなどざらだった。

「もしかして、流さんがそんなに大量にお食べになるのはそれが関係していますの？」

勘がいいな、セシリア。

さすがは代表候補生ってところか。

「ん、そうなるな。言ってしまったえば、エネルギーというかカロリーというか、大量に消費するんだよ。ナノマシンとか機械が稼動する

ための電力生み出すために」

そう、つまり俺が運動などをすればそれだけでも大量のエネルギーが消費され、何もしていなくてもナノマシンは常に活動しているのでエネルギーは結局消費される。

ナノマシンなどの稼働率を上げて、ヴォーダン・オージエなどを発動すれば消費するスピードはなおさら上がる。

加えてISに乗るとさらにエネルギーが消費されるのだ。

ISには搭乗者の体の状態などを安定させる機能が備わっているのだが、俺の中のナノマシンなどと同期を取ること調整を行っているるので、エネルギーが消費されていくのだ。

ISのほうからエネルギーをまわすと、供給されるエネルギーがかすぎるのでISが調整を行うことになり、かつ若干とはいえ処理をそちらにもって行かれるのだ。

IS同士の戦闘において1%の処理速度の低下は、負けにつながるので、ISからエネルギーを供給することは最終手段。なので必要に応じて稼働率を上下させなくてはいけない。

「ま、俺の体に機械の埋め込み、ナノマシンの注入およびそれらの開発にかかったのが半年。調整にかかったのがさらに半年ってところか」

これが俺が一年間失踪していた理由である。

まあ、弊害として俺の常識は終わっていたが。

なので俺に常識というものを叩き込んだ織斑姉弟には感謝と尊敬の念が絶えない。

「そ、そうでしたの・・・」

うお、セシリアがすごい同情の視線を送ってくる。

「あー、そんな顔されると逆に悪い気がしてくるんだが……。俺は今こうして生きているし、姉さんには感謝してる。確かに普通の人間じゃなくなりはしたが、普通に生きているんだ。よしとするさ」

俺は今、ここで生きて存在している。

望んでいた人との会話も、繋がりも、全て、というわけではないが手に入った。

普通であるために普通であることをやめる、という矛盾。

しかし望んだものを手に入れることができた俺は十分、幸福な人間に分類されるだろう。

今現在の状況は、男の俺にとって異常だが。

「はあ、それで？アンタがISについて詳しくかったり企業連がアンタにIS作ったりしたとどう関係があんのよ」

鈴が沈んだ空気を軽くするためか、素っ気無く言う。

ふむ、なんだかんだでいい奴だよな、こいつ。

一夏と違って。

「ああ、それは単純。一年間、正直とても暇だった。ナノマシンとか注入してもデータとか見てるだけ。埋め込む機械の開発なんて、それこそ機械にやらせてたし」

結果、やることがない。

なんかする？なんでもいい ゲームは？ごめん無理 じゃあISだ

！おk把握。

ざっとこんな感じである。

「で、企業連に関しては、千冬さんの所に預けられた時にはISの

ことは勉強する必要ないぐらいになっていたわけだ。そのうちISの技術作ればいんじゃないかね?とか考えるようになってな。斜陽企業だったあいつらに開発依頼してみたわけ。設計図とか送りつけて」

結果、AICの開発、プライマルアーマー、アサルトアーマーの開発を開発することになった。

AICはイメージインターフェースなので、イメージ力が重要だが、逆に言えばイメージ力が強ければPICよりも早い動きができるんじゃないかね?と思つて設計。

開発したローゼンタール社はその技術を国に公表、それを元に国が独自に開発した『停止結界』を搭載したISが作られた。

PAは防御が硬けりや武器は優秀なの多いんだし単一仕様能力とかもあるんだから攻撃より防御強くしたほうがいいんじゃないかね?と思つて設計。

AAはトラスの変態技術者が勝手に作ったものだが、
というか俺まだAA使つてないな、そういえば。

技術提供してからは政治力に優れていたり資本だけは馬鹿みたいにあつたし、技術力もあつたので異常な速度で成長していった。

ちなみに俺の頼みごとは大体聞いてくれる。

ブルー・ティアーズの情報もBFF社から送らせた。

「で、黒鉄、ももとの名前はストレイドってんだが、俺が設計して開発依頼したんだが、開発延期になった。それを姉さんがナニカして俺に送りつけて来たつてわけだ。以上」

ナニをしたのかは未だに不明だが。

機能が追加されたと思われる場所がブラックボックスになっているので解析するにも時間がかかるのだ。

ああ、疲れた。

声を出すのにもカロリー消費するから疲れるんだよ。

「へえ、流ってやつぱりすごいんだな」

「一夏……、アンタ尊敬するわ……」

ああ、奇遇だな鈴、俺もだ……。

それをすごいんだな程度で済ますこいつを尊敬するよ……。

「ほれ、さつさと飯とか食っちゃおうぜ。一夏のために弁当とか用意したんだろ？」

この発言をしたとたん

「べ、別に一夏のために作ったわけじゃ……！」

「べ、別に一夏さんのために作ったわけでは……！」

「べ、別に一夏に食べてもらいたいわけでは……！」

見事なツンデレが見れた。

正直にアタクすればいいのに。

長々と話してしてしまったからか、結構時間がたってしまったので、結構急いで食った。

その後は、一夏が箒にアーンしたり、スーツ毎回脱いでんの？という話になったりした。

シャルルは少し様子がおかしかった気もするが、気のせいだと思っておく。

余談だが、セシリアの料理が原因なのか、一夏は腹を下した。

どんな調味料がどれだけ入っていたのか？解析したかったが怖いのでやめた。

「じゃあ、改めてよろしくな。シャルル」

「うん、よろしく。流」

昼には学校の案内などを。

夜になると夕食を食べた後、山田先生に言われた部屋に俺とシャルルは入った。

ボーデヴィツヒが少し迷っていたようなのでさりげなく、聞こえるように場所を説明しておいた。

食堂は三人目の男子が来たということでも盛り上がっていた。

案の定、女子包囲網と質問攻めにあうことになったので、強引に話を切り上げて部屋に来た、ということだ。

おかげでゆっくり食べることもできなかった。

ヒソヒソと薄い本の話が出てきたときはもうどうにでもなれとしか思えなかった。

「ん〜、紅茶とは随分違う味なんだね？不思議な味だけどおいしいよ」

食後の休憩をかねて、日本茶を飲んでいる。

個人的には緑茶より抹茶が好きである。

「お褒めに預かり光栄ってね。気に入ってもらえてなによりだ」

今日一日話したただけだが、シャルルは平気で嘘をつく人間ではないので、純粹においしいと言ってくれているのがわかる。

正直そういつて貰えるとうれしい限りだ。

「もしかして流って料理とかもできるの？」

「ああ、まあ、かなり偏ってるが作れるっちゃ作れるな。ほら、今日話したろ？ナノマシンのせいで俺のカロリー消費がマツ八だつてこと。だから自然と高カロリーな料理だけ作れるようになった」
それゆえダイエットをしたい人間などには俺の料理はおすすめしない。

「一応健康を考えて栄養バランスを考えて作りはするが、基本的に食べば太る。」

鈴が食ったとき、一週間で一キロ太ったらしい。
以来俺の料理を食ってはいない。

「あ、あはは。女の子にはあんまり好まれない料理だね」

「ほんとにな」

シャルルは苦笑いだった。

「ねえ、流」

「ん？」

「その、屋上での話し、全部本当なの？人体改造のこととか、企業連のこととか。疑ってるわけじゃないんだけど・・・」

「おお、全部マジ、本当のことだ。ちなみにいくつか構築してるシステムもあるな」

考えているものの一つは、認識した目標だけをロックオンして攻撃するシステムだ。
単純に敵機をロックしてミサイルなどを売っても、フレアなどの欺瞞兵装などを使われると無力化される。
なので狙った目標に確実に届くようにするためのシステム。
まだ設計段階なので、何にも考えていないわけだが。

「・・・そっか」

何か悩んでるみたいだな。
力になってやりたいとは思ってたがな。

「何を悩んでるのかはわからないし、無理にも聞かないけど、困ったら頼ってくれよ・・・友達だろ」

「あ・・・うん！」

お、笑うと可愛いなこいつ、ほんとに男か？

「そっいえば、俺も一夏も放課後にISの訓練してるんだが、シャルルも来るか？」

ナノマシンなどのおかげで俺の習熟速度は速いほうだが、それでも代表候補生に比べると、下といわざるを得ない。
俺が山田先生に勝てたのは、専用機を持っていたから、というだけである。

操縦技術、戦術ともに山田先生のほうが遥かに上だった。

「え？」

「専用機も持ってんだろ？模擬戦とかやるときも一人では当たり前だができないし、訓練機とやるのもあれだろ。俺も教えてほしいところとかあるしな」

リヴァイヴを使っているのなら、俺と通じる部分は多々あるはず。参考になるだろうと考える。

「その、じゃあ、行かせてもらってもいい？」

・・・なんか卑猥。じゃなくて。

「俺が誘ったんだ、聞く必要はないだろ。歓迎するぜ」

「うんっ」

「んじゃ、明日も早いし寝るか」

ナノマシンとかの調整は寝てる間が一番活発なんだよな。人間のエネルギー消費が少ない時でもあるからな。

「そうだね」

そういつて電気を消して、ベッドに潜り込む。

「おやすみ、流」

「おう、おやすみ」

少しずつ睡魔が俺の意識を遠のかせていく。

「・・・流。その、聞いてもいい？」

「ん・・・、どうした？」

「その、さ、もし、自分のことを友達だと言ってくれた人を裏切るような行動をとったら、騙してたりしたら、どうする・・・？」

「ん、そうだな、まずは何でか聞くかな」

まずはそこから。

そんな行動を取るということは、裏切る気が、騙す気があるなしに関わらず、理由があるのだろう。

それを知ろうともせずただその人物を敵対者と見なしはしない。

「何がしかの理由があつてそいつはそんな行動を取ることにしたんだろ？多分だけだな。だったら、出来得る限り力になりたいと思ひ、それに、それこそそいつは友達だろ？だったら、そいつを最後まで信じるさ」

例え俺がそんな行動をとったとしても、一夏も筈も、他の奴らも俺を信じてくれるだろう。

なら、俺も最後まで信じる。

「そっかあ・・・。その、ごめんね、変なこと聞いちゃって。話聞いてくれてありがとね」

「どういたしまして。んじゃ今度こそ寝よつぜ。もう眠い」

「ふふっ、そうだね。おやすみ、流」

そうして今度こそ俺の意識は沈んでいった。

第十四話 友人は・・・信じるもの（後書き）

あとがき

投稿したのに改訂するでもなくいきなり消してしまい誠に申し訳ありません。

次からは気をつけます・・・。

第十五話 oh・・・やっちゃまった(前書き)

さて、ほかの方々の小説ではこのシーンはオリ主が一夏が出くわすことが多いですね。

出くわさないのがありますが。

そういえば、アニメのシャルの胸って小説より明らかでかくない？
CどころかDとかEあるように見えるのは俺だけなのだろうか？

第十五話 oh・・・やっちゃまった

「一夏弱いな」

「一夏さん弱いですわね」

「一夏弱いわねえ」

「一夏軟弱だな」

「一夏、ごめん。フォローできないよ」

「いじめだ！」

どこがいじめだと言うのだ。

お前と模擬戦やった俺、シャルル、鈴、セシリアは全員勝ったじゃないか。

俺は訓練機なので、一夏とは戦っていない。

基本的に俺が射撃戦を挑んでくる仮想敵として相手をしていた。

ちなみに上から俺、セシリア、鈴、俺、シャルル、一夏だ。

今は土曜の午後。

午前は理論学習を行い、午後は自由時間となっている。

なので俺たち専用機組みはこうして模擬戦をやりに来たのだが、一夏が弱い。弱すぎる。

ちなみに俺の戦績はセシリアと鈴には機体性能の差で勝利、シャルルにはボコボコにされたとき。

PAをがんがんに削るかのごとくショットガンとか撃ちまくってくるものだからどうしようもない。

企業連のISには、ある特徴がある。

それは、二次移行セカンド・シフトをしなければ、機体の設計思想、コンセプトを完全には発揮できないという点である。

俺の機体、黒鉄は企業連の様々なパーツや武器を使ってはいるが、フレームなどはレイレナード社が主体となって造っていた。

レイレナード社の第三代型IS、AALEYHAタイプ型のものを調整

したものとなっており、高機動、高速戦闘を前提とした機体になっており、最高速度はそこそ速いのだが、俺の黒鉄は重く、瞬間速度、加速性が低く、本来の高機動戦というものができない。

そんな重たい武装や重い外部ジェネレータなどを積まなければ少しはマシだったのだ。

だが、長時間戦闘、四つの非固定浮遊部位アンロック・ユニットの機能、ウイングスラスターブライマルアーマー、ほかの企業連の第三世代型ISに標準装備されているPAを

より強化するための整波装置、その他の機能が搭載されている多目的武装を実現するために糞重たいが、エネルギー出力が高く、エネルギー要領も多いレイレナード社が作った重量型ジェネレータ、『SO8-MAXWELL』を搭載しているのだ。

が、たとえ俺のISが過剰積載気味だったとしても、経験を積んでいるIS操縦者ならもう少しうまく動けるだろう。

ブルー・ティアーズはそのエネルギー消費と第三世代型、実験機であるがゆえの信頼性の無さ、甲龍はその総火力の低さか黒鉄のPAブライマルアーマーの存在により、決定的な攻撃が当てられず俺に負けただけであり、技術は俺が劣る。

とはいえ最近では射撃も結構うまくなってきたので、悲観するほどでもないのだが。

が、一夏はフォローできないほどだった。何がひどいかと言うと、

「ええとね、一夏が流、オルコットさん、凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器とか中、遠距離武器のの特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・」

何処がだい？

俺が重ライフルとアサルトライフルで弾幕張ってるのに突っ込んで

くる君が？

移動進路予測されて俺にグレネードキャノンをぶち込まれる君の何処が把握していると言っんだい？

「お前の場合は文字通り知っているつもり、わかっているつもりなだけ。俺どころかシャルル、セシリアにも『イグニッション・ブースト瞬時加速』の軌道読まれてたる？」

「うっ……、確かに」

と、俺とシャルルの解説と説明をしていく。

俺の場合経験こそ無いが知識はあるし、シャルルは経験もある。

ちなみに箒、セシリア、鈴の説明は、お前から説明する気あんの？と疑問を持たざるを得なかった。

『ぐっという感じ、ずばっという感じ、がきんっという感じだ』

『なんとなくやればいいのよ。感覚よ感覚。はあ？わかんないの？』

『防御のときは右半身を斜め上前方へ五度傾けて……』

と、いう感じだった。

向こうではなぜ自分たちの説明で理解できないとか言っているが、それでわかればある意味天才だと思う。

箒のは擬音でしか表現されていないし、鈴は感覚でやれと、IS操縦初心者にはとてもとまきついお言葉をいただいているし、セシリアのは一夏には理論的過ぎる。

いや確かにISはイメージで動かすのはわかるんだけど。

ちなみに今現在、このアリーナは使用希望者で溢れ返って、とまではいけないがそこその人が入っている。

一夏は三回もほかのグループの人とぶつかり、俺も一度ぶつかった。ナノマシンの稼働率を下げているのでハイパーセンサーから送られ

てくる情報も処理速度が遅いのだ。

「一夏の『白式』って、後付武装がないんだよね？」

ん？

「ああ、何回か調べてもらったけど、拡張領域バススロットが空いてないらしい。だから量子変換インスタールは無理だって言われた。流のはあるのになんで・
」

そりゃあお前、開発した企業違うからだろうよ。

俺のISの拡張領域は、なぜか？設計した当初より多くなっている。おそらく姉さんが手を加えたのだろう。

今更ではあるが、今度詳しいデータもらっとこ。

「まあ、お前の白式バススロットに拡張領域がないのはワンオフ・アビリティーにほとんどの容量を使ってるからだ」

「ワンオフ・・・アビリティー・・・って、なんだっけ？」

・・・こいつ、俺教えたこと忘れてやがる。

「ほおお？俺が、教えたことを、もう、忘れて、いるんだな？」

もう俺こいつに教えるのヤダ。

「えっ？あっ！あー」

「あ、あはは。まあまあ、流、落ち着いて？ワンオフ・アビリティーってというのは文字通り、唯一仕様の特殊能力だよ。操縦者とIS

の相性が最高になったときに発現する能力」

シャルルがそういうのなら仕方ない。

しかしこいつやっぱり優秀だな。

IS操縦者なら基本的な知識ではあるが、こんな言葉がスラスラ出てくるあたり優秀だということがわかる。

が、しかし、唯一仕様は基本的に第二形態から発現するものであり、ワンオフ・アビリティ
セカンド・シフト二次移行をしたとしても、発現しない場合が多いのだ。

そして単一の存在しか扱うことのできない唯一仕様能力を多数の間が使えるようにしたのが、擬似的に能力を再現した多様能力ともワンオフ・アビリティ
マルチ・アビリティ言えるものを搭載したのが、第三世代型ISである。

「ってことは白式の唯一仕様は『零落白夜』なのか？」

エネルギー消滅攻撃。

シールドエネルギーを消費してあらゆるエネルギーを消滅させる諸刃の刃。

が、対価として文字通りあらゆるエネルギーを消滅させるのだ。レーザーだろうがシールドエネルギーだろうが熱エネルギーだろうが。

俺のISは特に相性が悪い。

「白式は第一形態なのに発現しているっていうのは異常事態だよ。前例がまったくないからね。しかも、その能力が織斑先生が使ったISと同じ能力だよな？」

「まあ、姉弟だからとかそんな理由じゃないか？」

「アホかお前は。そんな単純な理由でアビリティが同じになるわけないだろ。操縦者によってアビリティは変わってくるんだ」

そのあたりはむしろ一夏にだけが原因ではないと俺は考えている。千冬さんの弟である、一夏だからこそ、そして『白式』だからこそ、同じ能力が発現したと考えているのだ。なるほど、わからん（結局結論に至っていない）。

「ま、しかしごちゃごちゃ言たって仕方ない。使えるもんは使えるって認識でいいだろ。シャルル、一夏に射撃訓練やらせてくれ。俺はあいつらとやってるよ」

「うん、わかったよ」

シャルルは一夏に使用許可を出した射撃武器を手渡す。さて、俺もあいつらとやりますか。

「さて、馬鹿どもと箒？訓練するのでしょうか」

「誰が馬鹿ですよ！？」「誰が馬鹿だつて！？」

「二人で挑んで量産機に負けたやつを馬鹿といわずして何という。理由が連携しなかったこと、俺は援護してやってたのになあああ？」

威圧しながら言う二人ともうつ、と唸って黙る。よろしい。

「んじゃ、箒と俺、セシリアと鈴のペアで訓練するか。そっちの内容は自分たちで決めてくれ」

了解、と返事が来るのを聞いて箒の方を向く。

「それで、流。私たちはなにをするのだ？」

そんな一夏と一緒にいたいオーラ出さないで。
俺泣いちゃう。

「はあ、まったく。お前がトーナメントで使うのも、その打鉄だろ？だから、対ラファール・リヴァイヴを想定して、弾幕を張るから、お前は俺に接近して攻撃する。それだけだ」

ぶつちやけ打鉄の防御力は、接近戦重視なので、非常に高い。
多少の無茶はできるが、そこはそこ、それはそれ、対策をとってお
くに越したことはない。

トーナメントでは専用機持ち以外は、打鉄かラファールしか使えな
い。

箒に接近戦はあまり問題がなかったので、この訓練をすることにし
たのだ。

「む、わかった。・・・これで強くなれば優勝も・・・」

あー、そういえばそんな約束してたね。

が、一夏に付き合うのかよ？と聞いたら、

『ん？買い物ぐらい付き合うぞ？』

という言葉をいただいた。

とりあえず殴った俺は悪くない。

そしてあまりにひどい勘違いだったので箒に言い出せない。

まあ、その時がくればどうにかなんだろ。

「んじゃ、いくぞー」

私は認めない。

あの人の栄光は、栄誉は、織斑一夏、たった一人の存在のために手に入れることができなかった。

だから私は認めない。

なんの力も持っていない、ISを操縦できるだけの男であるあの男を認めない。

「ねえ、ちよつとアレ・・・」

「うそつ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階だつて聞いてたけど」

トライアル段階だった、だ。

ISを操縦できる男の登場や国がローゼンタール社とアルブレヒト・ドライス社に設計図を渡して、共同で完成させたのだ。

AIC、『停止結界』の製造元はローゼンタールなので、何の問題もなかった。

「おい」

ISの開放回線オープン・チャネルを開く。

「・・・なんだよ」

不機嫌な声が返ってくるが、何の関係もない。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

そう、私にはこいつを叩きのめす理由がある。

教官が再び私に教導してくれるようにするためにも、こいつを倒す。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

「また今度な」

そう来るか。

ならば

「ならば、戦わざるを得ないようにしてやる！」

『シユヴァルツエア・レーゲン』を戦闘モードに移行。
レールカノンを展開する。

アルブレヒト・ドライス、アルドラが、インテリオルのレールキャ
ノンを元に威力を重視した大型のレールカノン。

インテリオル・ユニオンのレールキャノンがある程度威力を保ちな
がらも速度を重視したものならばアルドラのは速度を犠牲に口径を
さらに大きくし、威力を高めたもの。

そしてその銃口が火を噴き、大口径の実弾が　　あらぬ方向へ
と進路を変更した。

「……貴様、邪魔をするか」

おお、怖い怖い。

「ああ、邪魔するぜ？ドイツの専用機持ちは密集空間でそんなものをぶっ放す頭のイカれた奴だったのか？」

今、俺は重ライフルを、ボーデヴィツヒに向けている。

レールカノンの実弾を、ナノマシンの稼働率を上げて軌道を計算、予測した地点にライフルを撃つことで軌道を変更させたのだ。

もともと、ハイパーセンサーのおかげで確認はしてたしな。というかこいつ、俺とキャラかぶってね？

銀髪に白髪、そして互いに赤眼で、黒いIS、しかもどちらかと言えば重装備型。

「邪魔をするのなら、貴様も倒すまでだ！」

「やってみやがれってんだ」

こちらに敵意を向けてきたのに対し、背部左兵装のハイレーザーキヤノンを展開する。

戦闘が開始、という時だった。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

横槍が入った。

俺たちが乱闘騒ぎを起こしているのを教師が見たのだろう。

「っち、今日は引こう」

どうぞ自由。

「一夏、大丈夫？」

シャルルが一夏に気をかける。

「あ、ああ。大丈夫だ。助かったぜ、流」

「ん、まあ、俺が勝手にしたことだ。気にするな。感謝するなら金払え」

「やっぱり感謝しなくていいか？」

なんて薄情な奴だ。

「もう、二人とも、怪我がなくてよかったよ。今日はもうあがるっ？四時も過ぎてるし、アリーナの閉館時間だしね」

お、もうそんな時間か。

シャルルの射撃講座も聞けたしなかなか有意義な時間だったな。

「ん、そうだな。正直俺は射撃の方が得意だったから、シャルルに話し聞けてよかったな」

「それなら良かった」

そういつて人懐っこい笑みで笑いかけてくる。
やめて！俺の理性はもうゼロよ！？
なんてことやってる場合じゃないか。
あゝ、やばい、正直ドキッとする。
こいつは男、こいつは男……。
ごめん無理。

「えっと、その、じゃあ、二人とも先に着替えて戻ってて」

こいつはとにかく俺たちと着替えたがらない。

転校初日の一回きりである。

ISスーツを中に着込んで着ていたりする。

「たまには一緒に着替えようぜ？」

「い、イヤ」

一夏が着替えようと誘う。

「つれないこと言っなよ」

「つれないって言うか、どうして一夏は僕と着替えたがるの？流が
いるじゃない」

「そうだぞ一夏。嫌がってるんだからやめておけよ。それとも何か
？もしかしてシャルルの背後を狙って……」

「違う！変な誤解するな！」

「つく、一夏……。まさかそっちの趣味だったのか……!？」

「お、男の方に負けた・・・!? 屈辱ですわ・・・!」
「一夏・・・、あんた見損なつたわ・・・!」

おおすごい視線。

「だああ! 違つってんだろ! 流もそついつ冗談やめるよ!」

「ま、それはおいといて、おら、さつさと行くぞ。シャルルが後から来るって言うてんだ。そうさせとけよ」

つたく、こいつは空気読めよ。

鈍感要塞め。

「ちよ、流、耳引つ張るなよ!」

ズルズルと引きずつていく。

いろいろ喚いているが気にしない。

更衣室で着替え終わつたら山田先生が来た。

大浴場が週二回使用できるようになったということと、一夏の白式、俺の黒鉄の正式な登録手続きが必要だから職員室に来てくれ、とのことだった。

俺の所屬つて、あゝ、多分便宜上有澤か。

「・・・・・・・・・・。はあ・・・・・・・・」

自室に一人で戻り、ため息をつく。

いろいろと我慢しているせいなのか、いつも以上に深いため息だった。
自分でも驚くほどに。

(・・・いやだなあ、友達って言うてくれてる人のことを騙すのって)

おそらく、向こうも薄々気づいてはいるのだとおもつ。
合わせてくれているのだ、自分に。

結局、自分はその優しさに甘えていただけなのだ。
そんな彼に感謝のしながらも申し訳なく思う。
そんな鬱屈とした気持ちを振り払うように頭を振るう。

(シャワーでも浴びて気持ちを変えよう)

そう思考をし、クローゼットから着替えを取り出してシャワールームに向かう。

自分の気持ちが晴れるかどうかなど、正直なところわかりきっていたのだが。

「ああ、書くだけの作業とか死ねる」

文字は打つ派の人間だから書くのは正直つらい。

これで俺は黒鉄の正式な登録者になったが、実際のところ事務的な意味合いが強い。

トボトボと自室に戻る。

おそらくシャルルも戻っているはずだ。

「と、思ったんだがな、食堂にでも行ったか？」

まだ夕食時ではないのでその可能性は低いのだが。

シャワールームから音も聞こえないな。

ふむ、どこに行ったのやら。

（あー、そっぴやシャワー浴びてねえな。浴びてくるか、ボディソープも切れてたからついでに補充するか）

汗を流すついでにボディソープが少なかったのを思い出す。

そう思い、予備のボディソープを取り出してシャワールームに向かう。

その行動を後に役得だと思った反面、とても後悔することになるのだが。

そして、俺は、扉を開けた。

「え？」

脱衣所にいたのは、おそらくちょうどシャワーからあがったのであろう、シャルルがいた。

全裸で。

いや、相手が男だったら正直そこまで問題はなかったのだろうが、問題なのは、こいつが、

「な、な、な……、流……？」

女、という一点につきるのであった。

すらりとした体とくびれに長い脚、そしてある程度の大きさを供え

たバスト。

くびれが恐らくCカップ程度であろう、胸を強調していた。

まだ体を拭いてなかったのだろう、雫が乗っている肌は、非常に肌理細やかで、光を反射することで雫が宝石にも見えた。

oh、ナンテコツタイ。

正直忘れられそうにないんですけど。

だってナノマシンの稼働率が半端じゃない。

「あ、あー、えーと、だな。悪い、すぐ出てく」

無理やり目を逸らして体を百八十度回転させる。

すぐに脱衣所を出た。

やっちまったよ……。

あの光景を目に焼き付けながらも頭を抱えて後悔することになった。

いや、後悔するというのがまず男としてあれなのだが。

第十五話 oh・・・やっちゃまった(後書き)

あとがき

ところで聞いてくれ。

今就職活動の真っ最中なんだが・・・、今7社ぐらい受けてるんだ、
どう思う？

正直疲れて死にそうだよ・・・。

二巻終了時点でこの小説での企業連の解説とかしようかな〜と思っ
てます。

そつえば、この小説は需要があるのだろうか？

お気に入り件数が増えているのは喜ばしいのだが、感想がないので
正直不安です。

文が稚拙なので仕方ないかなと思う部分もありますが。

第十六話 だったら・・・ここにいる(前書き)

長らくお待たせしました、フラグ奪取回です。

正直こつという描写はとても苦手なのですが。

追記 よく見たら同じ文章を二つ書いていたところと、そのほか
数箇所誤字を修正。

第十六話 だったら・・・ここにいろ

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

沈黙が痛い。

互いに気まずい雰囲気の流れており、言葉を発することができない。

「あー、そのだな」

ビクッ！っと、体が震えるシャルル。

そついやシャルルって男性の名前だよな。

「悪かったな、シャワーの音とかも聞こえなかったから、いるのに気づかなかった」

物音が聞こえなかったので、わからなかったのだ。

ISのコアネットワークを使えば何処にいるのかはわかるが、そのときは思いつかなかった。

が、所詮言い訳で、見てしまったことは変えようのない事実であり、俺だけに非があるわけではないが、この場合は見た俺が悪い。

「う、ううん。いいんだよ。僕も、流のこと騙してたしね」

うう、ええ子やあ。

この場合、俺訴えられたり殴られたり日本刀で斬りかかられたりスナイプされたり衝撃ボーンされてもおかしくないよ？多分。

俺が女なら殺してるね、確実に。

けど、一夏あたりが覗いたりしても、『お、織斑君ならべつに・・・

『みたいな展開になるんだろうなあ……』

廊下の角を曲がれば女子とぶつかって胸に手が、体育をすれば足をくじいた女子をお姫様抱っこで、科学の実験で化学薬品が爆発しそうになると抱きかかえて守る。

無自覚で馬鹿にされていた女子を褒め、無自覚で二番目を落とし、雄姿を見せ付けて女を落とす。

誰のことかは言わずもがな、落とした女は数知れずのあいつならこんな状況でも普通にお咎めなしだろう。むしろ見たいなら見せてあげると言われかねない。

「んで、何でコス……男装なんてしてたのか、聞いていいか？」

その後、お茶とかを用意して、ベッドに座り、疑問を、大体的見当はついている疑問を聞いた。

正直なところ、聞く意味も特にないものではあったが。

「今なんて言おうとしたのかな……？」

気にするな。

「えっとね、多分だけど、薄々気づいてはいたんだよね？流は」

あー、やっぱり、シャルルも気づいてたのか。

「まあ、な。インテリオル・ユニオン、BFF、アルドラから送られてきた情報は、デュノア社のシャルル・デュノアなる人物の存在が確認されたのは、俺たちがISを操縦できるようになってから、だったしな」

つまりは、それ以前にはシャルルという人間はおらず、国籍も”シ

ヤルル・デユノア”なのか怪しいということである。
ちなみにあのラウラ・ボーデヴィツヒの情報もある。

「それに、女特有の体の特徴とか、歩き方、身体的特徴が女性特有のあれだったからな」

そう、俺がこいつが女だと気づいた二つ目の理由。

人間は、男と女でその歩き方などが違う。

男性には男性特有の、女性には女性特有の歩き方などがある。

そしてこいつの場合、胸をコルセットだのでペタンにでもしたんだろう、不自然さに拍車を掛けた。

上半身の動きがどことなくぎこちない動きとなっており、何かに圧迫されているような印象だった。

「そつか、本当に企業連との繋がり強いんだね。それに普通身体的特徴なんて見ないとも思うんだけどね。そうだよ、僕の父、デユノア社の社長からの命令でここに来たんだ。その目的が……」

「俺と一夏およびISのデータ、か」

「……うん」

それも気づいていたからこそ、俺が一緒の部屋になったのだ。

『白式』は倉持技研の技術が、『黒鉄』には企業連の技術が、それらのデータを入手できればデータが少ないデユノア社が第三世代機を作るに十分なデータを得られるだろう。

変な行動したら俺が対処するつもりだったが、正直杞憂ではあったのだが。

「僕ね、愛人の子なんだ」

ん？なんだ突然。

「愛人？」

「うん。引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんがなくなったときにね、父の部下がやってきたの。いろいろと検査する過程でIS適応が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ」

シャルルがそれを話す顔は今にも泣きそうだった。

決して明るい話ではなく、また言いたくもないであろう話を健気に喋るシャルル。

その様子は触れれば今にも壊れてしまいそうなものだった。

「父に会ったのは二回くらいでね、普段は別邸で生活してるんだ。本邸に行ったときは本妻の人に殴られたよ『泥棒猫が！』って」

愛想笑いをしながら頬をさするシャルル。

そのときのことを思い出しているのだろう。

「それからね、知ってるだろうけどデュノア社が経営危機になったんだ。企業連みたいに政治力があるわけでも豊富な資源と財産があるわけじゃないしね。ヨーロッパの国家は企業連の企業が多数あるから、最低限の面目とかは保ててはいるんだけど、国家に協力的じゃないからね。フランスも、インテリオルがあるけど、欧州連合の統治計画『イグニッション・プラン』からは除名されているからね。アドバンテージを取れないと悲惨なんだよ」

そのあたりのことは昼休みの時にも聞いたし、正直なところ、デュ

ノア社の経営危機って間接的にはあるけど俺も関係してね？

国にある程度の成果を提供はしても、完全に従っているわけではなく、また国もそれほど大きなことを言うことはできない。

ドイツのローゼンタール、スウェーデンのトーラスはその例外であり、ローゼンタールはその思想からAICを国に提供してはいるが、国のISを作っているわけではなく、トーラスは国にそれ以外の企業がなかったので国に技術の詳細などを教えてもなんら問題はない。

また、アフリカ中東一帯が勢力圏のアルゼブラ社も、量産型のIS、第三世代型のISの製作を一手に引き受けている。

イギリス、フランス、イスラエル、ドイツ、アメリカ、カナダは、企業連の企業があるが、そのどれもが国に技術をあまり提供しないので、国はほかの企業に製作、もしくは自身で生産しなければならぬのだ。

加えて、企業連は元々、技術も高かったのだ。

単純に、ISの開発が遅れていた、というだけである。

「第三世代機を開発していたんだけど、元々遅れに遅れてようやく開発できて、最後発の第二世代機だからデータも時間も不足していたんだ。結果予算は大幅カット、トリアルで選ばれなかったら援助は全面カット、IS開発許可も剥奪させられるんだ」

最悪の場合、言いなりになる可能性もあるのだが、インテリオル・ユニオンに頼るといふ手段もある。

「んで、それが男装につながるわけか・・・」

そう、俺と一夏以外の男の操縦者という存在を公表することで、

「うん。広告塔としての役割と、日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータをとれるだろ

うってね」

かつその片割れの一人が篠ノ之博士の弟となれば、引き込むことができれば技術に困る可能性もなくなる、ってことか。

そして双方の男子ともに篠ノ之博士と縁がある唯一の人間なのだから。

「しかも俺は企業連との繋がりもあるのと、篠ノ之博士の弟だから、か」

思ったことをそのまま声に出す。

話を聞く限り、その父親は利用していただけなように聞こえる。シャルルもそう感じているのだろう。

が、本当にそうなのか疑問が残る部分がある。

男装など、即効ではれそうな気もするのだ。

それがわからないような人間が、現在経営危機に陥っているとはいえ一つの大企業の社長になどなれるはずもなく、そこまで成長させるのも困難なはずなのだが……。

「首尾よく接触できたら、後はデータを取ればいいってことか。手段はいろいろあるしな」

確かに女に囲まれている状況で、同じ男子ということならば接触しやすいだろう。

だが、ここEIS学園に限定するならば、むしろ女で来たほうが良いような気がするのだが。

美人局とかハニートラップとか。

俺も一夏も、絶対しない、やらないとは言いきれないだろう。

俺たちより、むしろ女子達がこぞって話しかけてくるような場所である。

俺たちは見知った顔しか話しかけられないし、ナンパなどするような性格でもない、一夏は言わずもがな。

まあ、顔も覚えていない人間になど話かけたりしないわけだが。

「簡単に言っただ盗んで来い、って言われてるわけか」

「・・・うん」

とはいえそんな行動一切取っていなかった当たり、こいつはあまりやる気はなかったようだ。

損な性格というか、良い奴なのか、ともあれそこら辺にいる最低な人間ではないということだけは確かか。

正直、データが盗まれようがどうでも良かったわけだが。

俺は困らない。

せいぜい、黒鉄の開発もとの企業連と白式の開発元の倉持技研が困るだけだ。

まあ、嫌味になるので言わないが。

「あー、んでだな、どうするんだ？お前」

そう、もはやその目的も。自分の正体を偽っているということも、俺にはばれてしまっている。

千冬さんはあたり気づいているのかもしれないが。

「そう・・・だね、多分本国に呼び戻されるんじゃないかな。デュノア社は潰れるか・・・、良くても他企業の傘下になるかM&amp;p・Aされるかな。BFF社からそういう話が来ているらしいし」

おおっ、耳が痛い。

ちなみにM&amp;p・Aとは企業の合併、買収などを意味する。

シャルルが言っているのM&a m p ; Aは買収のことである。

B F Fは昔から中央集権で知られており、積極的なM&a m p ; Aにより、その力を増してきたのだ。

企業連に参加している企業のほとんどは、本社がその国にある、というだけで支社は世界各地にある。

少なくともグループの盟主は支社がある。

G Aの傘下企業である有澤重工は日本の企業であり、I Sのコアを二つ、所有しており、シェアはほとんどないが、量産型のI Sも開発した。

そのI Sの特徴を真つ向から無視したような機体の特性から、あまり需要はないが。

「あ、ごめんね。嫌味を言うつもりはなかったんだ。けど、話したら楽になったよ。ありがとう、そしてごめんね、今までウソついて」

フランス政府も真相を知ったら黙ってはいないだろう。だけど、

「・・・お前は、お前自身は、どうしたいんだ？」

「え？」

そんな話をされようが、何をされようが、知りたいことは一つである。

「だから、そんな話も、データがどうかどうでもいいんだよ。お前は、どうしたいんだ？この学園にいたくないのか？」

「え・・・。あ。だ・・・。だって、僕は流を、皆を騙してて・

・・・」

はあ、今更だろうに。
だんだんと、嗚咽が混じっていくシャルル。

「親がどう言おうが、国がどう言おうがどうでもいい。お前は、どうしたい？ここに残りたくないのか？俺は残ってほしいぜ？」

だって、なぜなら、なぜならば、

「お前は、俺の、俺たちの友達だ。俺と一緒にこの学園で、お前と一緒にいたいぜ。お前はどうか？」

「い、一緒にいたいって・・・」

顔を赤らめるシャルル。

おおう？何か微妙に勘違いされている気がしないでもない。

まあいい、話を進めるとしよう。

今はシリアスな場面だ、間違ってもシリアルじゃない。

「それにだ、特記事項二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されていないものとする」

そう、この学園は、まあ便宜上ではあるが中立なのだ。

文字通りどの国にも組織にも所属しない、IS学園という一つの組織であり、国家とも言えるのだ。

作られた経緯がとても情けないものではあるが。

「つまりだ、少なくとも三年間、お前はここにいれば安全ってわけだ。どうするか、選ぶ権利がないなら俺が選んでやる。ここにいろつてな」

「・・・あ、う、ぼ、僕、ここにいても、いいのかな？皆にウソ・・・、ついてたのに」

「お前がここにいたっていうならいいんだ。皆がお前がウソをついていたことを責めてくるんなら、一緒に謝ってやる、一緒に責められてやるさ」

気付いてたのに黙っていた俺も同罪だからな。連帯責任って言葉もあることだし。

「あー、ほら、だから泣き止めよ。なんだったら俺の胸の中で泣くか？」

一夏じゃないが、女の泣く顔を見ると、心が痛い。和ませるつもりで冗談を言ったのだが。

「・・・うん」

・・・は？

最初は何が起こったのか全く理解できなかった。訂正、理解するのがあれなだけだったのだが。

うん、シャルルが俺に体を預けて俺の胸で泣いているという状態。

「落ち着いたか？」

「うん、ごめんね。もう大丈夫だよ」

どれくらいだったのか？

あまりの状態にわからなかったが、落ち着ける程度の時間はたったらしい。

が、夕方だったのもあり、そんなことをしていた時間も結構経っていたからか、生理的欲求がその欲を満たせと存在を主張してきた。人間は欲を満たさなければ生きていけないおろかな生き物であり、満たされない場合、精神や身体に異常が起こる場合が多い。そう、俺にとっては特に致命的なものだった。要するに腹減った。

「あー、飯食いに行くか。シャルルはどうする？食堂行くか？」

「あ、うん。そうするよ。・・・その、一応、男装してから行くから、先に行つててくれない？」

「ん、わかった。先に行つて席はとつとく」

「・・・うん」

？何だ？微妙に不機嫌になつてないか？

この時なぜ不機嫌になつていたのか？皆目検討もつかなかったわけだが。

(・・・普通、何かしらのアクションがあるんじゃないのかな？)

自分のことをあまり意識していないのでは？と多少疑問に思われていることなど露知らず、俺は食堂に歩を進めていった。
食べた飯は・・・、まあいつもどおりだった。

第十六話 だったら・・・ここにいろ（後書き）

ヒヤッハー、会社の試験、二つほど受けてきたけど絶望的すぎる。

しかも来週は三社も行くとか死ぬる。

そしてまた受ける企業を探すんだ・・・。

そういえば最近、ACLRをやり始めたんですが、難しくくてゴミナントな俺はクリアできない。

G・ファウストが倒せない。

ちくせう。

嘘予告そのに(前書き)

フロム脳が暴走した。

嘘予告その二

「正体不明の自律兵器？」

『はい。世界各地で確認されています。その形状は度々異なるのですが、共通している点がいくつか。無人兵器であること、そして現れることに改修、強化されていることなどです』

世界各地で無人の兵器が姿を見せ始めている。

その高度な技術でもってしか作れないであろう兵器は、作れるとしたら一人しか思い浮かばなかった。

だが、姉がそんなものを作るとは考えにくかった。

『現れ始めた当初は、然したる戦力でもなく、量産機のISで十分に対処可能だったのですが、最近では企業連のIS操縦者でも実力の高い者でしか撃破できないようになってきています』

この時、赤と空色で作られているというその無人兵器が世界を動乱へと導く存在であるなど、考えもしなかったのだ。

「世界各地で特攻兵器が確認されているのだと？」

「は、はい。間違いありません、織斑先生。生活圈、戦争地域、場所を問わず大量の特攻兵器が確認されています！」

二つ目の動乱は、同じく無人兵器の特攻による、文明の破壊だった。その量でもって、質で圧倒的に勝る467機のISたちの防衛網を突破し、建築物を、街を、人を蹂躪していく。

「くそ、確認された場所が文字通り世界各地じゃ製造場所も何もわからない・・・！」

その圧倒的なまでの質量による攻撃で、人々も、ISを操る人たちも心身ともに消耗していった。

そしてさらにその絶望に追い討ちをかける存在が、全ての物を、者を粉砕する者が、赤と空色の無人兵器だった。

「企業連はこいつを、無差別に全てを粉砕することから、^{粉砕す}バルヴァライザーと呼称することにしたらしい。破壊することにソフト、ハードともに進化させていくなら・・・」

ならば、こちらも戦うほどに成長していくしかない。

ISとは、常に成長していく存在なのだから。

その結論に至った理由は、そうして姉から送られてきたのは、バルヴァライザーの発生源、インターネサインの情報だった。

『やあ、ちーちゃん、篝ちゃん、なつくんにいっくん。これを皆が見ているときは私は多分もう、生きてはいないんだろっね。』

そんな、自分が死んでいることを前提とした映像。

何を言っているのか、そこにいた人間たちは理解できなかった。

いや、したくなかったというのが正しいのか。

『私は10年前、このインターネサインを発見した時、歓喜したとともに恐怖したよ。無限に生まれ続け無限に進化し続ける破壊兵器

に

世界が大天才と言わせるほどの頭脳を持ち、技術を持つ彼女をして恐怖といわせる存在。

その場にいた誰もが深い絶望を抱いた。

『だから決めたんだ、進化し続けるのならば、成長し続けるモノの創造を、ちーちゃんたちがその力で自分たちの身を守れるようになって』

その言葉の意味は、ISが、パルヴァライザーを破壊するために作られたことを意味していた。

進化し続けるのならば、成長し続けるものでもって対抗する。

それが篠ノ之束が導き出した結論だった。

人の感情も手も使わない人形を、人の意思と想いを乗せた隣人でもって。

人による、ISを用いた、通常戦力の全てを集めた、世界の全戦力を集めた、敵中枢、インターネサインへの攻撃が、この瞬間に決まったのだった。

「くそ、何て数なんだ！？このままでは・・・！」

「がつ、まだなのか・・・！？インターネサインの破壊は・・・！」

「そんな・・・、こんなので・・・」

全ての戦力を集めてなお、その差は絶望的だった。

量で劣り、質で勝っていても少しずつ、だが確実にその差を狭め、逆に差を広げていく。

だが、一縷の希望にかけるしかなかった。

全戦力を投入しても突破は不可能と判断された。
ならば、であれば、

「・・・行くぞ。俺たちが、インターネサインを破壊するんだ」

少数精鋭による、インターネサインへの進入、破壊しかなかった。
それに選ばれたのは、IS学園の生徒だった。

一度もその戦闘データをヤツらに取得されていない彼らならば、そんな理由からの選抜だった。

「だから、俺は皆を守りたいんだ！力を貸してくれ！白式！」

白き装甲に身を包んだ少年が、その力で守りたいものを守るために。

「復讐なんて言うつもりはない。姉さんの願いを、想いに応えるだけだ！」

黒き衣を身にまとう少年はたった一人の姉の想いに応えるために。

仲間が、友人がパルヴァライザーと戦うために、二人を中枢へ届けるために、足止めとして残っていった。

そうしてたどり着いた場所を破壊し、全てを終えた、そう思ったときだった。

真の絶望だった。

今までのような赤と空色の装甲ではなく、青と空色で構成されたその全てを粉碎する者が、最後の敵として現れた。

「ラスボスって雰囲気だよな」

「まったく、一難去つてまた一難つてか？」

二人の少年は冗談を言い合っているような会話で、だがその顔だけは目の前の敵だけを見据えている。

黒と白は、青と対峙する。

その戦いの結末は、まだどうなったのかは判明していない。

嘘予告その二（後書き）

あとがき

何かやっちゃまった嘘予告その2。

相手はパルで、ISを作った理由はそれを破壊するためとかいう捏造設定。

うん、ねえわ。

しかしドミナント（多分）の一夏と流ならやってくれる・・・、と思いたい。

ラストはピンチになったときに筭たちが順番に来るみたいな。

後は皆のフロム脳で・・・、わかるな？

第マイナス巻話 奇襲か・・・狗に相応しい所業だ（前書き）

降って沸いた話。

思いついたからには執筆だ！

30分程度で書き上げたのでいつも以上に誤字脱字がひどい可能性が高いです。

あったら遠慮なく言ってください。

第マイナス巻話 奇襲か・・・狗に相応しい所業だ

『作戦を説明する。お前たちの任務は先日、ISを待機状態で移動していたIS操縦者を殺害し、IS『バルバロイ』を強奪した者の撃破となる。バルバロイはアルゼブラ社標準機SOULHベースのカスタム機だ。機体の防御力は決して高くはなく、本人のIS適正も最低限のものしかない。だが、ホワイトアフリカ、マグリブ解放前線の最後の障害でもある。今回は移動中の彼らをISで奇襲、撃破する流れになる。大丈夫だとは思うが、油断だけはするなよ』

「っへ、『アマジグ』、ね。IS適正はかなり低いんだろ？なんだったって今まで手を打たなかったのやら」

軽そうな調子の女性が、冗談を言うような口調で言う。
それは自身の實力からか、その敵の想定される弱さからか。
事実、目標の人物はISを起動させることができる最低限の適正し
がなく、強奪し、搭乗しはじめたのもつい最近のことであるので、
彼女の言動は仕方ないとも言えた。

「中東最大のレジスタンス、ホワイトアフリカ一帯で行動を起こしているマグリブ解放前線だったから、今まで手を出せなかったらしいわ。まあ、確かにISがあれば大した損害もなかったとは思っただけけど」

もう一人、物腰の柔らかいような女性が言う。

ISが1機でもあれば、既存の兵器など鉄屑同然。
相手が一個師団でも、壊滅させることができるだろう。

「どちらにせよ、私たちが成すべき事はバルバロイの撃破および回

収だ。そろそろ作戦地域だ。準備をしろ」

おそらく、今回の任務での隊長であろう女性が作戦領域に近づいてきたことを確認し、準備を促す。

「了解」「りょくかい」

この時、その自身の実力を過信せず、常に冷静な判断を下せる彼女でさえ、自分たちの予想が覆されることになるとは予想だにしないかつただろう。

『目標、作戦エリア内……、つつ！？バルバロイ、既に起動しています！そんな……、気づかれていた？』

作戦領域に到達、予定通り奇襲をかけようとした彼女たちに、オペレータの緊迫した声が響く。

それは予定外のこと起きたことを示していた。

「……ふむ。仕方あるまい。聞こえているか二人とも、予定変更だ。このまま正面からバルバロイを撃破、回収した後、残党を排除する」

そう、『ラファール・リヴァイヴ』に身を包んだ三人が、行動方針を決めたときだった。

『奇襲か……。無駄な策だったな、不意打ちとは狗に相応しい所

業だ。容赦はしない……、行くぞ!』

ISのコアネットワークを利用した『開放回線』による通信だった。敵IS『バルバロイ』からの通信だった。

最初から奇襲をかけられることを知っていたような口ぶり。

そして撃破されるのは自分たちだと、そう宣言した。

『っへ!そんなでかい口叩けるのも今のうちだぜ。三対一で勝てると思うなよ!』

そう、圧倒的な有利である。

数、経験、操縦時間、IS用の訓練を積んだ期間。

すべてが勝っているだろう。

だが、この時、隊長である女性は、いやな予感がしていた。

些細な違和感であったので、気のせいだと断じたのだが。

「目標を確認、仕掛けます!」

「すぐに倒してやるよ!」

「……作戦を開始する」

そして、圧倒的な戦闘が開始されたのであった。

「……馬鹿な!早すぎる!」

軽量、薄い装甲、速度が出せるよう設計されたISだということに差し引いても異常なまでの速度と機動。

空力特性は高いが、あんな速度で動き続けられれば、操縦者の体への負担は、肉体にも精神にも半端なものではない。

バルバロイのデータは、確かに高速で動けるようにチューンされた機体だったが、前操縦者ここまでの速度など出してなどいない。

瞬間速度は音速を優に超えているのだ。

その異常な速度と機動でもって接近、手に持つショットガンとアサルトライフルをリヴァイヴに向かって撃ち放つ。

その威力も、カタログを遥かに超える威力だった。

「くそっ！どうなってんだ！リミッター解除されてたとしてもあの武器はこんな威力は出せないはずだ！」

彼女、アマジグが使っている武器は、どちらもアルゼブラ社製のアサルトライフルとショットガンだった。

威力は企業連に所属しているほかの企業製アサルトライフルと比べても低いものではあるが、連射速度と信頼性は高い。

ショットガンは一回の発射で三十二発の散弾を打ち出すものである。どちらも、一発一発の威力はあまり高くない武器のはずだった。

だが、彼女の使っているのは違った。

「まさか、単一仕様能力!？」

そう叫ぶ。

そう、ISと操縦者の相性が最高状態になり、セカンド・シフト二次移行を果たした

ISのみが発現する能力。

彼女のワンオフアビリティが何なのか、詳細は不明だが、予想はつく。

「機体性能の向上か・・・!」

機体性能の向上。

基本的な能力や、威力、速度などを底上げする能力なのだろう。

だが、そうだとしても強化される幅が大きすぎる。

アサルトライフルで言えば、威力、弾速、射撃精度、射程距離まで

もが大体1.5倍にまで上がっている。
連射性能までも上がっていた。

一発の威力は武器の性質上、強化されていたとしても高いものではない。

だが、その驚異的な連射スピードにより、撃てば当たり、弾速、射撃精度、射程距離までも強化されているそれは、異常なスピードでシールドバリアーのエネルギーを削っていった。

「悪いが、まだ死ねんのだ。貴様らのせいだな！」

それは憎悪だった。

それは敵意だった。

それは殺意だった。

（勝率は限りなく低い・・・！短期間で二次移行をしているなど、どれだけの実戦を行った？どれだけの濃い経験を積んだ？どれだけの負荷を己が精神にかけた・・・！？）

そう、彼女がバルバロイを強奪してからそこまでの月日は経っていない。

だというのに国家代表ですらしていないものが多い二次移行をしている事実。

そして低いIS適正を補うかのような操縦技術。

こちらを高速度下でも常に捕捉し、銃口を向けてくる技術。

そしてそれらを支える圧倒的なまでの精神力。

勝てる要素がなかった。

甘かったのだ、全てが。

「お前たち、撤退しろ！足止めは私がする！」

ゆえに、選択肢は一つ、誰か一人がこいつの追撃を防ぎ、残る二人を撤退させる。

「……っ！了解、撤退する！」

「了解です……。戻ってきてくださいね」

おそらく、勝ち目が低いことも、自分たちの取れる選択肢も、自分の考えも、理解しているのだろう。

顔をゆがめて戦闘エリアから撤退していく二人を見送り、敵へと視線を向ける。

「せめて、手傷くらいは負わさせてやろう」

最後の最後まで足掻くことを決める。

「……足掻くな、運命を受け入れろ……！」

そうして両者は動き出した……。

その戦闘で仲間の下へ帰還したのは、撤退したものを除けば二人。

片方は無傷でいつもの無表情で仲間の元に戻り、笑顔で迎えられる。

もう一人は傷だらけの姿で仲間の元に戻り、涙で持って迎えられた。

(……そろそろ、私一人では、守るのも困難になってきたな)

皆が国のISを撃退できたことによるこんでいる。
だが私の気は少々重かった。

今までISが差し向けられることなどほとんどなく、あっても一機程度だった。

だが今回は三機であり、万全を期すために奇襲までしてきた。奴から送られてきた情報がなければ、少なからず損害が出ていただろう。

(仲間に話しはしてある・・・か)

癪だが、頼るほかはない。

限界も近い。

そうして渡された連絡するための方法をとる。

「こちら、ホワイトアフリカ、マグリブ解放前線所属、アマジীগだ。応答してくれ」

『ザザッ、こちら、スコールよ。話はわかっているわ、歓迎するわ。』

『砂漠の狼』アマジীগ』

第マイナス巻話 奇襲か・・・狗に相応しい所業だ（後書き）

アマジীগってAC4におけるアナトリアの傭兵、アスピナの傭兵を含めた主人公の一人だと思ふ。

とはいえ、序盤で彼の物語は終了するわけだが。

第十七話 模擬戦は・・・不意打ちで始まる（前書き）

どうも、最近更新が滞りがちな焼肉です。

ついこの前、お気に入り登録件数が69件だったのを見て爆笑していたのですが、いつのまにか80件を超えていた・・・。
こんな小説に付き合ってください、ありがとうございます。

あ、後、あとがきで重要なことを書く・・・かもしれないです。

第十七話 模擬戦は・・・不意打ちで始まる

(な、なぜこのようなことに・・・)

篠ノ之箒は、表面上平静を保ってはいたが、内心酷く焦っていた。というか心の中で頭を抱えていた。

近頃、また女子たちの噂話が増えていたので、聞き耳を立てていたのだ。

そこで問題なのは、その内容だった。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏か篠ノ之流のどちらかと交際できる』

という内容だった。

それは私と一夏だけの話だろうと、心の中で叫ぶ。

あの一夏や流が言いふらすとは考えにくいので、どこからか情報が漏れたか、あのとときの状況を都合のいいように誤解したのか。

おそらくそのどちらかである。

加えて、なぜに流までその話に入っているのか？

なぜか胸がもやもやとする。

と、そこまで考えて

(いや、待て待て！あいつとは兄妹だ！そんな気持ちは抱いていない！)

自分の中で、彼に嫉妬しているのだと結論付ける。

(男とはいえ)一夏と一番仲が良いと言ってもいい流に嫉妬しているのだと。

思考がそれた。

本題に戻ることにする。

ともあれ、今の状況は不味い、非常に不味い。

自分以外の女性が一夏と付き合うというのは言うまでもないほどに、激しい抵抗感がある。

そして流も、少なくとも自分が認めていない女性が付き合うとなると、抵抗感が無いわけでは無い。

自分とて、普段こそ時代がかった口調だったり、無愛想な態度ではあるが、花も恥らう十代の女である。

『二人だけの秘密の関係』というものに年相応 + の魅力を感じてしまうのも仕方ない。

といっても、抱く望みはセシリアや鈴と全く差が無く、一夏から見れば意味不明な行動と言動が多々あり、流の視点ではただのツンデレとしか認識されてない。

今のところ二人に勝っている点は、流が手伝ってくれている、というところぐらいであり、それも一夏に対しては効果としては非常に薄いものだった。

(とにかく優勝だ！優勝すれば・・・)

ふと、優勝、というワード頭に浮かべ、思い出したくもない記憶が頭をかすめる。

剣道において、実力が同年代では抜きん出ていた篤は、大会でも優勝確実　　そのはずだった。

大会の当日に政府の用心保護プログラムによる引越し、参加不能となり、不戦敗となった。

親族の保護を名目とした政府主導の転居である。

西へ東へ、一夏から送られてきた手紙も、場所が特定されては困るという理由で返事はできなかった。

最初に恋慕の対象である一夏と分かれることになり、同じ胎内で育ち、血肉を分けた兄とすらも別々の暮らしを余儀なくされた。

しかもその原因である姉は兄を連れて行方不明になるといふ顛末。実の妹という繋がりがあったことで、執拗なまでの監視と聴取を受け、心身ともに参っていた。

『本当は知っているのではないか？』 『何か隠しているんじゃないか？』 『脅されているならおびえなくてもいいんだよ？』 『お兄さんが人質なら私たちが助けるから』

その言葉のすべてに苛立ちを覚え、覚えた感情など不快感とそれに類似する感情しかなかった。

その一年後には流と連絡が取れるようにはなつたが、それでも心も体も消耗していった。

そして、続けていた剣道も、大会で優勝したときは、喜べるものではなかった。

『ただの憂さ晴らし』 だったからである。

自分の負の感情を、自分の実力で持って、相手を叩きのめしたい。

その自分の心を写すひどく醜い太刀筋は、逃げ出したいほどの惨めな気持ちと自己嫌悪を抱かせた。

その後泣きながら流に電話し、自分の行いを話したときに、叱咤し、慰め、励ましてくれていたことには本当に感謝していた。

本人は家族だから当たり前程度にしか思っていないだろうが。信念も、心も伴わない力は、ただの暴力である。

(今度こそ、私は見誤らずにいれるだろうか・・・)

その醜い姿を、己が恋慕の対象と、血肉を分けた存在に見せたくはない一心で。

いつの間にか、考え事は一夏と流のことではなく、己のなんたるべきかで意識を埋め尽くしていた。

後に、黒く、暗い感情を過去に抱いたことを、後悔することになる

のだが。

思考する。

目を閉じて、自分とその0と1で構成された世界をつなぐ。演算する。

眼を開き、その仮想世界でシミュレートする。

ラウラ・ボーデヴィツヒの駆る、シュヴァルツェア・レーゲンと戦闘を行った場合の勝率は、低い。

第三代型兵装、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー A I Cは慣性停止能力という、簡単に言えばP I Cのそれを強化したものとなっている。

そしてドイツのそれは、自機の機動の制御だけではなく、外へと向けることを可能とさせていた。

より兵器として発展させた、『停止結界』があればは積み重ねてあるのだ。

レーザー兵器、自分の思考外の攻撃などには効果は薄いですが、実弾、I S、準軍事兵器である衝撃砲ですらその動きを停止させることができる。

ゆえに、一対一で戦えば、いくら防御力の高い俺とて削りきられる可能性が高く、エネルギーを消滅させる攻撃を持っていようと、強固な防御壁を持っていようと、体全体の動きを止められてしまえば、後は煮るなり焼くなり好きにできる。

無論、停止させることができる理論限界値を突破したスピードが出せれば、力づくで引きちぎることも可能である。

が、現状では不可能に近い。

はてさて、どうしたものか、と考えていると。

「流？」

声が聞こえてきた。

現実の世界で閉じていた眼を閉じ、目を開ける。

そこにいたのは、シャルルだった。

あの日から、何日か経ったが、着替えだとかの問題は色々あるが普通に生活できている。

・・・何故か不機嫌になられるのだが、正直理由はまったくわからない。

何、着替えるためにシャワールーム入ったら何で不機嫌に？

普通見られたくないよな？

「えっと、何してるの？」

戸惑いを見せながらも、今の俺を見て、何をしているのかを聞いてくる。

つと、そういえばこれ見せたのは初めてか。

そりゃ見たら衝撃的だし、正気を疑うか。

首にコードをぶっ刺して、端末を開いてるだけだったら誰でも正気を疑う。

「ああ、これな。ほら、前に話したろ？機械埋め込んだくって話。首の後ろ側にいろんな端末のコードやらプラグがさせるようになってるから、それを繋いでダイレクトで操作してるんだよ。デメリックも多いけどな」

その方が演算速度はもちろん速い。

自分の思考をダイレクトに機械に反映させることができるのだ。

ISのイメージインターフェースの応用だ。

一体全体どんなプロトコル使えば思考で操作できるんだろうね？

が、もちろんエネルギーの消費は高くなるし、俺自身の体温などが

上がったりまするので長時間の使用は難しくなる。

無人ISが来た時にすべての扉などがロックされていたのを解除できたのもこれのおかげである。

姉が製作したからこそ、そんなことが可能なわけだが。

「ああ、なるほどね。便利そうだけど、その、痛くないの？」

まあ、実際便利ではある。

プラグを抜く。

この神経と機械の接続を付け外しするときはなかなかきついものがある。

所詮は電気信号でやりとりするので、電流が流れるのだ。

本来なら神経焼ききれるんじゃない？と姉さんに聞いたが、無問題らしい。

なので、

「まあ、痛い程度で済む。実際のところかなり危ないんだろうが、

そこはほら、姉さん一応天才だから」

無駄なところで技術力の高さをわかる。

「あゝ、しかし、あいつと戦ったら高確率で負ける、か」

「一対一では無類の強さを誇るだろう。」

「一対多、多対多でならば勝機もあるんだが。」

まず、ドイツの特殊部隊に所属しており、そういった特殊な訓練をしているのに加え、ISの訓練時間とかも段違いだったのにあの千冬さんの教え子。

弱いわけがないし、射撃、格闘両方できるだろう。

「でも、負ける気はないんでしょ？」

「そりゃあ、まあな」

強さを、千冬さんの強さを誤解しているやつに負けるなど真つ平ごめんだ。

第二回モンド・グロツソで起きた一夏誘拐事件のときにもし、千冬さんが一夏を助けに行かなかったのならば、俺は心底失望していただろう。

というより、あの人は家族想いだからこそ、強いのだ。

「ま、有効な策が思いつかないなら今は訓練あるのみだな。何もせずに時間を消費するよりいいだろ」

一応、停止結界に対して有効な武器の訓練を訓練しておくか。

レーザー兵器は停止結界に有効な武器だがエネルギー消費高いからあんまり使いたくないんだよなあ。

銃身自体を止められたら意味がないからある程度の距離もとらなければならぬ。

男ならグレネー・・・いやなんでもない。

俺は実弾のほうが好みなんだけどな。

ガトリングとか好きだけどバカス力撃つてるといくら弾が格納されてるといっても弾切れになるし、砲身も熱でいかれるので、あまり使用してはいない。

シャルルも一緒に明日からだが、訓練をやることになった。

「「あ」「

女二人、そろって間の抜けて声を出してしまう。

時間は放課後、場所は第三アリーナ、間抜けな声を出したのはセシリアと鈴だった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するつもりなんだけど」

優勝できれば一夏と付き合えるという噂を信じているのでいつも以上に身が入ってる。

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

優勝できれば（ry。

類は友を呼ぶ、同じ穴の貉、考えることは算もセシリアも鈴もあまり変わらないのはなぜだろうか？

そして二人の間に見えない火花が散る。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習も含めてどっちが上かはっきりさせとくつても悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわね。どちらの方がより強く、優雅であるか、この場ではっきりさせようではありませんか」

セシリアはスターライトを、鈴は双天牙月を構える。

互いにビットと衝撃砲をいつでも使用可能な状態にして。

いざ　　というときに、音速の弾丸が飛来した。

「「！？」」

ハイパーセンサーから送られてくる警告音を頼りに緊急回避をする。本来、目を向ける必要もない砲弾が飛んできた方向を見る。

そこにはアルドラ社製大型レーザカノン『ブリッツ』を構えた黒い機体がただずんでいた。

『シュヴァルツエア・レーゲン』、操縦者名ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「いったいどういふつもり？いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

肩に双天牙月を預けながら、準戦闘状態だった衝撃砲を、不意の攻撃にも対応できるように意識しておく。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・ふん、データで見たときのほうがまだ強そうではあったな」

それを言い放つことでどんな結果が得られるのか、わかった上での挑発だった。

代表候補生である以上、ある程度のプライドがあり、自分の国が威信をかけて開発した機体を馬鹿にされるといふのは非常に腹立たしいものである。

とはいえ、どの国のISも、少なからず企業連の影響を受けている。火器管制機器やエネルギーバイパス、アクチュエータ関連の技術など、様々な分野でその技術力を発揮している企業連の技術は、非常に高く、国が作ったISには最新のものより数世代前のものが使用されているのだが。

黒鉄にはそれらの最新技術が惜しみなく使われており、企業連の影響が少ない日本の企業が大元を作った『白式』がそれと互角以上に戦うことができることから双方の機体の異常性がわかる。

実験機である白式は信頼性が非常に低いのだが。

「何？やるの？わざわざドイツからボコボコにされるためにやってくるなんて大したマゾっぶりね。ジャガイモ農場じゃ流行ってんの？」

鈴の攻撃　鈴は挑発した。

「あああ鈴さん、こちらの方は言語もお持ちでない知能の低いお人ですから、あんまりいじめるのは可哀想ですわよ？」

セシリアの攻撃　セシリアは追いつちをかけた。

ラウラのすべてを見下すかのような、たった一人を除いて自分が頂点に立っているとしても言うかのような目つきに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、それでもどうにか怒りの捌け口を言葉に見出そうとしました。

無駄な行動ではあったが。

「三人がかりで素人とはいえ援護まである状況で量産機に惨敗する程度の実力しか持たぬものが専用機持ちとはな。数しか能がない国と古いだけ取り柄の国はよほど人材不足らしい」

ブチッ。

何かが、具体的にこめかみ辺りの血管が切れる音がした。
セシリアと鈴はそれを聞いて最終安全装置セーフティ・ロックを外す。

「ああ、ああ、はいはい、わかったわよ。そんなにスクラップにされたいならお望みどおりにしてあげるわ。セシリア、ジャンケンするわよ、ジャンケン」

「ええ、そうですね。わたくしとしてはどちらでもよいのですが」
それを見たラウラは元々目に宿していた馬鹿にするような感情をさらに強めて言う。

「はっ！二人がかりで来たらどうだ？一に一を足しても二にしかならん。実力も何も持たない男でESを操縦できるといふ事以外なんの魅力もない種馬を取り合うようなメスに、負ける可能性など皆無だからな」

この時、すでに限界に達していた。
散々国を馬鹿にされ自分たちを馬鹿にされ、誇りを馬鹿にされて。
それだけで限界間近だったというのに、その挑発でもって限界は容易く突破された。

「今なんて言った？あたしには『好きなだけ殴ってください』としか聞こえなかつたんだけど？」

「場にいらない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ」

獲物を握り締める手をギリッと音が聞こえるような力を込める。
対するラウラはその冷やかな視線で両手を広げて言い放つ。

「とつとと来い」

「上等！」

「はい。ですので後ほど、データなどはよろしくお願いします」

「あーへいへい。了解」

企業連に武器の注文をして、黒鉄のデータを今度送信してくれるよう頼まれる。

断る理由など欠片もないので快諾する。

言い方はおざなりではあるが。

一夏と筈、シャルルも向かっているであろう、第三アリーナへと歩を進める。

なのだがなにやら騒がしいので、何が起きているのか確認しようとする。

と、そんな時である。

ドゴオン！

爆発音が聞こえた。

何があったんだ？

音や状況からして模擬戦でもやってるんだろうが、模擬戦でこんな高威力のもの使うのか？

いやな予感がするな、急ぐか。

そう思い、走り出すのだった。

ラウラの攻撃が、二人を執拗なまでに攻撃し、機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域へと到達する。

これ以上は冗談でもなんでもなく、命にかかわる。

そして、その行動を続けていたラウラに愉悦の表情が見えたとき、頭の中のゲージがレッドゾーンに振り切られた。

「おおおおお！」

白式を展開、同時に『零落白夜』を発動し、アリーナのバリアーへとたたき付ける。

そしてそれを破壊すると同時に、瞬時加速を行い、ラウラへと突撃する。

「その手を離せえ！」

必殺の意思で二人を掴んでいるラウラへ、刀を振り下ろす。

零落白夜の最大出力ならば、たとえ流のISですら直撃した場合、その後の戦闘続行は不可能となるものだった。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな。もう一人の男のほうはまだマシだったな」

零落白夜のエネルギー刃がラウラに届く寸前、ぴたっつと動きが止まる。

金色に光るその右目は性格に一夏を捉えていた。

「な、なんだ！？くそっ、体がっ……。！」

油断していた、感情的になって冷静な判断ができていなかった、あの間合いならば倒せると思っていた。

全身が白い親友ならばこんな状況でも冷静な判断と行動ができただろうと、頭の片隅に思い浮かべ、後悔する。目に見えない何かに動きを束縛され、振り上げた腕もそのまま止まる。

零落白夜のエネルギー刃も最大出力を保てず、小さく消えていく。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。消えろ」

肩のレールカノンの砲口を一夏へと向ける。

『一夏！離れて！』

シャルルからの個人間秘匿通信ブライベート・チャネルが聞こえて、同時にアサルトライフル二丁での弾雨が降り注ぐ。ラウラの意識がその攻撃によってそれる。

「ちっ……。雑魚が……」

それまで俺を拘束していた目に見えない力が消え、体に自由が戻ってくる。

すぐさま鈴とセシリアを抱きかかえ、瞬時加速でもって離脱した。無茶な最大出力の同時使用で、エネルギーの残量は少なかったが、一夏の想いに答えるように瞬時加速を発動させた。

「一夏っ！二人は！？」

一夏の援護に入ったシャルルが、アサルトライフルを撃ち放ち、さらに高速武器切替ラピッド・スイッチによってラウラの反撃を封じる。

「う……。一夏……」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。……シャルル、大丈夫だ。二人とも意識は一応ある」

「よかった」

安堵した声を出しながらもその手は一切休めない。

「ふん、邪魔な旧世代機アンティーク如きが。どちらにせよ貴様を狙う必要などない」

そう言ってレールカノンの砲口をセシリアと鈴に向ける。

すでに危険域に入っている二人に攻撃をさせるわけにはいかない。

「くそっ！」

急いで斜線上に白式を割り込ませる。

発射する　　そのときだった。

爆炎がラウラの背後で巻き上がった。

「随分と愉快的な状況になってるな？」

その親友は、いつか女子生徒に見せた時以上に不機嫌な面でその砲口をラウラに向けていた。

はあ。

何がしかの行動は起こすと思っていたが、まさかここまでやるとはな。

国の代表候補生としてその行動はどんなのよ？と個一時間ほど問い詰めた。

「次から次へと……。愚図の次は不意打ちでしか勝つこともできない卑怯者とはな」

背中に着弾した大口径グレネードは、ロックを感知されないよう、マニュアルで撃つたので、ほぼ直撃した。

そしてその挑発はおそらく、模擬戦のことを言っているのだろう。とはいえ事実なので否定出来ないし、するつもりもない。

「おおー、何とでも言え。明らかに戦闘続行が不可能な奴をいたぶるのが趣味な奴に何言われようがどうとも思わないしな。勝つためには手段を選ばないとまではいかないが、一夏と戦うためとか人の気を引くために手段を選ばない奴に言われる筋合いはないな」

「口だけは達者だな。いや、口だけが達者なのか。実力も伴わない雑魚が。企業連がデータを徹底的に隠していたからどんなものかと思えば、拍子抜けだな」

挑発の応酬。

二人の間の空気は凍っているところの話ではなく、間に入れば息が止まりそうなほどの空間となっていた。

一夏も、シャルルも口を挟むことが出来ない。

俺も大して気にも留めず、あちらもまたなんとも思っていない。

・・・無駄な労力だな。

「企業連が何しようが俺の知ったこつちやないんだけどな。おつと、悪い悪い。お前の教官は低脳で愚図で上等な判断も下せない馬鹿だったな、しようがないか。謝るぜ」

だが、その挑発だけは受け流せなかったのだらう。

明らかに自分もつとも尊敬している人物を貶す言葉。

「なんだと・・・？貴様、今なんと言った？」

殺意すら込められた視線が俺を射抜く。

「ああ、いや別に。ただ、そんな気を惹きたいから軽はずみな行動を取るようにお前に教えた千冬さんに失望しただけさ。力の捉え方も勘違いしてる奴。教え子がこんな低脳で、愚図な馬鹿だったらそう教えた人間も高が知れてるな」

もちろん、そんなことは露ほども思っていない。

いや、むしろ、俺が千冬さんを尊敬しているからこそ、こいつの行動がいらつくのだ。

「貴様・・・、教官を侮辱するか。いいだらう。私を前にしてその暴言、今ここで殺してやる！」

殺気を体から発し、俺へと突撃してくるラウラ。

対する俺は・・・、特に何にも身構えたりはしていなかった。

瞬時加速でもって俺へと接近、しようとしたとき、俺たちの間に影が割り込み、ガギン！という金属音でもってその加速を中断させられた。

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!?!」「教官・・・!?!」

その影は、ハイパーセンサーで捉えていた、千冬さんだった。

というか、生身でIS用の近接ブレード振り回すってあなた人間ですか？

俺ですらナノマシン稼働レベルを最大にして筋力強化とかをぎりぎりにしてやっと、という重さである。

百kg単位の重さのはすなんだが・・・？

「模擬戦をやるのは一向に構わん。が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。戦いの決着はトナメントでつける」

「教官がそう仰るなら」

まるで犬だな。

素直に頷き、ISを解除する。

そして俺へ視線を向けて一言。

「貴様は私が倒す。臆病風に吹かれて逃げるなよ」

「こっちの台詞だ。言い訳して逃げるなよ」

最後の最後まで挑発で終わる。

決着はトナメント、強さというものを勘違いしているあいつの勘違いを正す。

結局自分の価値観を押し付けるだけだが、千冬さんの強さまで勘違いされているというのは正直見過ごせない。

「篠ノ之兄、織斑、デュノアもそれでいいな」

「了解です」「はい」「あ、ああ・・・」

「教師には『はい』と答える。後、無駄に挑発するな、篠ノ之兄」

「あゝ、すみません」

結構な暴言とか言い放ってしまったので、結構後悔している。

別に俺はあいつのことが嫌いなわけではないのだ。

そしてそれを聞いた千冬さんは一度ため息をつき、アリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで一切の私闘を禁止する。解散！」

パンツ！と手を強く叩く音。

それは銃声にも似ていた。

「別に助けられなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

・・・よく言うよ、命の危険あったのにどんだけ見得を切るんだお前らは。

「どーせ好きな奴に無様な姿見られたくなかった」とかいう理由だ

る。素直に感謝しとけよ」

今、一夏にはジュースを買いに行かせている。
鈍感要塞のあいつがこの場にいても何の役にも立たない。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！ここここ
こここれだから流は！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささ
か気分を害しますわねっ！」

やたらと捲くし立てる二人。
そこに、

「二人とも、なに騒いでんだ？怪我人なんだから、静かにしとけよ」
こいつに正論を言われるとは……！！

「ほれ、ウーロン茶と紅茶、後流とシャルルもこれ」

皆の分のジュースを渡す一夏。
それを受け取り、ペットボトルをあけて飲む。

「あはは、まあまあ、二人とも、とりあえず飲んで落ち着きなよ」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきます」

不本意とか言っておきながら一夏に買ってきてもらった嬉しさを隠
しきれていない。

微妙ににやけているのが、きも……じゃなくて気色……じゃな

くて、やっぱきもい。

そんな微笑ましい？光景を見ているときである。

ドドドドドドドッ！

「あー、嫌な予感しかしねえ」

「な、なんだ？この音」

廊下から地鳴りのような音が聞こえてくる。
しかも段々と近づいて・・・近づいて？

ドカーン！

「へぶっ！」

「な、流！？」

何かをぶっ飛ばす音が聞こえた瞬間、俺の視界は閉ざされた。
顔面がめっちゃ痛い。

というか俺にドアが吹っ飛んできたのだった。

シャルルが俺を呼んでいるが、もちろん返事を返す余裕はない。

「織斑君！」

「篠ノ之君！」

「デュノア君！」

ちよ、名前呼ばれてるけど何事？

ドアをシャルルに手伝わしてもらって引き剥がし、その状況を見た。
人が入ってくる、などという生易しいものではなく、雪崩れ込んで
きている。

どこぞのホラー映画のごとく我先にと出される手。

こええよ。

「な、なんだなんだ!?!」

「流、大丈夫?というか皆落ち着いて!?!」

「いつつ、つてか俺にドアをぶっ飛ばしたのは無視?」

なんという奴らだ。

恐るべし、男に飢えた女子。

何があつたか要約すると。

・ 今月開催のトーナメントは諸々の事情によりペアで行う。

・ 選ばれなかつたら抽選。

つまりは、

「私と組もう、織斑君!」

「私とペアになって、篠ノ之君!」

「私と組んで、デュノア君!」

いきなりトーナメントの仕様変更・・・?

ああ、なるほど、あの無人ISみたいなことがまた起きたら困るからか。

と、そんな考えを落ち着いてできる状況でもなく、とにかく俺たちの誰かと組もうと皆目が血走っていた。

いや、マジでホラーなんですけど。

一夏はどうでもいいが、シャルルと女子を組ませるのは非常にやヴあいな・・・。

(・・・っは!)

その時流に電流走る・・・！
明暗すぎる、これで行こう。

「あー、悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ。一夏も、俺の妹と組むから」

これで万事解決である。

シャルルの正体を知っているのは、現状俺だけであり、俺が組めば問題にも対処できる。
筈と組ませるのは言う必要もないだろう。

「ちよ、流!？」

一夏が抗議の声を上げてくる。
目で黙ってる、と言う。

ぬぐっ、っという声とともに押し黙る。

そして女子たちを見ると・・・。

「まあ、そういうことなら・・・」

「ほかの女子と組まれるよりはいいし、幼馴染らしいし・・・」

「男同士って絵になるし・・・ゲフンゲフン」

「篠ノ之君攻めのデュノア君受け・・・、いや、逆もありね・・・」

ふむ、何とか納得してくれたようだ。

って、おい、最後の発言した奴何言ってやがる。
シャルルの顔が真っ赤です。

どう見ても女子たちに勘違いされます、本当にありがとっございませした。

と、何とか嵐も過ぎ去ったかと思ったのだが。

「一夏っ！あ、あたしと組なさいよ！幼馴染でしょうが！」

「一夏さん！クラスメイトとしてここはわたくしが！」

こいつら何馬鹿言ってるんだ。

「アホかお前らは。お前らのISの損傷状況と修復に専念しなけりやいけない理由言ってみろ」

「うっ、ぐっ・・・、ダメージレベルCよ・・・」

「ISの蓄積理論注意事項第三条うう・・・」

よくできました。

ISは戦闘経験だけではなく、その他、整備や修理、日常生活において、所持者の行動すらも経験として蓄積している。

それらを蓄積させることで、より進化した状態へ自分を移行させ、操縦者との相性を最高状態に近づけていく。

そして、ダメージレベルがCを超えて損傷し、その状態で稼働させた場合特殊なエネルギーバイパスを形成してしまい、平常時の稼働において悪影響を及ぼすことが多いのだ。

つまり、こいつらのISに経験をつませる意味でも、後で余計な修理や整備をしないためにも、全快するまで休ませなくてはいけないのだ。

その後は、まあ、一夏の鈍感ぶりが発揮されたとか言いようがない。

「な、何故私が一夏と組むことになっているのだ！」

どつどつ、落ち着け妹よ。

「まあ、落ち着けよ。俺も何も考えずにそうしたわけじゃないんだから」

「む」

主な理由が二つ。

「まず一つ、俺はともかく、他の女子とかとあいつが組むなんて嫌だろっ?」

「そ、それは……、そうだが」

「そしてもう一つ。お前、優勝したら、どつなる?」

「……?いや、優勝したら付き合ってもらっ、とだけは言ったが……」

そう、それである。

「お前、ペア組んで優勝して、そのときに私と付き合ってくれみたいなこと言ってみろ。雰囲気は最高だぞ!」

「な……、なん……だど?」

驚愕の表情をする筈。

「わかったか? わかったならお前がすべき行動は……、もう一

「つだらう?」

「ああ!」

わかってくれて何よりだ。

トーナメントまであまり時間は残されていないだろうが、あいつと訓練に励むことだろう。

ちなみに一夏の文句は封殺した。

「はてさて俺たちの最初の相手は誰になるかな」と

正直、一夏とラウラ以外、強敵と呼べる強敵は、あまりいないのだが。

とはいえ油断だけはしない。

「と言いつつ流はボーデヴィツヒさんと戦いたいんでしょ?」

「む」

さすがシャルル、聡いな。

そして対戦相手が表示される。

ちなみに俺とシャルルのペアは、Aブロッカー一回戦一組目だった。お相手は……。

「……マジか」

「一回戦であたるとは、ね」

全くだ。

だが、手間が省けたな。

対戦者名『ラウラ・ボーデヴィツヒ』、搭乗機体『シュヴァルツェ

ア・レーゲン』、せきぐち『関口藍菜』、搭乗機体『打鉄』。

黒と黒、この対決は波乱を予想させていた。

第十七話 模擬戦は・・・不意打ちで始まる（後書き）

あとがき

ヒヤッハー、今更ながら、PSPのスパロボZを友人に借りてプレイしてみた。

輝くブリタニア・ユニオンの国家名には思わず吹きました。

で、重要なことは何かというと、作者、就職先が決まりました。要するに内定をいただいたのです。

更新速度が多少速くなる、かもしれない

第十八話 戦いは・・・曖昧に（前書き）

馬鹿な・・・、この静寂・・・、遅かったというのか。
マジ二週間もかかるとかねーよ。

そして手抜き満載。

もうだめかもしれんね、俺の精神が。

第十八話 戦いは・・・曖昧に

その姿は、かつて自分に泣きながら電話してきた妹に似ていた。その在り方はかつて妹が行ったことに似ていた。

過去の醜悪な姿を見ているようで腹が立つのと同時に、自分の妹と同様、俺にできることはないのか、そう、思案せずにはいられなかった。

別に嫌いなわけでもない。

恐らく、あいつ自身は純粹に千冬さんを尊敬しているだけなのだ。それが行き過ぎているのと、方向性がおかしいのだが。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間とほかの雑魚と戦う手間が省けたというものだ」

自分の実力ならば、ほかの生徒相手に負けはない。

そう自分に絶対の自信と他者を見下した雰囲気を感じる。

そしてそれを考えさせることができる実力と高い機体性能。

その自信と傲慢、へし折ってやんよ！

いやごめん、多分一人じゃ無理。

まあ、手はある。

この戦いは、一人じゃないんだからな。

「ん、別に全員が全員、雑魚つてわけでもないだろうに。特に一夏は今でこそそんなに強くないが・・・、強くなると思うぜ？」

あいつはやると決めたら強い。

その意思が強靱だからこそ、技術や経験が伴っていないくとも、強いのだ。

とはいえ、基本的に勘もよかったりするのの一部の感情だけが自分に対して他人に対しても致命的に鈍いのはいかななものだ。

俺のそこら辺の勘は、あいつのおかげで鍛えられたといってもいいだろう。

「それと、だ。俺も負ける気はさらさらない。せいぜい、その慢心で足を掬われないように気をつけとけよ」

「貴様ごときに私が遅れを取るものか」

うーん、何か喧嘩口調になってしまふ俺。

試合開始まで、後五秒。

『んじゃシャルル、最初に立てた作戦通りに行くか』

シャルルにプライベート・チャンネルで通信を入れる。

残り三秒。

『了解！』

残り一秒。

「叩き潰す」「やれるだけやるさ」

勝算は……、ある！

試合開始。

試合開始の合図と共にラウラは瞬時加速で一気に接近、対する俺は

というところ。。。

全力で後ろに下がり、右手に持ったインテリオル製ハイレーザーライフル『HLR01-CANOPUS』を構え、左手はアサルトライフル『MARVE』を構えてトリガーを引く。

「ツチ、面倒な」

あたれば絶対防御すら発動するハイレーザーを避け、アサルトライフルの直撃を避けながらこちらへと接近し、右手を掲げる。

それをみて、俺はナノマシンの稼働率を上げる。

AIC、停止結界の発動の前兆。

セシリア達との会話を思い出す。

「AIC？何だそれ？」

こいつ、流石に調べとけよ。

お前、戦うつもりだったんだろ？

「AIC、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。自慢じゃないが俺が設計してドイツのローゼンタール社に開発させたもの。ドイツのお偉いさんはそれを自機の機動だけじゃなく、外に向けて使用できるように開発したのが『停止結界』だ。通称、慣性停止能力」

「ちなみに一夏さん、PICというものはご存知ですわよね？」

「・・・知らん」

・・・イマ、コイツハ、ナンテ、イツタ？

「おかしいな。俺の記憶に、間違いがないのなら、その単語のことは、教えたはずなんだがなあ？」

後ろから何か黒いものが立ち上がってる気がしないでもない。

「え？そんなこと教えてもらったっけ？」

「PIC、パッシブ・イナードシャル・キャンセラー。ISの基本事項、全てのISはこれで浮遊、加速、停止を行っている。ちゃんと教えたはずなんだがな、おかしいな」

例外として企業連の機体か。

「ちょ、怖い、怖いんだけど、顔近い！しかもなんだその背後の黒いの！何か立ち上ってるぞ！？」

気のせいだよ一夏君。

「漫才はそのへんにしときなさいよ。正直、あそこまで衝撃砲と相性が悪いとは思わなかったわ」

ひでえ、あれを漫才扱い。

俺としては結構まじめに教えてやったのに・・・。
あの夜のことは遊びだったのね！シクシク。

「まったく同意見ですわ・・・。あそこまでの完成度を誇っているとは思いませんでした。ローゼンタールは企業連の中ではその技術

を比較的国に提供する企業とはいえ・・・」

おう、ローゼンタールね。

アルドラも技術提供したらしいが。

ドイツは外聞もプライドも捨てたか？

それでも最新のFCSやらは提供しなかったってオーメルとインテリオルからは連絡着てたし、まあどうでもいいや。

「まあ、停止結界の対策は取れるっちゃ取れるんだがな」

「どんなだよ？」

「簡単だ。まず、停止結界はエネルギー兵器、レーザーだとかに効果薄い」

あれ自体も、エネルギーのフィールドだということをつけ加える。

エネルギーに慣性などないのだから。

そこで疑問に浮かぶのが、零落白夜を発動した一夏が止まった理由なのだが、単純に腕や体を停止させられたからである。

なので、

「ですが、砲身を止められてしまえばライフルは意味を成しませんことよ？」

「そこで対策その2、だ。人間、俗に言う必殺技とか自分の得意な行動をとるときは、どうしたったってクセだとか体に変化が出る」

一夏で言えば右手を握ったり開いたりを繰り返すこと。

俺もおそらくはあるだろう、他者から見れば、だが。

自分では気付かないことが多い。

「ようは、停止結界を使う瞬間のあいつの動きを見極めれば、回避がぐっと楽になるってわけだ」

虹彩は感情が高ぶれば色が変わる。

そしてまず右手を掲げなければならぬというのは言ってしまうえばテレフォンパンチと同じだ。

が、掲げられてから行動するのでは若干遅い。

なので、その右手を出す瞬間の体の動きなどを観察すればいいのだ。

んで、ナノマシンの稼働率を上げ反射速度を上げる……！

停止結界発動の兆候、その体の動き、クセ、目の動き、全てを頭に記録する。

コンマ数秒おきに頭へと蓄積されていく映像。

「逃げに徹していたようだが、随分と動きが鈍いな？捕まえたぞ！」

が、技術の差もあり、捉えられてしまう。

停止結界により、俺の体の動きが止まったのを確認して、レールカノンを展開する。

が、まあ、焦るなよ。

この戦い、一対一じゃねえんだから、な。

「シャルル、ヘルプ」

「もうちょっと緊張感を持ってほしいな」と

そう、不満を言いつつ、ラウラへと六十一口径アサルトカノン『ガ
ルム』をぶつ放し、爆破弾がラウラを襲った。
肩のカノンを構えていたラウラの体制が崩れ、狙いがそれる。
さらにたたみかける様なシャルルの攻撃に後退する。

「ちつ・・・！時代遅れ風情が・・・！」
アンティーク

後退したラウラに追撃をかけようとシャルルが突撃体制へと移り、
『ラビットスイッチ』
『高速切替』で武器を呼び出した。

流石、としか言いようがないな、シャルルもあいつも。

伊達や酔狂で代表候補生なんてやってないか。

「あれ？私、空気？」

ラウラのパートナー打鉄を纏い、追撃を防ぐようにシャルルへと切
り掛かる。

その言葉に若干の同情を覚えたのは俺だけじゃないはずだ。

防御型ISである打鉄の実体シールドを展開して弾丸を弾く。

シャルルの動きが鈍ったのを見たラウラがまた、右手を掲げる。

おっと、これはまずいな。

「余所見とは結構余裕だな？大言壮語するだけのことはある」

停止結界を発動し、おそらくタッグのパートナーごとシャルルを拘
束しようとしたのだろう。

それをそれを阻止するためにアサルトライフルのトリガーを引く。

ダンドンツ！と軽快な音を響かせてシユヴァルツエア・レーゲンの

シールドエネルギーを削る。

弾弾ッ！とか思っていないから。

『シャルル、無事か？』

『うん、大丈夫。助かったよ』

問題はないらしいな。

俺も準備は整った。

『なら、当初の予定通りに行くか。データはもう十分、誤差も戦闘中に補正できる範囲だ』

『了解、ちゃんと勝ってね？』

言われるまでもないさ……！

俺たちの作戦。

単純明快である。

一対多が前提の機体となっているレーゲンは、その操縦者の気質もあり、多対多、もしくは多対一を想定していないのだ。

なまじ停止結界の完成度が高いだけに。

なら、話は簡単だ。

もう一人の方をさっさと片付けて、二人でボコる。

実力の高いシャルルならすぐ倒せるだろう。

「ふん。先に片方をつぶす作戦か。定石ではある。が、無意味だな」

最初からパートナーを数に入れていない。

自分だけで倒せるという絶対の自信から来る発言だった。

「ははは、寂しい奴だな？千冬さんは一人にならざるを得なかったわけだが……、お前はどつたるうな？」

「何が言いたいのかわからんが、群れて不意打ちでしか勝てない弱者がほざくな」

おおう、耳が痛い。

んで、理解する気は欠片も無し、か。

お兄ちゃん悲しいぜ。

そっちがそのつもりなら、こっちもこっするだけさ。

俺は両手を僅かに広げて言い放つ。

「おら、さつさとかかって来いよ。鈴とセシリアをやったみたいにな」

鈴たちの戦闘記録に残っていた、ラウラが挑発した時の行動。それをそのまま再現した。

「なめるな！」

今までの言葉による挑発、そしてこの戦いによる挑発で、こいつの感情の一部、怒りが剥き出しになる。

俺もあの二人をやられたのを、何とも思っていないわけじゃないんだよ……！

瞬時加速でもって俺へと接近してくる。

それに対し、背中グレネードを構えて発射した。

ドオン！と鈍い音がなり、ラウラの移動速度などを計算し予測地点へと撃ち込む、所謂偏差射撃を行う。

「そんな簡単に引つかかると思ったか！馬鹿め！」

お、やべえ。

フェイクだったか。

瞬時加速に見せかけたただの突撃。
まんまと接近を許してしまう。

「油断したな。感情に任せて動くとても考えたか！今度こそ捕まえ
たぞ……！」

停止結界から逃げようとしたが、瞬時加速により、至近距離へと近
づかれる。

「これで終わりだ！この距離で射撃武器は使えまい！」

六つのワイヤーブレードを射出、俺へと迫ってくる。

確かに射撃武器は使えない。

レーザーブレードを展開する暇も、ラビットスイッチ高速切替が使えない俺にはない
が、問題はない。

こいつに近づかれることが、俺の最大の攻撃力を持つ兵装の範囲内
にラウラが入ってくるこそが目的だったのだから。

「油断、ね。お前こそいいのか？俺に近づいて。企業連第三世代型
ISに搭載されている物のことを」

その言葉とともに、俺の体の、ISの周囲が球状の緑色に光りだす。
本来、防御目的に使われているPAを、プライマルアーマー大量のエネルギーを使って
攻撃性を持たせる。

アサルトアーマー
「AA……！」

それを見たラウラはすぐに範囲内から離脱しようとする。

「甘い……、範囲から逃れられないさ！捕まったのは俺じゃな

い、お前だ！」

PAのエネルギー粒子を暴発するほどに供給、一気にパージし爆発させる事で自機を中心としたエネルギー爆発を起こす兵器、アサルトアーマー。

トーラスの変体科学者が作ったものだ。

そして、緑色の閃光が、アリーナを満たした……。

アリーナの観客席にいる人たちも、その閃光をさえぎるように手を翳したりしている。

そして光が収まる。

「……つぐ。これがAAか……。だが仕留め切れなかったな？」

アサルトアーマー

……ツチ、若干後退されたせいでダメージが減衰したか。

AAは、自機から離れれば離れるほど、その威力は激減していく。そしてこれの欠点がもう二つある。

「正直ここまで削られるとは思っていなかったが、お前のシールドエネルギーも削れては意味がないな」

そう、それである。

AAを発動すると、俺のシールドエネルギーも減るのだ。

未だ実験兵器で、データが取りきれているわけではないのだ。

つまりは、まだ完成していないというのが欠点の一つ。

そしてもう一つの欠点。

使用後はPAが消える、ということだった。

大量のエネルギーを消費するこれは一瞬にして大量に消費するため、エネルギーバイパスなどに多大な負荷がかかり、一時的に展開が不可能になるのだ。

「だが、これで終わりだ！」

そういつてレールカノンを俺に向け、ロックオンしてくる。確かに、これはまずい状況だ。だが、

「余所見なんて、余裕だね？ シールドエネルギーも結構減ってるのに」

「っ！？」

そう、この戦いは、タッグである。

もう一人の方を倒し終えたシャルルが、ラウラへと接近していたのだ。

それも、訓練でも使っていなかった瞬時加速を用いて。

「それがどうした！？ このシュヴァルツエア・レーゲンは第二世代如きの火力では墜とせん！」

あまいな、シャルルの機体のことも失念してるか。

「だったら、単純な攻撃力ならどう？」

そしてシールドの装甲をパージするシャルル。

第二代機最大の威力を持つとまで言われ、盾の中に隠してあったそれを。

元はアルゼブラ社が開発した武装をデュノア社が改修し、ブレンゼット基本装備としたもの。

正直攻撃力だけならアルゼブラのほうが上なんだがな。

「『シールド・ピアース 盾殺し』……！おおおお！」

それを見たラウラが、AAを発動させたときと同じ焦りの表情を
する。

鬼の形相、といっても過言ではない。

停止結界を発動しようとする。

「おっと、俺を忘れられたら困るな？」

そして、右手のハイレーザーライフルをいつもの『051ANNR』
、重ライフルへと変え、射撃する。

無防備な背中を晒していたラウラはそれをまともに食らう。

「がつ！？」

「……お前は停止結界を発動する瞬間、左手を若干後ろへ下げる。
元々色素の薄いその目はさらに赤みを増す」

数度の停止結界発動の瞬間、必ずその行動と変化があった。

「この勝負、俺一人じゃまず勝てなかつただろうよ。だからこそ、
タッグという戦いにおいてワンマンに走ったお前の、連携をとらな
かつたお前の負けだ」

一瞬、シャルルが見惚れるような笑みを浮かべる。
断罪の、罪深いその笑みを。

スガンッ！

「ぐうつ！？」

そしてその極刑の杭がラウラへと叩き込まれる。
絶対防御を発動させて防ぐもエネルギーをこっそり奪われる。
だが、三発打ち込まれたとき、IS強制解除の兆候が見えたとき、
それは起こった。

「凄いな、流も、デュノアも。よもや二週間と少しの時間であそこ
までの連携が取れるとは」

「ほんとだよな」

今、俺と篤、その他大勢は控え室で流たちの試合を見ていた。

「あれはデュノアさんが合わせているだけではありませんわ。経験
の少ない流さんがシャルルさんの行動の障害とならないようにして
いるのもあそこまでの連携が取れている理由ですわね」

そうセシリアが解説する。

流石に代表候補生だ、俺じゃそんなことまったくわからなかった。

「ま、なににせよこれで勝負は決まったわね。パイルバンカー、『
グレイ・スケール
灰色の鱗』は正直、パクリだけど威力は本物。あれをまともに食ら
つたら防御型のISでもひとたまりもないわ」

そんなに凄い威力なのか。

まあ、勝ったんだからいつか。

・・・俺が倒したい、とは思っていたんだが。

「!?!?何だあれは!」

そんな勝負はもはや決まった、そんな雰囲気の時だった。

「セカンドシフト二次移行・・・?でもあれは」

ラウラのISが変形しだしたのだ。

グニャグニャと、スライムのように変形し、悲鳴を上げるラウラを飲み込んでゆく。

激しい電撃が、シャルルを弾き飛ばす。

それは悪だった。

純粹な悪、悪色と言ってもいい。

そしてそれを見たとき、俺は駆け出していた。

・・・ふざけやがって!

「あ、ちょ、一夏!?!どこ行くのよ!?!」

「っう、一対何が・・・?」

「・・・、ヴァルキリー・トレースシステム・・・」

「え?」

「ふざけやがって、ふざけやがってふざけやがって!」

あんな物を、あんな醜いものを持ち出してくるドイツのクソどもに反吐がでる……!

「な、流？」

「つつ！悪い、頭に血上った」

粘土人形のようなそれは、ボディラインをラウラそのままに表面化した少女のそれだった。

そしてその手に持つのは……、『雪片』。
……ここは俺の出番じゃない、か。

「と、とりあえず流、ピットに戻ろう？放送でも教師の人たちがくるって言ってたし」

「いや、俺はここにいる」

「え？」

「この戦いの結末を、見届ける必要が、俺にはある」

「で、でも、僕も流もエネルギーはほとんど残ってないよ？」

「ああ、だから……任せたぞ一夏。ぶっ飛ばせ」

「応！」

黒いナニかへと向かっていく一夏。

その光景は……、紛い物の千冬さんと戦っているようだった。

千冬さんの動きを機械的な動きで再現したそれ。

だが、心を伴わない刀など、クソの役にも立たない。

心が、例え怒りだろつと、負の感情だろつと、感情がこもっているからこそ、その力を発揮できるのだ。

ゆえに、

一夏が『零落白夜』を展開する。

それを最小限の大きさに、威力も長さも要らない、刀の長さに。

一夏が、

それを握りなおして突撃し、

負けることなど、

敵の攻撃を交わし、

万が一にも、

『一閃二断の構え』でもって切り裂く。

有り得るはずがない。

そうして、真つ二つに割れるISの中から出てくるラウラ。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ。流達がやってくれたしな」

「……お？あいつら、何か意思のやり取りしてるな……？」

まあ、しかし、勝負は結局有耶無耶に、心の決意も曖昧に……か。

強さとは、何なのか。

私が相対した男が言っていた強さとは。

『流の中での強さが何なのかは、俺にもわからないけど、大体はわかるぜ。心のあり方、要は自分はどうありたいのかを常に思うことじゃないかって思ってる』

ならば、なぜお前達はこんなにも強い・・・？

『それこそ簡単だ。俺も、流も、強くありたいからさ。そして誰かのために戦ってみたんだ。だから、ラウラ・ボーデヴィツヒ、お前も守ってやるよ』

ああ、教官、あなた達は卑怯だ。

こんなにも、こんなにも私の心を揺さぶるのだから・・・。
こいつの前では、私はただの女だということを認識させられるのだから・・・。

第十八話 戦いは・・・曖昧に（後書き）

あとがき

遅れた理由。

ごめん、書く気起きなかったんだ。

小説書くのに、『書きたい』ではなく、『書かなくてはいけない』
になったらだめだと思っんですよね。

商業誌はどうかはちよつとわかりませんが。

書きたいことを書くから楽しいのであって、書かなくてはいけない
ものではないのです。

後者だと元からつまらない文がさらに駄文になる気がするんですよ
ね・・・、私の場合。

幕間 お茶会は・・・何それ怖い（前書き）

うん。

ACやってない人は全くわからない会話ですよね。
まあ、伏線だと思っと思ってください。

幕間 お茶会は・・・何それ怖い

『あのドイツが、新型機にVTシステムを？』

『はい、間違いありません、ローディー様。企業連は送られてきた情報の精度を確認しています』

『・・・』

『またドイツ・・・か。あのブリュンヒルデの弟の誘拐事件といい今回のことといい、被害そのものは軽微だったのは幸いか』

『情報によればシュバルツエア・レーゲンにVTシステムを発動させるほどのダメージを与えたのが篠ノ之流様、VTシステムが発動した同機を機能停止にしたのが織斑一夏様となっています』

『所詮は紛い物のシステム。本来、そういうものだろう』

『それにあのブリュンヒルデの弟か、中々どうしてやるようだな。あの女がISに乗らなくなっただけからというものつまらん相手しかない。できれば戦ってみたいものだが』

『アンジェか、相変わらずの戦闘狂だな。ベルリオーズはどうした？』

『奴なら最近多発している例のIS強奪者の迎撃に向かったよ。そっついうお前はレオハルトの代理か？ジェラルド』

『ああ、政府へと事態の糾弾に向かった。今回のことは我が社もア

ルドラマも関与していないからな』

『とにかく最悪の事態は避けられた。最低限の目標は達成している。議題はまだある。例の、IS強奪の件だ』

『IS強奪か。最近でいえばアメリカの『アラクネ』、イギリスのブルー・ティアーズ二号機『サイレント・ゼフィルス』あたりか』

『その二機を奪ったのは亡国企業ファントムタスケとのことです。強奪の現場にはマグリブ解放戦線所属、通称『砂漠の狼』アマジীগ及びその搭乗ISが確認されています』

『マグリブ解放戦線も、例の亡国企業に合流したとの情報もある。全て撃退してはいるが、企業連の施設にも攻撃を仕掛けているらしいな』

『亡国の企業か。打つ手なし、全て不明、いいようにやられるのは管理者の存在意義が問われるだろう』

『その通りだ。ルールを守れないのであれば、例外を除いて静かに退場してもらおう他はない。それが亡国企業であれ、政治家であれ』

幕間 お茶会は・・・何それ怖い（後書き）

A C f a名物、カレードお茶会でした。

結局、リンクスは登場させる・・・かもね？

第十九話 戦いの後は・・・がっかりする（前書き）

まさかの1ヶ月放置とか・・・、ねーよ。

さーせん、いろいろ立て込んで執筆できなかったでござる。

第2巻が終わったら、この小説での企業連の多少の説明と、過去話、つまりは・話と幕間を一つ書く予定です。

合計3つ書かなきゃいけないとか死ぬるw

第十九話 戦いの後は・・・がっかりする

戦いを終えた俺たちはどうなったかというところ。

「な・・・、流、大丈夫？なんか肉がそげ落ちて骨とか浮き出そうな勢いだよ！？」

「お、おい。流、しっかりしろ」

「大丈夫だ、問題ない。この赤い川を渡ればいいんだろ？血みたいに真っ赤だぜ！」

川の向こうで家の向かいに住んでいたが、ポツクリ逝ったじいさんが手を振ってるな。

ん？何？こっちにおいで？

おk把握。

「さて！その川は渡っちゃいけない川だー！」

絶賛死にかけていた。

・・・主に俺が。

多かれ少なかれ、見ていた女子や、シャルルにがっかりされたのはい言うまでもない。

ぎゃふん。

「死ぬかと思った」

いや結構マジで。

「どつなることかと思ったけど、無事で何よりだ」

「ほんと、びっくりしたよ」

そう、事の発端は、俺がISを降りてからである。

ぶつちやけ、ただの腹が減った？というかエネルギー使いすぎただけなのだが。

今回問題なのがいくつかある。

一つ目にISに乗ったことは言わずもがな、二つ目にナノマシンの稼働率の大幅な上昇、最後に長時間乗ってたこと。

これらがすべて合わさり、ISから降りた直後は大丈夫だったのだが、そのうち死に掛けるようになった。

その結果が冒頭の出来事へと向かうことになったのである。

「あー、ま、迷惑かけて悪かったな。にしても、予想通りトーナメントは中止か」

シユヴァルツエア・レーゲンに搭載されていたアラスカ条約にも禁止されているシステム。

かつてモンド・グロツソでその力を知らしめた『ブリュンヒルデ』の動きを模倣させるシステム。

ヴァルキリー・トレース
VTシステム。

今回のそれは第一回モンド・グロツソの覇者の動きを模したもので、つまりは千冬さんの動きをトレースしたものだ。

それは行動の補助などを目的とされて開発されたものではなく、搭乗者の意思も尊厳も、すべてを無視し、文字通り、ヴァルキリーの

如き動きをさせるシステム。

・・・今思い出すだけでも忌々しい。

あんなシステムを使ってくるとは・・・、一夏の誘拐のことといい見下げ果てたな。

おそらく、国の独断で積んだのであろう。

・・・まあ、多分姉さん辺りが人が死なない程度にいろいろやっつんだろうから特に気に留める必要もないが・・・。

「流とシャルルの予想通りになったな」

「そうだねえ。あ、一夏、しょうゆとって」

一夏がしょうゆを受け取っている姿をみて、何故か俺の遊び心が刺激される。

思い立ったが吉日。

行動あるのみ。

「ま、だろつよ。あ、手が滑って大量の一味が一夏のラーメンに―
(棒)」

「ぎゃああああ!？俺のラーメンが真っ赤に!？」

「あはは・・・」

え？わざとやったわけじゃないか。

ハハハハハ。

試合の直後、つまりは死に掛ける直前まで、教師陣から事情聴取があった。

当事者だったのだから仕様が無いのだが。

飯も早々に食い終わった俺たちを待ち受けていたのは、

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え」

「交際・・・無効」

「・・・うわああああん！」

死屍累々。

まるですべてを投げ打ってまで戦いに身を投じたというのに、何もすることなく終わったみたいなのを囲気を出している数十名の女子の屍が転がっていた。

はてには泣きながら逃げ出す・・・、何から逃げているのかは不明だが逃げ出す始末。

「ま、一夏？女子が摩訶不思議なのはお前だけだから。俺ら一緒にすんなよ？」

「俺口に出した!？」

お前の考えていることなどお見通しなのだよ。

そしてその中には我が妹、箒もいた。

何か口から魂みたいなの絶対に出る外には出てはいけなものが出ている。

あー、そういえば事の発端はお前だったね、あの約束。

そしてその姿を見て女子たちの様子があれだったのもなんとなく想像がつく。

おそらく、あの場面を見た女子が尾ひれをつけて広めていったのだと思われる。

詳細は不明ではあるのだが。

その様子に一夏も気づいたのか、箒に近寄っていった。

「箒、あの約束のことなんだけど」

体。ピクリと反応させる。

即座に魂が体の中に戻って行ったのは目の錯覚ではないだろう。どうやら、まだ死んでいなかったらしい。

「優勝とかはしてないけど、付き合ってもいいぞ」

この場面だけ聞くと、恋仲になってもいいてきな意味に聞こえるのだが。

「・・・なに？」

「だから、付き合ってもいいぞって」

とりあえずシャルルと一緒に静観する。シャルルも薄々気づいているようだ。

「な、なぜだ？理由を聞こうじゃないか」

顔から嬉しさが滲み出ている筈。

その顔は若干赤みが差している。

・・・普通ここまで露骨な態度とか取られたらある程度その気持ちに気がつくと思うんだけどなあ。

この時こんな思考をしていた俺だが、他の奴らから俺が今向けている視線と似たような視線を向けられることがあったりした。

そしてそれを特に気にしてもいなかったりする俺がいたことには気付いていない。

文字通りそのことに気付いていなかったからだが。

「幼馴染の頼みだしな、付き合っさ」

「そ、そうか！じゃあ」

「買い物ぐらい」

瞬間空気が凍った。

そう、いつだったか本当に付き合うのか？と聞いたとき、付き合うのを買い物だと思っていた馬鹿。

まあ、おもしろそうだったので訂正はしなかったのだが。

そして筈の顔は羅刹の表情だった。

むしろ阿修羅？

なんかゴゴゴゴゴゴとかドドドドドドとかいう効果音が聞こえてきそうな雰囲気である。

「そんなことだろうと思ったわ！」

そしてギャグ補正が原因なのか？

いつだったかのように、俺が反応できない速度で一夏を殴りつける。ご丁寧に捻りを加えて体重を乗せた正拳の一撃だった。

「ぐはぁっ！」

「何かあいつブラック墨すとか考えてそうだよな」

「あー、なんかわかるかも」

そんな光景を見てこんな会話をもらす俺とシャルル。

「ふんっ！」

どごおっ！という音とともに箒のつま先が一夏の鳩尾へとクリーンヒットする。

ちなみにそのとき箒のパンツが見えたが、清楚な白だった。

一夏め、見やがったな、責任取れよ？

その場に崩れ落ちる一夏。

おそらく、しばらく動けないだろう。

ただの自業自得だが。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときが多々、あるよね」

「むしろそれを無意識にやってるんだから尚更ひどいな。そんなことが稀によくある」

「な、何？どういう意味だ、それは。俺は別に何もしてないじゃないか。しかも稀にあるのかよくあるのかどっちなんだ・・・」

いや、それに気づけないからお前はニブチンなんだよ。

というか何もしてないなら何もしてないでそれはどうかと。

一夏が復活したのはそれからきっかり十五分後。

一夏はまだ痛むのだろう腹をさすりながら俺、シャルルと一緒に飯を食う。

「あ、そうだ。流に聞きたいことがあったんだ」

「んお？どうした？」

二人が食べ終わったところだった。

二人が飯を食べ終わっているというのに、大量の食物を胃に入れている俺。

その俺の食事を邪魔するということとはよほどのことなんだろうな？
さもなければ食い物の恨み、思い知ることになるだろう。

「あの、ラウラの変形したIS倒したときのことなんだけどな。ISで会話ってできるのか？何か、プライベート・チャネルとは違う二人だけの空間みたいなどころでの会話だったんだが・・・」

「・・・何？」

思わず口に食べ物を運ぶのを止める。

今、こいつが言った言葉は俺にとってそれほどに予想外の言葉だったのだ。

なるほど、あの変形ISを撃破したときに感じた信号はそれか・・・。

大体的見当はつくし、姉さんも何か言っただけはいたのだが。

ナノマシンだの調整中だったゆえにそこまで覚えているわけじゃないので、確証はない。

しかし、俺にとっては結構謎の多い現象だったりするので、いまだに把握していない。

「姉さんが言っただけ記憶あるな。IS操縦者同士の波長が合うと、起きる現象らしい。姉さんにも良くわかってないらしいが、やろうと思えば把握するのなんて簡単だろう」

「前に何かのインタビューでも言っただね。IS自体、自己進化するように設定してあるから、篠ノ之博士でも全部把握しているわけではないって。けど、流がそう言うんなら、実際判明させることはできるんだろうね」

あの人興味あることにはとことん首突っ込むくせにどうでもいいこ

とは何にもしないからなあ〜・・・。
つまり、あの人にとって、自分が心血を注いで作ったモノの全容を把握することなど、非常にどうでもいいことなのだ。
自分にとって、いつでもどうとでもなる物であるがゆえに。
そんな姉さんのテキストなどところに痺れる憧れるう。
こともないかもしれない。
が、それよりも何よりも今、俺は非常に気になることが一つ。

「と、言うかお前。二人きりで、二人だけの空間で、話を、してたのか。ボーデヴィッツヒと」

「い、いや、そうだけど。言い方に棘を感じるんだが・・・」

棘で済めばいいけどな。

自分で言うておいて変な言い回しではあるが。

ここで問題なのは、それを聞いて行動を起こすのが俺ではなく、幕たちだということ。

まあこれはさして重要でもない。

言わなければ問題ないのだから。

厄介なのは、こいつが基本的に男の敵だということ。
つまりは。

(・・・なんか、フラグ立ててそうだよな〜・・・)

ということである。

一夏が関わった様々なイベントが、過去に多々起きたが、そんなイベントが発生した場合、一つの例外もなく女子は一夏に惚れていった。

もはやどこぞの世界風に言うならフラグ建築A+、効果は女性に対して見境なしにフラグを立てていくことができる技能。

ほとんど呪いの類であり、無意識で発動する。
みたいな。

二槍使いの騎士でも真つ青な技能だ。
そのどれもに死亡フラグがないというのだから、弾とか中学の連中
がキレルのも頷けるものである。

「一夏つて、節操なしだよな」

「な、なんでそうなるんだよ！」

まったくもってシャルルの言うとおりである。

俺たちはねえ、という風に顔をあわせる。

一夏よ、否定できる要素など、何一つないぞ？

ようやく食べ終わった俺たちは、寮の部屋へと戻っていた。

「あ、織斑君に篠ノ之君、それにデュノア君。ここにいましたか、
先程はお疲れ様でした。・・・特に篠ノ之君は一時はどうなること
かと」

いやほんとだよ。

正直申し訳ない気持ちでいっばいだよ。

「山田先生こそ、手記ばかりで疲れてはいませんか？」

ほう、流石はシャルル。

気遣いも忘れないとは・・・、紳士だな。

あ、淑女か。

ローゼンタールが欲しがりそうな人材である。

「いえいえ、織斑先生が国家代表だったとき、そういった仕事も

していたので、地味な活動というのは得意なんです。心配には及びません、先生ですから！」

腰に両手をあて、えっへんと胸を張る先生。

ワオ、大きな胸が揺れる揺れる。

思わず視線がそれに釣られる。

「流、いったい何処を見てるのかな？」

ギギギ、と首を声かしたほうに向ける。

何やら黒い笑顔をしたシャルルさんが。

何、何故に俺がそんなの見てたら不機嫌になるのか。

「ん？流がどうかしたのか？」

ナイス一夏。

今回ばかりはお前のKYに感謝するぜ！

「え？篠ノ之君、どうかしたんですか？」

「あー、いえ、特に何もないので大丈夫です」

「そうですね」

頼られなかったからなのか、若干しょんぼりする山田先生。そして、何かを思い出したのか、あっ、という声を上げる。

「思い出しました、お三方に朗報があつたんです！」

両手を握り締め、声高々にその報を俺たちに伝える。

「なんと今日から男子も大浴場が使用できるようになったんです！」
お、やっとか。

最近シャワーばかりで少しうんざりしてたんだよな。
・・・って、ん？何か忘れてる気がするな・・・。

「おお！そんなんですか！？もう少し遅くなるものとはかり」

曰く、今日はボイラー点検の日だったで入れなかったのだが、点検自体はすでに終わっているんで、俺たちに入ってもらおう、ということらしい。

「それじゃ、早速行こうぜ、流、シャルル」

と、俺たちを誘う一夏。

それを聞いた俺はようやく、忘れていたものに気がついた。

・・・記憶力はあるつもりなんだが。

「ああ、えーっと・・・、その」

シャルルは、男ではなく、女である。

もちろん、俺たちと一緒にいることなど、まあ、できないだろう。
ここはフォローせねばなるまい。

「ん、一夏、シャルルは用事あるらしくってな。時間もかかるし、
後で入りたいらしい。俺もちょっと疲れてるから少し休憩してから
入るよ。そういうことでいいですか？山田先生」

「はいー、構いませんよー」

「そつか。んじゃ先に行ってるぜ」

ちよろいな、一夏。

所詮一夏は一夏ってことか、ふつ。

その後、一夏が歩いている最中、「・・・何か誰かに馬鹿にされて
いる気が・・・」と、呟きをもらしたのは、呟きをもらした本人以
外、知る由もない。

そして、部屋に戻ってきた俺たち。

・・・さて、どうするか。

シャルルが入れなかった場合、俺も入るといふのは気が引ける。
そんな考えをしていたからか、思案顔になっていたのだろう。

「流、行つてきなよ。一夏と流があがったら僕も行くから」

「あ？あー、それしかないか。俺も久しぶりに入りたかったし」

一夏の家に戻ったときも会ったが、日帰りだったしな。
よし、行くか。

「んじゃ、お言葉に甘えて先に行ってるよ。上がったら連絡するわ」

ISはこういうときに便利だな。
通信できるし。

・・・使用方法是本来の役割とは大いに間違っているが。

「うん。いつてらっしやい」

シャルルの声を背に、大浴場へと向かう。

一夏ほどじゃないが、風呂は好きだからな。

・・・入れるようになったのはあの頃からだ。が、本来ならナノマシンのおかげで体とか洗う必要もないんだけどネ。そこは気分である。さて、行きますか。そしてタラタラと歩き、大浴場に到着する。服を脱いで、タオルをもって大浴場への扉を開けた。

「ヒヤッハー！お湯だー！」

一度扉を閉める。
開ける。

「湯船は消毒だー！」

・・・とても楽しそうに湯船にダイビングしている一夏がいた。そしてすでに消毒済みだと思っただが、そこは突っ込んではいけな
いのだろう。
そしていくら一人つつつても、マナー守ろうぜ。
お前は小学生か。

「あー、気持ちい・・・い・・・」

ようやく、俺に気付く一夏。

俺のほうに顔を向けて、固まっている。

「あ、あー。お、遅かったじゃないか、流・・・言葉は不要か」

「ああ、ちよつとな。で、消毒は続けないのか？世紀末のヤンキー」
言葉？ええ、確かに不要ですね。

「い、いや、これは違うんだ。そのだな」

「言葉は不要なんだろう？じゃあ消毒の続きをどうぞ」

「うぐう」

そんなやりとりをし、普通に入っていた俺たち。そのうち一夏も久しぶりの風呂を堪能したのか、風呂をあがっていた。

さて、俺ももう少ししたら上がるかな。

そろそろ上がるうかと、思っていたときだった。

カラカラカラ……

と、扉が開く音がした。

んん？

上がった一夏が入ってくるとは考えにくい。

しかし女子が突撃してくる、というのも恐らくないだろう。いたら怖いわ。

じゃあ誰が……、いや、待て。

今現在この大浴場入ることができるのは、俺、一夏にシャルルだけ。そして今、俺はここで入っているし、本人なのでもちろん除外、風呂好きである一夏だが、数分程度で風呂に入りなおすほどではない。なので、消去法で行くと……。

「お邪魔します……」

チャプンと、湯船に人の体が浸かる音がする。

その女性的な声は非常に聞き覚えのある声だった。

つい最近、共に生活している人間の声の波長だった。

「えー、あー、いろいろと言いたいことはあるんだが……。何この状況？」

な、何を言ってるかわからねえと思うがありのまま起こったことを話すぜ。

大浴場の湯船に浸かっていたと思ったら、隣からシャルルの声が聞こえてきたんだ。

NTRだとかヤンデレだとかそんなチャチなあもんじゃねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

恐る恐る、声の発生源へと視線を向ける。

「う……。あんまり見ないでほしいな。流のえつち……」

「は？あ、ああ、すまん」

いや、なんでだよ。

俺が乱入して来たならともかく……。

謝ってから、なぜ？謝ったのかを疑問に思った。

とはいえ、こういう場合、基本悪者は男である。

この女尊男卑の世の中じゃ尚更だ。

そしてその体には、タオルが巻かれているだけであり、ボディラインはくつきりと見えている。

お湯で濡れているということもあり、肌も見えないこともないかもしれない。

そして、いくら反射速度の速い俺としても、異常な速度で急旋回した。

「……………」

互いに背中合わせになる。

正直、気恥ずかしいので、黙りこくってしまっ
おそらく、シャルルも同じだろう。
・・・よし。

「あー、俺、もう風呂も堪能したし、上がるわ」

うん、この空気に耐えられない。

一夏じゃあるまいし。

そう考え、上がるうとした。
したのだが、

「あ、ま、待って！」

シャルルに呼び止められた。

結構大声だったので、驚いた。

「は、話があるんだ。大事なことだし、流には聞いてほしいかな・
・って」

「お、おう」

思わずどもってしまっ。

「それで、ね。僕、この学園に残るよ。流がいてもいいって、言っ
てくれたし」

ふむ、それはよかった。

友人が消えるというのはさびしいものだからな。

「それなら、これからもよろしくな？シャルル・・・って、あ」

「??どうしたの？」

すっかり聞くのを忘れていた。

それを聞くのは重要なことだというのに。

「いや、聞き忘れたことあったからさ。お前、本当の名前は何て言うんだ？シャルルは男性名だから、多分だが偽名だろ？」

そう、名前を聞くのを忘れていたのだ。

名前、というのは非常に重要なものでもある。

言霊、というものがあるように、人の名前を用いて呪っていたように、非常に重要なものだ。

いつまでも偽名を呼び続けるというのは個人的な感情ではあるが嫌だった。

「あ・・・あ、うん。僕の名前はね、シャルロットって言うんだ。それが、お母さんがくれた本当の名前だよ」

少しの驚きの後、うれしそうに自分の名前を言うシャルル、いや、シャルロットか。

あー、しかしみんなの前で言うわけにはいかんのよな。

「二人だけのときでいいから、本当の名前で呼んでほしいな」

お？おお、二人のときだけってことはほかに誰もいないときか。

あー、しかしそれだと混同しそうで面倒くさそうだな。

俺が言い間違えることはまずないとしても。

「ん〜、シャルでいいか？二人のときじゃなくても、呼べるしな」

「え？うん、いいよ」

あ、なんか微妙にがっかりしてる？

ま、いいか。

「っと、流石に上がるとする。熱こもると後々大変なんだ」

冷水を浴びてから、と付け加えて。

「わかった。僕はもう少し堪能してくよ」

「あいよ」

さて、まだやることがあるんだよな〜。

厄介といえば厄介なことが。

・・・俺としては絶対に聞かなくてはいけないことが。

たとえ、それを聞くのが無意味だったとしてもあれを認めるわけにはいかないのだ。

月の、満月の出ている美しいとも言える夜だった。

ついさっきまでの、トーナメントの試合が始まる前までのわたしならば絶対にしない思考だ。

余裕ができたのか、それとも自分が多少なりともかわったからなのか。どちらかは不明だが、ただひとつ言えるのは、今見ている月は綺麗ということだった。なぜかはわからないが、寝てはいけない気がした。そしてそれはすぐに判明した。

「よお。こんな時間で悪いな？」

聞こえてくる男の声。

この学園にいる男など二人、そして聞こえてきた声は白い風貌でありながら黒い機体を操る方の男だった。

・・・思えば口を開けば互いに挑発口調だった記憶しかない。

「いや、かまわん。寝付けなかったからな・・・」

「ん、そうか。ま、ここに来たのは聞きたいことがあってな・・・他でもない、VTシステムのことだ」

VTシステム。

その言葉が出た途端、体が少し反応してしまう。

見当はついていたとはいえ、実際に言われると反応してしまう。

「・・・。質問は一つだ。あのシステムはお前の意思で搭載したのか？」

少しの間後、これもやはり予想していた質問が来た。

「否、だ」

語調を強めて言い返す。

あんなものを搭載するなど、教官への侮辱でしかない。

「・・・はあ。じゃ、いいや。聞きたいのはそれだけ。こんな時間に悪かったな」

剣呑ともいえる空気を発していた男から圧力が消える。

そう言っただけ聞かれ、こちらは聞きたいことを聞いていないのだ。

「待ってくれ。・・・聞きたいことが・・・ある」

そう言うと、ぴたりと動きを止めてこちらへと体を向ける。

何も言わないのを見て、こちらの言葉を待っていると推測。

話を続ける。

「お前たちにとって、織斑教官とは、どんな存在だ？」

「よりによってそんな質問・・・か。表面だけで言うなら、強くて、俺も一夏も尊敬している人だ」

だが、と言っ。

「俺と一夏が尊敬しているのはそれだけじゃない。あの人は家族思いというか身内思いというか、強さだけが全ての人じゃない。だからこそ、あの人の強さを尊敬しているんだ」

ああ・・・、こいつも、織斑一夏も、私と同じだ。

私と同じ、あの人が好きで尊敬の対象なのだ。

「……だから、俺はあの人のことを尊敬してるお前は嫌いじゃない。今まではあの人の一面しか見てなかっただろうが、これからは他の側面も見れるんだ。じっくり観察するといいさ、ラウラ」

「……ああ、やはりこの学園にいるのも、悪くはない。ともかくは、一度ゆっくり話してみたいと思う。」

「ああ……、そうさせてもらおう。……流」

今夜は、ゆっくりと寝ることができそうだ。
月は相変わらず、私を照らしていた。

第十九話 戦いの後は・・・がっかりする（後書き）

あとがき

ひゃっはー、最近、暑くて死にそうです。

北海道な俺は暑さに弱いのです・・・。

それはそうと、親知らず、というものが歯にはあるのですが、それを抜いたのでとても痛い。

そういつたことが重なって今月ほとんど執筆できませんでした。スマンです。

第二十話 本来は・・・一夏の役目（前書き）

私にしては比較的速い更新となりました。

これが終わったら幕間、企業連の解説などを書こうと思います。

後、一つ迷っていることがあるのですが、三巻からの銀の福音編のことです。

このまま原作沿いに行こうか、ちよいとオリジナルの展開にしようか、迷っているのです。

大本の流れは変わらないのですが。

なので感想でいいのでどっちが良いか書いてくれるとありがたいです。

原作沿いに銀の福音ルートにするのであれば、EF話として、オリジナル展開のほうを書きたいと思っています。

第二十話 本来は・・・一夏の役目

翌日、朝食を終えた俺に『先に行つて』と、言ってきたシャル。遅れてくるのかと思えばHRの時間にもいなかった。

ラウラの奴もいないが、事情聴取とか怪我とか、その辺の理由だろうが、シャルの理由は皆目見当もつかない。

とか何とか考え事していると、ふらふらし、肉体的にというよりも、精神的に疲れていそうな山田先生が入ってきた。

「み、皆さん、おはようございます・・・」

もうとんでもないダメージ受けたって表情だった。

ちなみに一夏、俺は目玉焼きは半熟派です。

山田先生は俺へと怒っているような恨みがましいような視線を向けてくる。

「篠ノ之君に織斑君、何を考えているかはわかりませんが、私を子ども扱いしているのはわかります。はあ・・・、また書類仕事・・・」

一体全体何事？

というか書類仕事お疲れ様です。

私怒ってますという顔だというのに覇気がなく、いつも以上に子供っぽく見える。

そしてその非難の視線は若干俺へと向けられているようにも思える。

「もう・・・。えー、今日はですね・・・、皆さんに転校生の紹介というか・・・。すでに紹介は済んでいるんですが」

転校生？

んな情報一つも・・・、んん？

脳内でめまぐるしくもないかもしれない量の情報が飛び交う。

俺へと向けられた山田先生の視線。

紹介は済んでいるという発言。

他いくつかの情報から導き出される事象。

は？いやいやまさか。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

・・・oh。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

ぺこり、とスカート姿のシャルがお辞儀をする。

その様は容姿と彼女自身の丁寧さから非常に様になっていた。

ではなく、一夏はもちろん、クラス中の女子、筈までもがポカンとしていた。

そして俺も例外ではなく。

この時点で先生の恨みがましい視線などの全てが完全に理解できた。

そして次に起こるであろう事柄も、簡単に想像できることは馬鹿の一夏でも同じだろう。

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「というか篠ノ之君、同室だから知らないってことは」

「もしかして篠ノ之君×デュノア君は現実だった！？性別はともか

く

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場つかったわよね？」

そしてその最後の一言が、全ての引き金となったのは想像に難しくない。

ざわ・・・ざわざわ・・・。

などというどこぞの賭け事の漫画で起きるようなどよめきではなく、文字通りの喧騒に包まれる。

とりあえず、いやな予感というかある種の死亡フラグというか、とりあえずこの状況は不味い。

バシーン！

「一夏あああつ！！！」

烈火の気合とともにドアを吹き飛ばして現れる鈴。

予想通りというかなんというか、ISを展開している。

「死ね！！！！！」

両肩の衝撃砲がフルパワーで稼動しているのがわかる。

ここで殺人沙汰を起こすつもりかお前は。

というか射線上に俺が入ってるんですけど・・・！

ズドオオオン！

豪快な音ともに着弾したであろうその衝撃は、しかし俺たちに何の被害ももたらさなかった。

間に髪が一本、というわけではないのだが、間髪、俺たちの間に割り込んでいたのは、ラウラだった。

スペアパーツでも使ったのだろう、完全な形とは言えないがのIS
『シユバルツエア・レーゲン』をその身に纏っていた。
大型のレールカノンも展開されてはいないが動かすだけならば問題
はないのだろう。

おそらくは、AICで衝撃砲を防いだのであろう。

「よお、ラウラ。昨日の夜会ったときはどうなることかと思ったが、
元氣そうだな」

「ああ、久しぶりに熟睡できたようだな。体もほぼ全快だ」

そりゃあよかった。

そして、こちらを向いて一言。

「流、お前は私の友人だ。異論はあるか？」

・・・直球だな。

人間、ひとつのきっかけで変わるもの・・・か。
姉さんは興味の対象以外はどうでもいいと思っているし、興味の対
象になるものも非常に狭い。

故に人間なんてどうとも思っていないのだろう。

が、俺は向こうから近寄ってくるのであれば、対話をするし、多少
なりとも理解しようとする。

それが好意的であれ嫌悪していようが構わない。

「はは、まあ、これから宜しく頼む」

「ふん・・・」

少し照れたような様子のラウラ。

そんなところに萌えもなにも感じはしないが、絵にはなる。

「おおー、あれだけ険悪だった流とラウラが仲良しに。じゃあ俺もむぐっ!?!」

俺とラウラの様子を見て感心していた一夏。

その後と言おうとした言葉はなんだったのか、予想はできるが遮られた今では知る由もない。

キス、接吻、マウストゥーマウス。

今日の前行われているのは一夏と一夏を自分の目の前まで引き寄せたラウラのキスだった。

。。。だからどうして俺が反応できない速度の行動ができるんだよ。。。

ギャグ補正か？ギャグ補正なのか？

「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「。。。嫁？婿じゃなくて？」

いや、そういう問題ではなく。

ああ。。。やっぱりフラグ立ててたのか。

この女たらし。

お前混乱が360度回って冷静になつてるとか考えてるんだろっつが、単純に理解が追いついていないだけだ。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

何だその理屈。

確かに世にオタクだの変人だの呼ばれる奴は誰々が俺の嫁！とか言

つてるが日本人全員がそんなんだつたら変人の巣窟になる。
誰だそんな非常識教え込んだ奴、表出る。

「あ、あ、あ、アンタねえええええ！」

衝撃砲を再び展開する鈴。

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者だろ！？」

「アンタが全て悪いに決まってるでしょうが！この世の理よ！」

ああ、鈴の理屈に何となく納得できる俺がいる。

そうして脱出しようとする一夏に、刺客が襲い掛かる。

ビシユン！

一夏の鼻先をレーザーが掠める。

「一夏さん？どちらに行かれるので？わたくしどうしても話さなければならぬことがありますの。おほほほ……」

その手に握られているのは『スターライトmk?』。

もちろん人間相手に使っていいものではない。

代表候補生としてそれぐらい理解しているだろうが、感情がその常識を押しつける。

そうしてまた別の方向から包囲網からの脱出を試みようとする一夏だが。

ダンッ！

その進行方向に刀が突き立てられる。

「一夏、貴様、説明もせずに逃げるつもりか？」

「待て！説明を求めたいのは俺で　　！」

「聞く耳もたん！そして流！お前もだ！」

「っはあ！？」

まさかの飛び火！

「お前も知っていたんだろう！同罪だ！」

その考えは鈴にセシリアにも伝わっていく。

oh、ピンチじゃね？

さすがの俺もISの攻撃を生身で受けて無事で済むはずがなく。

逃げようとするのだが、それを遮るようにシャルがいた。

とつてもいい笑顔、天使みたいな笑顔だったのだが、後ろからは阿修羅すら幻視できた。

「えーっと、シャルロットさん？いったい何の御用で・・・？」

「流って、女の子が一人しかいなくて体が弱ってるような状況のときに、夜に一人で会いに行ったりするんだね。僕びっくりだよ」

その言葉とともにISを展開するシャル。

もはや金縛りにあつたように動けない。

その最強の武器はすでに展開されているので、武器を呼び出す必要などない。

左腕のシールドをパージするだけで、その凶悪な武器は使用できるのだから。

「あー、こんな役一夏がやるのが当たり前だったのになー」

「どういう意味だよそれって！ギャー！」

その言葉が俺たちの遺言だった。

その日、ホームルームは二人の男の絶叫と、千冬さんが来るまでやむことのない爆音と轟音を伴った衝撃が、クラス中に響き渡った。

夜のアリーナ。

朝にあんなことがあったにも拘わらず、懲りずに一人でこんなところに来たのには、もちろん理由がある。自分の半身、妹に呼ばれたからだ。

「んで、箒。ISのことだったか？」

「・・・ああ」

そう、どのような心変わりがあったのか。

姉が作ったものであるがゆえに嫌っていたISがほしい、そう言うてきたのだ。

そう思えるようになった理由はいくつかあるのだろうが、聞くのは野暮だった。

「そんなに欲しいか？お前だけの唯一ワンオフが。誰もが欲しいと望んでも専用機なんてものは簡単に手に入るものじゃないって、知ったるよな？ここに入学するだけでも大変だというのに」

倍率200倍を超えるIS学園。

そして国家でも数人しか持つことを許されない専用機。

俺や一夏のような特殊な例外を除いてすべての専用機持ちは自分の実力で手に入れたのだ。

「それでも・・・、欲しい。私だけが蚊帳の外で見ているだけなど・・・、もう御免だ」

決意は固い・・・ね。

いやいや、ははは。

嬉しくて笑みがこぼれるね。

しかし、ISが欲しいといっているが、問題があった。

「まあ、ぶつちやけると、企業連じゃお前の専用機は用意できない。ISのコアも余裕はなく、また、筈にあったISを作ることができない企業でもない。つまり。」

「お前だけのIS、つてのが作れないんだよ。自分の希望もなければ、要望もないんだろう？」

コクリと頷く筈。

「企業連のISはお前の能力を活かせるような機体は作れんからな。それに、頼むのなら、俺たち二人にとってはいるだろう？」

最後の発言を聞き、ピクリと反応する箒。

「連絡、とって見るよ。姉さんも待ってると思うぜ？」

「・・・わかった」

箒が電話を取り出すのを見て、背を向けて歩き出す。

・・・これで箒も専用機持ち、か。

あの時見たいにならないといいな？箒。

ふふふ、あはは。

一人しかいない空間なので隠す必要もないのだが、内心笑う。

「今日はいいい日だったなー。ちーちゃんとお話できただけじゃなく、ほーきちゃんとまでお話できるなんて」

目の前に鎮座する赤い物体を見る。

「君も心待ちでしょ？紅椿」

暗い空間で彼女は笑う。

狂ったように、狂気を孕んだ笑顔で。

とても愉快だというように。

「なっくんとお話できなかったのは残念だけど、まあ、今度会える

か

そうと決まれば早速準備だ。
ちよつどいい、舞台も行われるのだから。

「それに企業連、か。なつくんが目をつけただけのことはあるな。特定分野なら私すら凌駕しているなんて。ちよつと悔しいな。特にトーラスとかいうやつら」

その言葉が意味すること、全てのものに興味を持ち得ない彼女が企業連を多少なりとも認めているという事実。

「これから面白くなりそうだね？」

誰に聞いたでもなく。

ただただ彼女は虚空へと問いかけた。

イギリス、某所。

「お呼びですか？ワンターレン王大人」

おそらく18歳前後と思われるであろう少女がいた。
金色の髪を後ろで束ね、ポニーテールとしており、肌は雪のように
白い。

目は鮮やかな青。

問いかけられた人物は、老獪さを感じさせる人物だった。

「来たか、リリウム」

名を王小龍^{ワシヤオロン}。

本拠点をイギリスにおき、海洋拠点とも言える旗艦クイーンズラン
スや、大規模エネルギー施設、スフィアを所有している―BFF《
バーナードアンドフェリクスファンデーション》社の重鎮である。
その優れた政治手腕でもってイギリス政府にすら強い影響力を持っ
ており、BFFにおいても強い発言力を持っている。

「用件は一つだ。近いうちに企業連は篠ノ之博士の弟と直に話した
らしい」

それが彼女がイギリス国家代表リリウム・ウォルコットを呼び出し
た理由だった。

「はあ。それで、それが私にどのような？」

「ああ、何人かの人間を派遣する、ということになったのだがな。
今回、お前に行ってもらおう」

「しかし、よろしいのですか？曲りなりにも国家代表の私がこの国
を離れるというのは・・・」

「かまわん。何もここにいるのはお前だけではない。メアリー・シ
エリーやフランスカもいる。然したる問題はない。今すぐに、と
いうわけでもないからな」

「そこまで言うのであれば・・・。了解しました、お任せください、
王大人」

企業連も動き始める。

その行動の結果が何を起こすかはともかく。

「それと、王大人、篠ノ之様からの要件で、デュノア社の」

「というわけだ。G Aからはお前に行ってもらおう」

「了解よ、ローディー。日本って一度でいいから行って見たかったのよね。それに、流にも久しぶりに会いたいし」

彼女、緑髪にヒスイのような色の目をしている彼女の名前はメイ・

グリーンフィールド。

グローバルアーメンツ

G A社に所属するIS操縦者であり、国家代表候補生でもある。

「まあ、そこまで重要な話をするわけでもない。遊びに行くつもりでも構わんだろう」

彼女の名前はローディー。

非常に低いIS適正でありながらアメリカの国家代表の地位に立っており、G A社最強のIS操縦者でもある。

その実力からG A社の信頼は厚いが、G A社が他の企業連に所属している企業と比べてIS開発が遅れていることもあり、所詮はIS適正の低い粗製と言われている。

「今回行くのはお前にB F Fのリリウムだけだそうだ。オーメルも

インテリオルも忙しいらしい」

「ふーん、ま、いいわ。行けるんなら行くわ」

さも楽しみと言わんばかりの雰囲気。

事実、楽しむつもりなのだろう。

それを見てため息をつく。

（銀の福音にファンゲクエイク、か。国も焦りだしてきたな）

アメリカという国はイスラム教が盛んなアフリカ中東国家と折り合いが悪い。

だというのにイスラエルとの共同開発をする。

外聞もプライドも捨てたような行為。

長年、世界の軍事力のトップに立っただけに、それを維持したいというのがよくわかることだった。

（これから、なにが起こるやら）

老兵としての勘が言っていた。

何かが起こると。

幕間 説明は・・・主人公不在（前書き）

待たせたな、兄弟！

いや申し訳ありません。

試験だのの諸事情により、執筆できる時間が限られていたのと、説明する話だというのに過去最大の文章量になってしまったため、2ヶ月に放置してました。

そんだけ放置してたのにストーリーに進展なし・・・、どういこうとな。

幕間 説明は・・・主人公不在

トーナメントが全試合、とはいっても1回戦だけではあるが、すべて消化され、学校行事・林間学校が行われる日にちより少しだけ前の日。

いつものメンバーが、流を除いて全員が食堂にいた。

あの流が食事を後回しにするのも非常に珍しいのだが、曰く、

「企業連が何かそこそこ重要な連絡があるって言うからさ。学園外には出ないとは思うけどそれ処理するまで訓練とかも出来ない。何かやるんなら俺抜きで」

とのことだった。

様子から見てもとても面倒そうだった。

「企業連がね。正直あそこの奴らって何考えてるのかいまいちわからないのよね。変態技術者集団とか呼ばれてる企業とかもあるし」

変態技術者って・・・。

企業連って束さんと同類なのか？

「色々と勘ぐってしまう所はありますがわよね。表立ってそういったことをしているわけではありませんが、噂の絶えない方達ではありませんし」

懇意にしている流さんには悪いのですが、と付け足す。

確かに、流と企業連って仲良さそうだな。

技術提供したとか言ってたけど、具体的に何したのかイマイチ。

「正直、あんまり話してくれたりしなかったから、知らないんだよな。本人は聞かれなかったから言わなかっただけって言うてたけど」斜陽企業、つまりはさほど優良な企業ではなかった、という意味なのであるが、今現在においてそれほどの企業としての地位を確立している企業が、ISが出る以前の社会でも社会的地位が低いとは考えられないのだ。

それが、当時、束さんから教わったというISの最新に近い技術を与えられた、という理由だけで国家にすら強い影響力をもつようになるというのは並大抵の難易度ではないはず、というのが俺の考え。

「一夏にしては考えてるよね。情報も少ないのに」

それを言うと感じた声をかけられた。

「何気にひどい事言ってるよ……？シャルロット」

「普段のアンタ見てたら当たり前よ」

バツサリと鈴が俺を切り捨てる。

冪もセシリアも……、そんなにウンウンと頷かなくてもいいじゃないか……。

俺そんなにバカっぽいかな？

「この際だし、流はいないけど企業連について知っておいたほうがいいかな？一夏はどう？」

そして見事にスルーされる。

知りたいなら、自分の知りうる範囲で教えるということらしい。流から聞いて初めて知ったことも幾つかあるらしいが。

・・・確かにいい機会だよな。

どんなIS作ったりしてるのかっていうのも興味あるし。

何より流が、あいつらは腹黒い。とりあえず腹黒い。とか言っていたのも若干気になる。

あの流が腹黒いとか言うのもどうかと思われるが、あいつがそういうなら確かに腹黒いのだろう。

いつだったかの解説で流自身が説明するとか言っていた、が。

騙して悪いが・・・、仕事(中)なんでな、他の奴にやらせてもらおう、みたいな。

・・・何だか今すごいメタな考えをした気がする。

意識を切り替え、シャルロットへの説明に耳を傾ける。

「それじゃあまず、あんまり詳しくない一夏もいることだし、流から聞いたことも踏まえて、大まかなところから説明していくね」

俺はまったく知らず、冨も俺とほぼ同じ、鈴も中国は勢力圏ではなく、企業連に所属している企業がないために詳細を知っているわけではないし、セシリアも欧州地域の企業以外はあまり知らない。

流に直接話を聞き、デュノア社の一応の令嬢であったがゆえに、企業連のことについてもある程度知っており、説明なども上手なシャルロットなら適任だろう。

そう、皆も判断したのか、聞く姿勢になる。

「まず、これが殆どの人が知らないって言うか僕も流に聞いてはじめて知ったことなんだけど、『企業連』って名称は略称でね、正式名称は『統治企業連盟』って言うんだ。前にも言ったけど、複数の大企業とその子会社からなる技術提携を結んだ連盟でISが開発される以前から提携してるんだ。目的は曰く、秩序の維持なんだって」

本当のところはどうか怪しい、って流は言っていたらしいが。

所謂、表向きの目的、らしい。

後、別にISや軍事事業だけではなく、様々な分野にもその専門性を発揮しているらしい。

電子計算機、食料分野、など、挙げれば限がないとか。

「話しを続けるね。それで、企業連も流石に一枚岩ってわけじゃないかね。大きく四つのグループに分けられるんだ。GAグループ、インテリオルグループ、オーメルグループ、レイレナードグループってね。」

「四つもあつたの？そんなにあるんなら企業連の行動はもっと遅いものだと思うんだけど」

鈴が口を挟む。」

ここで単に企業グループが四つあつたことに驚いたのではなく、集合体のトップに四つもあることに驚いたのだろう。

基本的にトップは単一でトップと呼ぶのだから。

どこかの企業もしくは企業グループが他企業を纏めていると思つていたようだ。

「ですわね。企業全体の意思決定にかなりの時間がかかるのでは？」

セシリアも鈴と同じことを思つたのか、疑問を口にする。

俺はそんなことに気がつきもしなかつたわけなんだが・・・。

「うん、最初に流から聞いたときは僕も疑問に思つただけだね。専ら、政治的発言力が強いオーメルグループが企業連の総意を代弁してるらしいんだ。とはいっても、基本的にある程度の会議だとかはされているらしいし、利益も保っているから、他の企業もそこまで不満がある、ってわけではないみたい。まあ、歴史的な経緯から

くる争いとか、民族問題とかは企業同士であるらしいけど」

細かいところとか、常に上に立たれているっていうことに不満はあるんだろうが、概ね問題はないらしい。

今の今まで、そこまでの争いがなく提携できているのもそれが理由なんだろうか。

今度流に聞いたほうがわかるかも、と思いきするが、とりあえずこつちに集中することにする。

「それでね、企業連が元々斜陽企業だった、って言われているんだけど、実際のところISの開発に遅れてただけ、らしいんだ。だから篠ノ之博士の技術を流に提供された後、ものすごい勢いでIS開発を進めていったんだ。それに例外としてレイレナード社は初期IS開発にも積極的に関わってた会社だから、尚更だね。第一回モンド・グロツソで織斑先生と決勝戦で戦ったのもレイレナード社所属のIS操縦者だよ」

第一回モンド・グロツソ当時って第二世代が開発され始めたばかりの頃だったよな。

そういえば、出場者も殆どが第一世代で、第二世代も殆ど実験機の域を出ない不良品、とか流が言っていたことを思い出す。

「ちなみに第二回の優勝者、ブリュンヒルデは今言ったIS操縦者で、織斑先生が出てこなかったことに激怒してたらしいよ」

「そ、そうなのか？千冬姉が優勝したってことに目が行き過ぎてあんまり気にしてなかった・・・」

「まあ、そうだろうね。総合部門でも格闘部門でも、織斑先生には負けたって記録があるし。今度本人に聞いてみるのもいいかも」

・・・あの時、俺が誘拐されなければ、どうなっていたんだろうか。千冬姉にも、その人にも申し訳ない気持ちになってくる。

「コホン」

シャルロットが少し落ち込んだ俺を見て咳払いをした。つとと、ウジウジ悩んでも仕方ないよな。もう起こった事は変えられないわけだし。

「それじゃあ、次は企業連のグループごとの説明と、その企業が作ってるISについて説明していくね。その当たりのISのことはオルコットさん達もそれなりに知っていると思うけど」

おお、俺としては一番気になってた部分だな。他の人とかが使ってるISって結構おもしろいんだよな、奇抜だったり特徴的だったりで。

「私が知っている限りでは、日本の有澤重工ぐらいだな。詳しく知ってるわけではないが、なんというか・・・、変態企業だと名高い、と聞いたな。日本の企業は殆ど変態企業と呼んで差し支えないものを生産してはいるが」

「あー・・・、そうねえ。馬鹿みたいにでかい斬艦刀作ったり、具体的に言うと”刀身20m”前後だとか、アホみたいに反動の強いキャノン砲まがいの物、具体的に言うと百口径を超えた”ハンドガン”だとか、頭の螺子吹っ飛んだものが多いわね」

・・・そんな武器扱えるISあるのか・・・？
いや、まともに扱えないから変態扱いされてるのか・・・。

「えーっと、話しがそれたけど、戻してもいい？」

「あ、ああ、すまないデユノア。続けてくれ」

篤が話しを脱線させてしまった自覚からか、謝罪する。

全く、他のことに関心を持つのは歡心しません・・・、なんちて。

「一夏、そのギャグ寒いわ」

「俺口に出してないだろ!？」

「お前の考えていることなどわかりやすすぎる」

「うーん、ごめん一夏。否定できないや」

最後の良心まで敵に回った・・・。

「あー、ともかくだ。シャルロット、説明の続きを頼む」

「逃げたな」

「逃げたわね」

「逃げましたわ」

もうそこまで引きずらなくてもいいじゃないか・・・。

「一夏って流が言ってた通りの反応するよね、ふふつ。それじゃあ、まずはグローバルアーマメンツ社、通称GA社が盟主で、その傘下

にBFF社、有澤重工、MSACインターナショナル、クーガー社で構成されたGAグループからだね」

「いったい流に何を吹き込まれたのか非常に気になるが今はシャルロツトの話に集中しよう。」

「下手をするとマミられかねない。シャルロツトなだけに。」

「何てことを考えていたら薄ら寒い空気を感じたので、すぐにその考えを振り払った。」

「GA社はアメリカに本社、ビッグボックスを置いた環太平洋圏最大規模の総合軍事企業でね。その資本、資材、人員ともに企業連においても最大級を誇っているんだ。元々、戦車とかヘリとか、軍用兵器を開発していた会社なんだけど、IS開発で足踏みをして、遅れたところを流からの技術提供で何とかISを開発できたらしいんだ。それでもIS開発は企業連の中で一番遅れてるって言われてるんだけど」

「しかし、企業連の中で一番遅れている、というだけで実際はかなりの技術がすぎ込まれているらしい。」

「・・・その技術は企業連製ISのほとんどに使われていたりするのだが。」

「とはいえ、超大企業名だけに、他の企業より優れている部分もあるというのが流から聞いた話らしい。」

「アメリカが戦争大好き！な国というのは偏見があるが、その特徴が色濃く現れている企業でもあるらしく、軍事的イニシアチブをとろうと奮闘してたが、ISの登場、開発の遅れで落下したらしい。」

「その余りある資源でなんとか持ち直したんだとか。」

「ISの特徴としては実弾を扱うことに重点を置いた重装甲重装備

で、ガトリングにバズーカ、ライフルにミサイル、とにかく威力の高い兵器の運用を前提としてるんだ。ISの中では比較的機動性が低い部類なんだけど、その装甲と、シールドエネルギーの存在からすごいタフなんだ」

「ですが、弱点もやはりありますの。エネルギーやレーザーなどの分野の技術レベルが高くないために、エネルギー兵器にとっても弱いという特徴がありますわ」

「とはいえ、企業連の特徴のプライマルアーマーとかもあいつて防御力は高いからこつちが削りきる前に削られるかな。継続的にでも、大きい一撃でも、ダメージを喰らうのは危険だね」

ガトリングを警戒していたらミサイルが、ミサイルを警戒して近づいたらバズーカが。

継続的にガトリングを当てられればダメージは相当なものだし、ミサイルも物にもよるが、当たれば損傷し、バズーカなど直撃すれば絶対防御を貫いてくるらしい。

つまりは状況しだいで一気にやられるということ。

「企業の旧標準機としてSUNSHINE、新標準機としてIS適正が低い人でも安定した運用ができるようにNEW-SUNSHINEが開発されてるね。アメリカ国家代表のローディーさんはGA社の実力者で、IS適正はかなり低いけど、SUNSHINEをベースにした機体『フィードバック』で操作を簡略化したISと、シンプルな戦術を使うがゆえに強い機体を操る実力者だよ」

「IS適正が低いのに戦術と機体だけで国家代表になるって・・・、相当な努力とか必要だよな？」

これでIS適正が高ければ、ある意味納得も出来たのだが。

「うん。だから昔はIS適正も低くて単純な戦い方しか出来ない『粗製』IS操縦者って呼ばれてたらしいよ」

粗製・・・か。

蔑称であり、卑下する対象であり、見下す対象だったのか。女尊男卑のこの世の中で、女性だけのグループでも下に見られることってというのはやっぱりあるのか。

「次はその傘下のBFF社だね。この企業はオルコットさんの方が詳しいんじゃないかな？」

「そうですね。わたくしが知らなくて、流さんから聞いた事を補足説明してくださると助かりますわ」

了解、とうなずくシャルル。

そういえばBFF社？はイギリスにある企業だって言ってたな。詳しいのも当然か。

「BFF社は積極的なM&A、つまりは他企業の合併、買収を繰り返すことで欧州圏第一位の規模を持つ企業でしたわ」

・・・ん？

”でした”？

「何で過去形なんだ？」

「あら、一夏さんにしてはなかなか鋭いですわね。ええ、それも過去のお話ですの。一度深刻な経済危機に陥って、GA社の支援で何

とかかつての資産を取り戻すことにはせ成功したのですけれど、欧州第二位の地位に甘んじてしまいましたの」

「あー、だからG A社？の傘下企業なのか」

そりゃ納得だ。

「それで、企業の特徴ですが、精密射撃、という一点に尽きますわね。B F F社にはメアリー・シエリーさんというIS操縦者がいるのですが、その方の戦闘スタイル、遠距離からの狙撃戦が、B F F社のISの方向性を決めたとまで言われておりますわ」

「B F F社は、火気管制機器F C S、ハイパーセンサーとかに専門性を持つてる企業でね。一k m以遠の精密狙撃すら可能なほどの精度を誇っているんだ」

い、一k m？

いくらISでもそんな距離を狙撃できるのか？

射撃ではなく、狙撃。

何でも、針の穴に弾丸を通すほどの精密さだとか。

「とはいえ、やはり近づかれてしまうと防戦一方になってしまつてという弱点がありますわ。その欠点を補うために、精度を保ちながらもある程度の近距離戦闘も行える、新鋭機『063AN』が開発されましたわ」

「旧標準機が047ANと言つんだ。そしてもう一つ、企業連では珍しいというわけでもないんだけど、四脚、って呼ばれるISも製造されているんだよ」

曰く、ISは空中戦を前提とした物でありながら、それを真つ向から否定するかのように、地面に脚をつけて戦闘を行うことを基本とした機体だとか。

椅子に座るような感じで脚を前に出し、腰部分から背後へ補助としての脚を二本展開するようなものらしい。

他にも、企業連には特徴的な脚部のISが存在するらしく、足そのものにPICを積むことで、より変則的な三次元移動による空中戦闘を可能とした機体もあるらしい。

ISの設計思想を全て無視するようなISが開発されていたりもするんだとか。

発想が他の企業ともまた違うのが企業連のすごい所の一つなんじゃないのか？

話を聞く限りではそう思えてくる。

・・・かなり奇抜だったり珍妙だったりするくせに無駄に性能が高いという、東さんを彷彿とさせる連中である。

「後、まだ説明してない企業なんだけど、ローゼンタール社と技術提携していたんだけど、民族的な問題からその提携は破棄、繋がりは企業連という繋がりだけになっちゃったんだ」

どちらも似たような設立経緯をもつ企業だけに提携していたそうなのだが、民族が違えば対立はおきやすい。

同じ人種ですら争いは耐えないのだから、考え方が違う民族同士ではその争いの激しさがより激しいのだろう。

人って、そう簡単に分かり合えないものなのだと、再認識させられる。

「次に有澤重工だね。有澤重工は名前からわかる通り日本に本拠地を置く重工業系総合企業で、軍事車両、炸薬に専門性を発揮している企業だよ。流が使ってるグレネードキャノンもこの企業の製品だ

ね

「ああ、流の基本装備といって差し支えない背中のある・・・、だよな？。弾速は遅いんだけど、何故か俺は当てられまくるし爆破範囲も広いから上から撃たれるときついんだよな。衝撃力とかも強いから動きを固められて穴だらけにされるしな・・・」

「前にも言ったけど、一夏の動きが単調で読みやすいつてのもあるけど・・・。流はほら、ナノマシンとかの影響で目がいいし、動きとか先読みする能力が高いんだよ。最近だったら発射角度とか弾道の計算もしてるみたいだから回避率も上がってきてるよ」

「それに、訓練してる最中とかも私たちの動きやクセを記憶、データとして検証などをしているのだろう。よく私の動きなどもIS乗っているいないに関わらず真似ているからな。上達の手速も速い」

他人の動きを自分に適した形で学習しているらしい。

少し誇らしげに篤が語る。

兄がすごいと言われて嬉しいのか、若干自慢げだ。

しかもそうだった細かいところに目がいくのか。

さすが双子、って言いたいけど二人ってたしか一卵性じゃなくて二卵性双生児だったような・・・？

まあいいか。

「流の話はここまでにして、説明、続けるよ。有澤重工は実弾主義のGAグループの中で最右翼の企業で、大鑑巨砲主義を謳っているんだ。事実として、流の使ってるグレネードは競技用なのに大火力だし、軍用のグレネード弾はもっとすごいらしいよ」

あ・・・、あれで競技用・・・。

あれ、直撃するとシールドエネルギーが100以上持つてかれるんだけど……。

「それで、開発しているISなんだけど……。何ていうか、企業連の中でも特に異彩を放つててね。脚部が……。うん、タンクなんだ」

……は？

タンク……。戦車か？

「うん、機動性皆無、重装甲な機体。超大容量の拡張領域ハススロットに大量の兵器を格納して、削りきられる前に相手を消し炭にする、ってコンセプト。火力の低いマシンガンとか、ただの物理ブレード程度じゃ、とてもじゃないけど削りきれないんだけど、GAグループのISに共通する弱点として、エネルギー系兵器に装甲が弱いつて弱点があるから、レーザー兵器だと、削りきられるか、削りきるかの勝負になるね」

さっき言ってた四脚以上に、ISの設計思想を無視したコンセプトだな、おい。

匹夫にヒップをえぐられそうで怖い。

鈴が、あんたほんとにそっちの方面が趣味だったの？

と言いたげな視線を送ってくる。

失礼な、俺は健全な男だぞ。

「GAグループ最後の企業として、MSACインターナショナル、通称MSACと、クーガー社だね」

速さが足りない！ってか？

「まったくもって関係ないですわね」

同意するようにブンブンと首を縦に振る筈と鈴。
誰か褒めてくれてもいいじゃないか。
こんなとき流がいれば・・・、うん、弄られるだけだな。

「まあ、一夏は放って置くとして。MSACは電子計算機とかセンサーの電子系分野の技術レベルが高いハイテク企業で、GA社のISに搭載されるハイパーセンサーとか火器管制機器FCISもここが開発してるんだ。特に優れているのがミサイル開発で、企業連だけじゃなく、世界を見渡しても、ミサイル開発のトップって言えるほどのシェアを持つてるんだ。元々軍事用ミサイル開発してたけど、ISが開発されてからはIS用のミサイルを主に開発してるね」

実に13種のIS用ミサイル兵装を開発しているらしいが、そのどれもが優秀な性能を持っているらしい。

流は使ったことはないが、購入し、使用している国や企業も多いらしい。

前方に発射後敵を追尾するミサイル、高速ミサイル、垂直発射された後追尾を開始するミサイル、高性能追尾ミサイル、射出後、一定時間経過後分裂発射されるミサイルなど、多種のミサイルを開発しているらしい。

「ここまで聞けばわかると思うけど、企業連の装備開発を主体にしている企業の中ではかなりの優良企業だよ。企業連以外にも販売してるんだよ」

ふむふむ。

「GAグループの締めくくりに、クーガーだね。この企業は元来、

宇宙開発用のロケットエンジンを開発してた企業なんだけど、ISの台頭でかなり危機に陥ったんだって。今はなりふり構わない人事戦略とかで何とか技術力を高めたんだ。推進翼、ブースターとかに専門性を発揮しているよ。流の話だと、最近トンデモないブースターを作ったらしいんだけど・・・、詳しくは知らないかな」

・・・最後にしてはすごいあっさり解説が終わったな。

まあ、今までの説明が結構長かったし、いいか。
とはいえ、まだ一つ目のグループという・・・。

「次のグループは盟主のインテリオル・ユニオン、アルブレヒト・ドライス、通称アルドラから構成されるインテリオルグループだね」
さて、次はどんな企業なのやら・・・。

「まず、インテリオルはエネルギー効率の良好なフレームとかを開発していたレオ・ネメカニカとレーザーとかに専門性を発揮していたメリエスが合併してできた企業で、それだけにレーザー技術に関してはリーディングカンパニーと言えるほどで、他の企業と比べても圧倒的に優れているんだ」

流が使ってる背中のあるとか、ラウラの時に使っていたあれ・・・
だよな？

確かにとんでもない威力だった。

当たったらシールドエネルギーは確実に貫通してくるし。

「経済危機で出遅れたBFFを抜いて、欧州圏第一位の勢力を誇る企業だよ。大型電源施設メガリスとかを所有しているね。開発しているISはエネルギー兵器の運用を前提としたものだから、エネルギー変換効率が高いんだ」

通常のISがレーザーを撃つのに10必要ならば大体6〜4程度で済むのだとか。

「旧標準機TELLUSはある程度の拡張領域と高いエネルギー効率を備えた機体で、油断するとあっという間にエネルギーを減らされてしまうよ。レーザー兵器はシールド貫通能力が高いから、絶対防御が発動しやすいしね」

なるほど。

さっき言ってたGA社にとっては天敵とも言える企業なわけだ。

「新標準機のLATONAは軽装の高機動機で、そのスピードと高い総火力で相手を倒すって機体で、より前衛的な機体だよ」

より前に出て戦う機体ってことか。

「・・・これは、まったく関係のない話ではあるんだけど・・・」

「ん？何の話だ？」

「うん、流が言ってたことなんだけど・・・」

すごい言いにくそうだな。

「はあ、流曰く、ハーレム企業なんだって」

「・・・は？」

シャルロットは呆れ顔、箒は呆然、鈴は意味不明といった顔をして

いる。

ため息の後に出てきた言葉を理解するのに多少の時間を費やした。

「うん、女尊男卑の今の世の中でも、やっぱり優秀な男性はIS関係のことも雇われることもあるんだけど、インテリオルは九割以上が女性社員で構成されてるからハーレム企業って呼ぶんだって」

・・・今のIS学園ととても似通った状況じゃないか？

けど俺たちは別にハーレムってわけでもないし・・・、どうなんだろう？

「えーっと、この話はここまでにして、気を取り直してアルドラの説明をするよ」

「ドイツでISコアを3機所有している企業だよ。ボーデヴィッツさんの所属してる特殊部隊も3機のISが配備されているからドイツ最強の部隊って呼ばれてるけど、IS開発用とはいえ、単一の企業3機も保有してるんだ」

とはいえ、それぞれのグループ盟主はさらに所有しているそうなのだが。

やはり技術力も政治的発言力も強いだけにそういった貴重なものなども、融通を利かせることができるらしい。

「アルドラはドイツの軍産複合体を形成する企業で、職人気質、つて言うのかな？そういった特徴のある製品が多いんだ。開発しているIS、『HILBERT』は重装甲タイプの機体で、優秀な性能を持っているんだ。その廉価版として開発されたのが『SOLDNER』で、廉価版とはいえ、決して性能が劣っている、ってわけでもないみたい」

普通、廉価版とかコストを削減したもの、というのは性能が下がるのが一般的である。

何故ならまったく同じ技術を使った場合、鉄で作ったものと木で作ったものでは耐久度がまったく違っていいほど違うからだ。

ゆえにコストダウンしてもなお、その高い性能を発揮できるということが、どれほどの技術力が必要なのかもわかるというもの。

「それでインテリオルはIS開発が第一世代の時期でも良好な関係でね、レイレナードグループのレイレナード社、今はトーラス社になっただけアクアビット社と友好的な関係を築いていて、企業連が出来る以前から良好な関係だよ。互いの製品を使うことも多いからね」

ほー、そんなに仲がいいのか。

企業連のISはほぼすべての企業のIS同士でパーツの互換性があるらしいのだが、レイレナードグループとインテリオルグループはその相性が非常に良いんだとか。

とはいえ、ISのコンセプトはある意味真逆と言ってもいいようなものらしいが。

「ふう、これでやっと二つ目が終わったね。三つ目はオーメル・サイエンス・テクノロジー社が盟主のオーメルグループだよ」

度々流が口から漏らしていた企業だったな。

曰く腹真つ黒企業、曰く企業連の総意を代弁する企業、曰く傘下企業のIS操縦者が変態という別な意味で変態企業。

・・・どんな企業なのかまったく想像がつかない企業だ・・・。

「オーメルはイスラエル系の企業で、西アジア周辺に拠点を置いた

総合軍事企業だよ。傘下にローゼンタール社、アルゼブラ社があるんだ」

「歴史的な経緯からアルゼブラ及びローゼンタールとは協力関係にあつて、元々はローゼンタール傘下の企業だったのを、ローゼンタールがBFFとの対立が発生したときに下克上、ローゼンタールを傘下に収めたんだ。アルゼブラも旧名、イクバール社が内紛が起きたのを機に傘下にしたんだ」

なるほど、だから腹黒企業なのか。
下克上に加えて問題が起きて余裕がないときに部下になれ勧告、そりゃ確かに生半可な政治力じゃ出来ないな。
企業連の総意を代弁するなんてできるわけだ。
戦国時代じゃあるまいし。

「その技術レベルは他の企業の例に漏れず高水準で、実弾兵器にミサイル、レーザー兵器に推進装置関連からFCS、ハイパーセンサーと、色んなパーツを開発しているよ。旧標準機のJUDITHは特にこれといった特徴はないけど、汎用性の高い軽装機体で、新標準機のLAHILEはより高速戦闘を意識した機体だよ。どっちも積極的な近接戦闘指向のISだね」

「後、企業連が胡散臭いって言われてる噂が流れてる理由の五割はその会社と思つていいわ。中国で訓練してたときから高官の奴らの愚痴が聞こえてきてたし」

ウンザリ、という表情で言葉を漏らす鈴。

だが、含まれている感情は呆れ以外の感情が込められている気がした。

気のせいか・・・？

「次はローゼンタールだね。財閥系巨大資本グループの統合軍需産業で、貴族とか騎士の家系の人たちが出資して設立された経緯があるんだ。政治的発言力も強かったんだけど、BFFとのイザコザでオーメルの傘下になったんだ。未だにドイツでは強い発言力を持つてはいるんだけど。後、設立経緯が経緯だから高潔な人が多くて、ISが出てからは、なお更少数精鋭の気質があるね。このIS操縦者レオハルトさんも、騎士の家系で家名のレオハルトを継いでるらしいよ」

「おおー、文字通り紳士淑女の企業なのか。」

企業連の中では比較的国に技術を公開するらしいが、オーメル傘下となつてからは以前よりはしなくなつたらしい。

腹に一物持つてたりなんだつたりする企業連の中では、高潔な企業らしい。

「新旧ともに標準機は汎用性が高いISで、どんな状況にも柔軟に対応できる機体だよ。器用貧乏、と言つてしまえばそれまでなんだけれどね」

旧標準機を『HOGIRE』、新標準機を『LANCER』と言つらしい。

外見も騎士を思わせるようなものなので、人気が高いらしい。

「次の企業はアルゼブラ社、旧名イクバル社だね。アジアとかアフリカの大きい範囲を勢力圏とする工業系の企業だよ。勢力圏内に未だに紛争をしている地域が多いから、製品の実戦テストを行っているから、信頼性は非常に高いよ。近接戦闘の指向が強くて、実弾だとか、実体のある兵器ばかり製造しているのが特徴の一つだね」

ほうほう、今までの話を統合するとオーメルグループってのは総じて近距離の戦闘を重視したISが多い、と。

「それで、旧名イクバルは内紛で結構な数の人材を失ったりしたから、大規模な人事刷新を行って、製品の名前から社名まで全部変えたんだ。後、宗教の影響を非常に強く受けてて、アルゼブラ社トップのIS操縦者のサーダさんは宗教者で数学者っていう異色の経歴の持ち主だよ。イクバルの魔術師って異名すら持っていたほどのIS操縦者で、ものすごく強いんだ」

今じゃアルゼブラの魔術師だけだね、と苦笑しつつ付け加えるシャルロット。

「後、さつきも言ってたけど、所属してるIS操縦者の人たちはもう嫌になる位個性的なんだって。話してたときはあんまりにもげんなりしてたから聞けなかったんだけど」

そこまで言われるとむしろ興味がわいてくるんだが……。
機会見て流に聞いてみるかな。

「次で最後のグループだね」

「ええ、そうなりますわね。予想以上に長くなってしまいましたね」
確かにすごい長かった。

次でようやく最後かと思うと、今更ながらに疲労感が襲う。

「企業連最後のグループは、レイレナード社を盟主にしたレイレナードグループだよ。本社『エグザウィル』は湖の上に立てられているね」

確か、今までの話を聞いた限り、千冬姉と戦ったのもこの企業のIS操縦者だったよな。

ちよつと聞くのがほかの企業より楽しみだ。

「レイレナードはこの規模の軍事企業では比較的どころかかなり若い企業で、元々は新興のエネルギー企業だったんだ。新興ゆえに資産とかは厳しい面もあったんだろうけど、それだけに発想が柔軟でいち早くIS開発に着手した企業でもあるんだ。さつきも言ったけど初期IS開発ではトップの企業だったんだって」

のどが渴いたのか、シャルロットが水を口に含む。

「第一回モンド・グロツソではその機体性能で決勝まで進むことが出来た、とまで言われているんだ。逆に言うと当時の基準で織斑先生の操縦技術は言葉どおり世界最強だった。その差を機体性能で縮めたってというのはどれくらいすごいのかわかるよね？」

千冬姉が当時乗ってたISは第一世代だけど、技術は最強だった。そして必殺を旨とする『零落白夜』とその技術でもって世界最強の座に立った。

つまりは、操縦技術で劣っているのにも関わらず、機体性能差だけでその頂に迫ったということ。

「それで、企業連のISは基本となる技術はこの企業を使われたんだ。第二世代型にプライマルアーマーを搭載できるように改修したりしたのもレイレナードグループ。外部ジェネレータを搭載し始めたのもこの企業。プライマルアーマーのデータだけでここまで改造されるなんて流も思ってたみたい」

ただが一つの技術を与えられただけで飛躍的な発展と進展を遂げる。言葉で言うのは簡単だが、実行するには非常に難しい。

「開発しているISは『AALIIYAH』と『ALCIA』。どちらも近距離の高機動高速戦闘を意識したISで、レイレナードが開発してる武装もアサルトライフルにマシンガン、レーザーブレードみたいな近接兵器が多いね。トップ操縦者のベルリオースさんはモンド・グロツソには出ていないんだけど、柔軟な思考の持ち主でかなりの実力者みたい」

・・・ん？

「なあ、なんでその、ベルリオース？って人がトップなのに別の人だモンド・グロツソに出てたんだ？」

「ああ、それはね、まず一つにベルリオースさんはそういう栄光とかにあまり興味がなかったって言うのと、モンド・グロツソでは織斑先生と実際に戦ったのはアンジエさんだったんだけど、そのアンジエさんがベルリオースさんに頼み込んでモンド・グロツソに出たらしいよ？普通はそんなのできないんだけど、そこはほら、企業連だから」

「な・・・、なんだそりゃ・・・」

「まさかその人、戦いが好きだーとか、所謂戦闘狂の人なんじゃないの？」

「鋭いね、まあこれも流から聞いた話だけど、アンジエさんはかなり戦うという行為が好きで、事あるごとに模擬戦とかをやってるらしいよ？織斑先生と戦いたいたためだけにモンド・グロツソに出たん

だとか。・・・まあ、それだけに第二回大会後では直接織斑先生に会いに行ったらしいけど」

「俺のせい、か」

あのラウラの事を思わず思い出してしまふ。

ラウラと同じように、俺に何かを言いたいことも恐らくはあるのだらう。

実際に会わなければ言われるか言われなはいかはわからないだろうし、一度も会ったことが無いのでどうかはわからない。

だが、思うところはあるはずなのだ。

「流も言ってたけど、悩んでも仕方ないと思うよ？ほら、そんなにあれなら一夏がアンジェさんと戦えばいいんじゃない？一夏が強かったら、納得もすると思うよ」

「あー、つまりあれか？特訓あるのみか」

強く、か。

強くなりたいな。

「っと、悪い、湿っぽくなつたな。次の企業頼むぜ、シャルロット」

「了解。ようやく最後の企業かな。最後はスウェーデンに本社を置くトーラス社だよ」

「あー、長かつたな。やっと最後かと思うとちょっと力が抜けるな」

いや、話を聞くだけなので力むのも少しおかしな話ではあるが、そこから辺は気分だ。

とはいえかなり長かったことには変わりはない。

「トーラス社・・・ですか。企業連の中でも浮いていると言いますか、異彩を放っているといえますか。浮世絵離れした技術者の多い企業で、企業連の中でも異端の企業と聞いていますわ」

一応は欧州に存在する企業だから知っていたんだろう。
異端の集団の中の更なる異端。
それは最早異常とも呼べる者たちの集まり。

「うん、その認識で正しいと思うよ。流もトーラスの人は篠ノ之博士と同じレベルに頭が吹っ飛んでるって言ってたから」

・・・さつき束さんと同じような奴らなんじゃないかと考えたが事実だった件について。
うん、なにそれこわい。

「このトーラスっていうのは、今は無くなっちゃったアクアビット社とG A社傘下の企業G Aヨーロッパ、通称G A Eを母体とした企業なんだ。技術提携を結んでいた両企業がほぼ同時期に壊滅に近いほどの損害を被ったときにある程度の資産を残していたG A Eにアクアビットの技術者が合流して、レイレナードの出資で興された新興企業だよ」

「その設立経緯から、G A E、アクアビット双方の特徴を色濃く残していますの。先ほど浮世絵離れしていると言ったのはそう言ったことが理由ですわ」

「アクアビットのプラズマ兵器、F C S、シールドエネルギー他プライマルアーマーの技術にG Aの技術を持っていたG A Eの装甲や

フレーム技術、どの技術もレベルは高いよ。流の使ってたアサルトアーマーもこの企業が最初開発したんだ」

「アサルトアーマーって、あの流が一瞬爆発したように見えただやつか？」

あれ正直いきなり流が爆発した！？とか思っただびっくりしたんだよな。

「うん、通常、機体周囲に球状に展開して常に循環しているそれを爆発させるような形で自身を中心とした360度の全周囲攻撃をする企業連の第三代兵装。プライマルアーマーが企業連製の第三代型には標準搭載されているのと違ってこっちは搭載してないISも多いけどね」

まだデータを収集しているらしいが、ほとんどのデータは集まったと流は言っていたらしい。

流のそれも、まだ不完全だったがそのうちバージョンアップするのよ。

「・・・というかISは不完全、武装も不完全と流はモルモットなのかと疑っちゃうな。いくら急ごしらえでも」

こちらへんが腹黒い理由なのかね・・・？

「あー、その辺はわからないかな。流も知らないって言ってたし」

「というかそんなダメダメな機体であそこまでの性能をもたせた企業連の技術に驚くべきか流がすごいのか・・・」

よくよく考えるとどっちもすげえ……。

「まあ、その話はおいとして、ISの説明をするよ。トーラスの標準機ARGYROSはすべてのパーツがトーラス製のISで、珍しい全身装甲フルスキンタイプのISだよ。その性能は高いシールドエネルギー量と高出力大容量の外部ジェネレータ、それに物を言わせた高濃度のプライマルアーマーに高出力高負荷の推進装置でエネルギー兵器への適正も高い高性能なISだよ。攻撃性能、防御性能に耐久性、重装備ながら最低限の機動性も備えてる機体だよ」

「確か、スウェーデンの国家代表はこのIS操縦者だったわね。人から聞いた話だけど、企業連のIS操縦者の中でもとんでもなく強いらしいわよ」

そんなに強いのか。

「というか、企業連って一体何人IS操縦者がいて何機ISのコアを持っているんだよ……」

その気になれば戦争できる戦力だよな？

「ふう、これでようやく終わりかな？何か他にも聞きたいこと、ある？」

「あのさ、企業連って何人IS操縦者いるんだ？できればコアの数も知りたいんだけど……」

「あー、ごめん、流石にそれは流も教えてくれなかったよ。一心重要機密だしね」

残念。

まあそりゃそうだよな。

「ではシャルロット、私からも聞きたいことがあるのだが。話を聞いていたら企業連の製品を使えば第三世代機とも互角に戦えるように思えてくるのだが・・・実際にはそのようになっていないのは何故だ？」

言われてみると不思議だな。

企業連の武器を使えばそれだけで性能が上がるといっても過言じゃないように思えてくる。

「ああ、それね。企業連って言うのは、狡猾なんだ。それを企業連以外の企業とか国家に販売するとき、性能を下げた販売するんだよ」

「しかし、それだけでは問題があるだろう？」

「うん、重要なのはそこなんだよ。企業連はどの製品も実験段階の物であり、コストもかかるため、自社でテストを十分に行ってから販売する、って名目で劣化版の製品を世に送り出しているんだ。それでも十分性能は高いけどね。それで、その完全版の製品を販売するころには、さらに性能が高いものが販売されてるって寸法だよ」

「それでか・・・」

なるほど・・・、腹黒いだの狡賢いだのいわれてた理由のひとつがこれか・・・。

並大抵の政治力では到底真似できないことだろう。

「もういいかな？もう疲れたから流石に終わりにしたいんだけど」

全員聞きつかれていたのか、この話はここで終わりになった。

今度、他にいくつか流に聞いてみるかな。

「 をやるのか? 」

『 はい、企業連全体の決定です 』

「 …… 」

『 ですが、少し不安要素も。ISのコアネットワークを使用して何者かがアクセスした形跡が発見されました。おそらくは…… 』

「 なるほどね……、注意だけしとくか。話は終わりか? 」

『 いえ、後ひとつ。近いうちに二人、そちらへ送りますので、用件はそのとき彼女たちに聞いてください 』

「 あいよ 」

そういつて通信を切る。

ISのコアへとアクセスできる人間なんて、数が知れてる。
……はあ、また振り回されることになるかな?

第マイナス弐話 この感覚・・・行くぞ！（前書き）

ゴミナント、その称号は俺にこそ相応しい・・・。

よく来てくれた。

更新は本編などではない。

騙して悪いが番外編なんだな、足踏みしてもらおう。

ということ番外編です。

第マイナス式話 この感覚・・・行くぞ！

四年に一度、行われる大規模な大会。

世界中の国々が己が威信をかけて行われる世界最大規模の戦い。

生身の人間が鍛え上げた肉体によって競うスポーツではない。

人間が戦うというのは同じだが、行われるのは兵器同士の戦い。

そう、たった一日にしてその最強の二文字を与えられた兵器、インフィニットストラトス。

これから行われるのはその大会の記念すべき、兵器の運用を前提としたものを使用して競うもの催しを記念と呼ぶのもおかしい事だが、ともあれ記念すべき第一回目。

第一回モンド・グロツソ、その決勝戦だった。

正直なところ、ここまで来るのは楽、としか言い様がなかった。

まず、強いとはいえ、操縦経験はこちらのほうが圧倒的に上であったし、ISも第二形態にすらなっておらず、単一使用能力すら発現していない者たちだったからだ。

自惚れではないが、自分の技量、暮桜の文字通り必殺の攻撃が合わさり、相対したすべてのISを撃破してきた。

・・・だが、これから戦う相手は違う。

余計な話になるかもしれないが、所謂『カン』というのは大きく分けて二種類ある。

本能で感じ取る野生的な感、直感と、経験から導き出される予測とも言える勘、その両方が敵は強い、そう感じさせた。

新興企業レイレナード社の最新鋭の機体、試作型の第二世代ながら

非常に高い完成度を感じさせるISに搭乗している。

操縦者名『アンジエ』、機体名『オルレア』。

カナダの代表はベルリオーズという人物だったと思っていたが、出てきたのはこいつだった。

最初は新しい機体に乗っているだけのやつとしか思っていなかった。だが試合を見てその考えを180度変えた。

むしろ一回転する勢いでもある。

強い。

その一言に尽きる。

勝利への貪欲さ、そして勝利への道筋を掴むことのできる精神力、私に及ばないまでも高い技量。

第二形態へと移行はしていないまでも、相当な経験を積み、高密度の訓練を行ってきたのは一目瞭然だった。

私を除けば頭ひとつ他の操縦者より飛び出ているほどだった。

そこで思考を打ち切り、目を開ける。

ハイパーセンサーがあれば目を閉じていても視覚情報が得られるが、そこはやはり己の目で見たほうが判断も早くなる。

そして閉じる必要もなければ、閉じる余裕もない、そう思わせる相手だ。

「モンド・グロツソに出ている連中は全て国家代表だからそこらの操縦者よりは強いと思っていたが、拍子抜けだった。だが、お前は楽しませてくれそうだ、織斑千冬」

目の前で黒の装甲に身を包んだ相手、アンジエを見る。

「お前は他の奴らとは違う。その強さも、信念も、覚悟も。私のほうが圧倒的に技量も経験も劣るだろう」

だが、負ける気はない。

そんな空気が伝わってくる。
だが、

「生憎だが私も負ける気はなくな。それとも言葉でベラベラと喋って自分はお前より弱い、だから負けても仕方がないなどという言い訳でもするのか？」

わかっていながらも挑発する。
おそらく、まったくの無意味だろうが。

「フフツ、ここまで来れば言葉は不要、か」

試合開始まで後五秒。

雪片を握り締め、相手を見据える。

試合開始まで後四秒。

相手はそのISの武装を展開する。

試合開始まで三、二、一、試合開始！

その合図と共に互いに動き出した。

暮桜の出来ることなど、たかが知れている。
せいぜい、近づいて切るぐらいだ。

警告、敵IS、オルレアです。専用の大型レーザーブレード
『MOONLIGHT』を装備しています。

高威力の近接兵装に注意してください。

暮桜から警告メッセージが来る。

マシンガンなども装備しているが、やはり決め手はレーザーブレード

ドなのだろう。

ならば互いにやることは同じ。

相手よりも早く、相手を切り落とすのみ……！

奇しくも互いに同じことを同時に考えていたせいか、そろって瞬時加速による突撃を行う。

私は上段へと雪片を構え、相手は右手を左肩あたりに構える。

零落白夜は、まだ発動しない。

「はあ！」

「ああ！」

私は上段から真下へと、相手は袈裟懸けにその光の刃を振るう。

しかし、所詮は互いに予測していたことだ。

相手は横にずれることですれ違いざまに私へそのブレードを振るい、私は相手が移動した方向と反対側に回避行動をとることで互いに無傷で済みます。

やはり、強い！

刹那の時間の中での判断力と行動力に予想はしていたものの、やはり驚く。

技量が圧倒的に劣ると自ら言っていたが、他の操縦者
加えて瞬時加速で加速した状態での軌道の変更など、並みの技量で
できることではない。

自分でそれが出来るからこそ、その難易度がわかるというもの。

「この感覚……、面白い、行くぞー！」

言葉とともに笑みを浮かべてこちらへ向かってくる。

この敵に対して、守り、というのは愚作。

受けに回った瞬間、気持ちで負け引いた瞬間、おそらく負けるのは

私、そしてそれは相手も同じだ。
故に互いに互いの間合いへ入ってその刃を振るう。
右回りに相手の周りを旋回するように距離を詰めて、雪片を振るう
が、上へと上昇され、回避される。
そのままレーザーブレードをこちらへ振りながら下降して来るが、
後ろへ引くことで回避する。
やはり、このままでは埒が明かない。
そう考え、自身の必殺を繰り出すための構えを取る。

「・・・ッ！」

空気の変化を感じたのか、それを警戒する相手。
今までも何度が使っているのに、大体の能力は知られているだろう
が関係ない。

全て切り伏せるのみだ・・・！

「はあああああ！」

私の意志に答えて雪片が光を放つ。
ただの一つの例外もなく、エネルギーそのものを消滅させる能力。
それ自体もエネルギーでありながらエネルギーを消滅させるとい
う矛盾、既存の物理法則を無視したその力を、『零落白夜』を発動す
る。

相手はそれに対してレーザーブレードをそのまま振るってくる。
だが。

「それは失策だったな！」

「な、ぐうっ！」

今まで戦ってきた相手に、エネルギー兵器を使っていたISはいなかったので油断していたのだろう。

恐らくは当たれば負けるといふ程度の認識だったと予想できる。

その『零落白夜』に触れたレーザーブレードが触れた部分から先が消滅していく。

そのまま『零落白夜』を直に食らう相手。

「がっ、ぐうぐうっ！」

だが、高出力のレーザーブレードを先に消滅させていたからか、『零落白夜』に籠めたエネルギーが若干減っていたらしく、仕留めきることが出来なかった。

落下しながらも、体勢を戻すために急停止する。

しかしこれで大方の勝敗は決まった。

相手のシールドエネルギーが残っているとはいえ、文字通り風前の灯だろう。

次で決める、そう、思ったときだった。

「は、ははは、はははははは！」

歓喜の笑いを上げている相手がいた。

「強い、強いな、これが本物か！織斑千冬！だが、負けるつもりはない……！」

すでにマシンガンも取り落とし、背中のキャノンもエネルギー不足から使い物にならないというのに。

その状態に反して強い意志を宿した目を私へ向けてくる。

「過程は関係ない……、最後に立っていれば！」

それは勝利への執着、強者との死闘を望む戦闘意欲。そしてそれは、そのISにも影響を及ぼす。

操縦者の意思に答えるかのように、その装甲が光に包まれていく。その光景を見てまさか、と考える。

否定する材料もなく、それが純然たる一つの現象だと言っことを理解する。

・・・『セカンド・シフト第二形態移行』だ。

元々、技術は私に及ばないまでも高いことから、かなりの経験を積んだことは疑いようがない。

よほどの長い時間をIS訓練に回したか、もしくは訓練内容の濃いものだったか。

そのどちらかでもISそのものに蓄積される経験はかなりの物だろうし、操縦者との相性もより最高の状態へとなっていくだろう。

そして詳細は定かではないがたった一つ言えることがある。

相手は私と同じく、一種の『壁』とも言えるものを超えたということ。

私の今なお進んでいる領域に足を踏み入れた、スタートラインにたったと言っこと。

「これは・・・」

その時、相手自身、自分のISの変化に驚きながらも納得もしているようだった。

身に着けてから、ずっと自分と一緒に存在していたのだ、当然とも言える。

ISの背中にマントされていたキャノンは無くなり、代わりに恐らくは推進装置と思われるブースターが付いていた。

恐らくは同種のものであろう追加ブースターが肩にもついているが、少し特異だった。

ISにはPICというものがある故に姿勢制御のブースターはいらないので、純粹に加速のためだけに付ける事が多いのだが、そのの噴射口は両肩生えた三叉のようなブースターは横を向いている。

「これが、そうか。ククク、ここからが本番ということか」

「・・・」

無言で雪片を構える。

相手の武装は左手にも右手と同種のレーザーブレードがマウントされている。

『零落白夜』ならば何の問題も無く無力化できる、はずだが。

「さあ、行くぞ！」

「っ!？」

そして気を引き締めていたのにも関わらず、油断も慢心もしていない、最大レベルの警戒だったのにも拘らずその相手の行動は驚きを隠せなかった。

ハイパーセンサーには捉えられていたが、私の視界からは一瞬にして消え去ったのだ。

瞬間、ISからの警告で全てを理解する。

真横へと瞬時加速を行ったのだということ、両肩のブースターはそのために増設されたということ。

その一瞬の驚愕と思考は隙を生む。

そしてそのまま私のISの旋回が追いつかないうちに、背中に増設されたブースターを使用した瞬時加速が発動する。

「があっ!?!」

回避も防御も間に合わないうちに、レーザーブレードで切りつけられる。

・・・直撃だ。

咄嗟に左腕で防御したものの、左腕の装甲はひどいものとなっている。

絶対防御も発動したからか、シールドエネルギーも大量に失われている。

先程、『受け』に回れば負けると考えていたというのに様子見をしたのは致命的すぎた。

「くくつ、弱腰になったな?その隙、逃すはずもないだろう?」

「全くもってその通りだな・・・」

つまりは、恐れたのが今の大打撃の原因だ。

いや、戦うことに關して恐れを抱かないことなど愚者のすることだが、それでもなお恐怖と戦って前を向くものに勝利の女神は微笑む。私はそこから逃げたのだ、勝利の女神がこちらを向くはずもない。

「さて、互いにエネルギー残量も心もとない。残念だが、さっさと決めるとしよう」

そういつて攻撃の構えを取る相手。

私も無言で剣を構える。

・・・この敵に対して、速度で勝つのは現状、不可能だ。

それほどまでにこいつの行う瞬時加速は高速で、また変則的だからと言って防御に回るつもりもない。

『後の先』で持って制す。

「……」

「……」

静寂。

大会という以上、観客もいるが、その観客すらも息を吞んで見守っている。

その静寂と膠着は、永遠に続くかと錯覚するほどだった。しかし。

「っ！」

「……！」

何の合図もなしに相手が動き出す。

よくある、石が落ちた、などの現象で互いに動き出したわけではない。

あれらは所詮動き出す切欠にすぎないのだ。

前後左右に瞬時加速を行いながら、私の周りを飛び回ってきた。

瞬間速度は同じでも、連続使用など今のエネルギーでは出来ない私は、後手に回るしかない。

防御という行動をとれば不利となる現状、非常に不味い。

だが、武器の都合上こちらへ必ず突撃してくるタイミングが必ずある。

それを見極め、迎撃するのではなく、こちらから攻撃する方法をとる。

オルレアが後ろを高速で横切っていく。

まだ。

そのままの速度で左に影を残す。

まだだ。

こちらに背を向ける形になったそれを、両肩左右のブースターをそれぞれ反対方向へ向けて瞬時加速、こちらへ方向転換する。

まだ違う。

そのまま右側へと平行移動する。

相手がいる方向へと瞬時に旋回する。

そしてそのままの勢いでこちらへと最大速度で向かってくる。距離は数メートル程度、たいした距離ではない。それをカンで感じ取っていた私は『零落白夜』を発動する。

「はああああああああ！」

「悪いが、見切っている！」

相手はもう回避行動は取れない。

私も後には引けない。

互いに覚悟を決める。

こちらも瞬時加速を行い、相手の間合いであり、自分にとっての間合いでもある場所へと移動する。

数十、数百分の一の”防”を抜いた”攻”の仕合。

そして……、その交差は一瞬だった。

「く……、くくっ、ははは。どちらが勝ってもおかしくなかった」

見上げる空に存在する色は、桜。

地に堕ちていたのは、黒だった。

オルレアンの子爵は主たる物へと勝利の美酒を捧げる事は適わらず、
栄光を掴む事も出来なかった。

「でも」

だがその顔はどこか満足したような表情だった。

「運で戦いは決まらない。……お前の勝ちだ、織斑千冬。ブリュンヒルデ、その称号は、お前にこそ相応しい」

「その後のことは簡単だ。観客からの鼓膜が破れんばかりの戦いへの賞賛と、交わしたのはまた、同じ場所で再戦をすること」

互いに互いが好敵手だと、そう思ったからこそその戦場で交わした約束なのだと思うた。

根拠なんてない、だが、そうだと確信していた。

「……まあ、その約束を果たすことは出来なかったが……な」

その顔は少し残念そうでした。

俺がいなければ、あんなことにならなければその約束は果たされ、歴史に残るであろう激戦が繰り広げられるのは、想像に難しくなかった。

「そんな顔をするな。変なことを考えるくらいなら、強くなつてさつさと手がかからないようになれ」

ため息とともに吐かれた言葉は呆れ顔とセットだった。

「まあ、お前ならあいつとも互角に戦えるようになるだろう。・・・期待している」

それは自分の果たせなかった約束を、俺が果たせと暗に言っているのだろうか。

実際はわからない。ただ。

「・・・千冬姉えの弟として、最強の弟として、誰よりも強くなつてやるぞ」

その決意を、再び胸に誓った。

千冬姉えが倒してきた人たちへ何の恥もなく、俺が織斑一夏だと、正面から言えるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7256s/>

IS インフィニット・ストラトス ~白がある黒がある~

2011年12月18日23時54分発行